

協同教育実践資料 21

# 「響き合い、高め合う学び」を創る 研究的実践

愛知県犬山市立犬山中学校 著  
鍵野英夫・杉江修治 監修

# 「響き合い、高め合う学び」を創る研究的実践

愛知県犬山市立犬山中学校 著

鍵野英夫 監修  
杉江修治



## はじめに

今から 3500 年前、中国の韻という国の陽王という人は、洗面器の底に（苟日新 日日新 又日新）を書いて、顔を洗うときこの言葉を口で何回も言いながら洗ったという。

この字は、

苟日新	・・・・	まことにひにあらたに
日日新	・・・・	ひびにあらたにして
又日新	・・・・	またひにあらたなり

と読み、

意味は、

苟日新	・・・・	昨日の私は今日の私ではありません。
日日新	・・・・	今日の私は明日の私ではありません。
又日新	・・・・	毎日自分を変えていきます。

です。

新しい年を迎えると、今年はやるぞーと思うのですが長続きしません。だから、こうして毎日顔を洗うたびに口で言って続けていったということです。

「学校は、勉強するところ。」とよく言います。中学生の時代は、心も身体も大きく成長します。大人のもの見方や考え方が、少しずつできるようになってくる中学校での勉強とは、「頭をきたえること」「心をみがくこと」「体をきたえること」の3つです。この3つをバランスよく身につけていくことが、卒業後の自分の進路を一步ずつ着実に歩いていくことにつながります。分かりやすく言えば、「自分の長所や特技を伸ばして、豊かな人生にするために勉強をする。」ということを学ぶということです。

わたし達、教職員は、その手助けをしていくことになります。生徒達の笑顔や明るくさわやかな挨拶、素直な返事が校内のどこにも溢れ、朝夕の学級では、歌声が響き、掃除の時には、懸命に廊下や渡りの床を磨き、机や椅子を運ぶ、校内で当たり前のように見かける様々な場面です。それに安心をし、胡座をかいては、その学校の進歩は止まります。子ども達の更なる成長を願い、教職員が日々研鑽を積んでいくことが必要です。そして、子ども達の成長の姿を一日一日肌で感じ、一緒に成長していくことができるように努めていくことです。

この研究紀要は、本年度の取組のまとめであり、来年度へ向けた課題でもあります。各教科の反省を活かし、学校評価のアンケート結果を真摯に受け止め、良い点はさらに伸ばし、改善すべきところはどこか、見直すべき点はどこか、手立てを考えていかなければなりません。本校のさらなる発展のために必要なことは、若い先生方の力量向上を図るとともに、中堅やベテランの先生方の個性と力量を結集することです。現職教育のさらなる充実を目指すと共に、ニーズに応じた力量をつけるために、常に学ぶ職員集団でありたいと思っています。

平成 26 年 3 月 吉日

愛知県犬山市立犬山中学校長

鍵野 英夫

## 目 次

はじめに .....	鍵野 英夫 .....	3
犬山中学校の現職教育 2013 .....		5
国語 .....		13
社会 .....		27
数学 .....		41
理科 .....		61
音楽 .....		77
美術 .....		83
保健体育 .....		99
技術家庭 .....		117
英語 .....		127
実践研究 1 .....	大野 佑樹 .....	150
実践研究 2 .....	金原 佑介 .....	160
実践研究 3 .....	東猴 弘晃 .....	173

# 犬山中学校の現職教育 2013

## 現職教育でめざすもの・基本方針

### <基本的な構え>

教育活動の中心は「授業」である。生徒指導・特活・道徳・部活を分けて考えるのではなく、授業を中心とした教育活動全般で、同じ方針で生徒を育てていこうとする積極的な考え方が必要である。

### <研究を進める上で>

- ◇研究に取り組む中から、学びの集団としての生徒相互、教師と生徒の人間関係を育みたい。
- ◇教科・学年を越えて確かな学力の定着をめざした取組を行い、教科指導の質の向上を図り、基礎・基本の定着をより一層めざしたい。
- ◇授業公開の推進や授業について常に子どもの姿を通して話し合える雰囲気づくりを進めたい。
- ◇少経験者の研修の場《フレッシュセミナー》を実施し、教師の資質向上を目指したい。
- ◇教師の授業づくりや指導技術の向上を目指して、学び合い高め合う協同を推進する。
- ◇研究に取り組むことで、職員相互の人間関係を深めたい。

## 1 2013 年度研究主題

確かな学力の定着をめざした「響き合い 高め合う 学び」を  
— 「みんなで分かるようになる」授業づくりを通して—

### 主題設定の理由

平成 23 度から、「響き合い 高め合う 学び」をテーマに現職教育を進めてきた。響くとは、音や振動が伝わり及ぶことをいう。学びにおける「響き合う」とは、授業における主体的なかかわりを通して個の思いや考えが表現され、伝え合うことでクラス全体に広がり、さらにもう一度個の考えに影響を及ぼして考えを深めることと考える。こうした響き合いの中で、互いに良い影響を与え合い、高め合うことができる学びの実現をめざしてきた。今年度は、その「響き合い 高め合う 学び」の実現が、確かな学力（知識や技能だけでなく、主体的に判断し行動してよりよく問題を解決する資質や能力）を身に付け、さらに定着することをめざすことをねらいとして進めていきたい。

昨年度の振り返りからは、学びの集団としての人間関係の向上や基礎・基本の定着が若干甘く、学習を十分には高め深め合うことができなかったという反省点があげられた。また、教師の指導力向上も重点課題としてとらえられている。学校評価からは、生徒と教師の間に学びへの評価や感じ方に大きく開きがあることが分かる。その差を埋めていくことが今年度の現職教育には不可欠なことと考える。授業づくりを原点に戻って見直し、授業を公開し合って教師自身が高め合っていないといけない。一方、生徒の教科の力の向上を目指した取り組みは各教科で意識的に取り組まれ、授業のまとめの充実や音声トレーニングなどの協同による反復練習も、少しずつではあるが効果を上げてきている。生徒の活動を認めながら、授業のまとめを大切に教科指導の充実・指導力の向上を目指してさらなる取り組みを進めたい。

生徒による書記会（授業創造会）は、年間 3 期にわたる授業改善交流週間に短期目標を立てて、生徒が主体的に授業に取り組む活動をリードしてきた。3 年間全校体制で行ってきた「目標→授業→ふりかえり」という活動によって、その期間における生徒の主体的な学びは定着し、学びが次第に我が

事としてとらえられるようになってきたという成果が見られた。その期間の毎時間の授業の振り返りや評価を教師からもらう活動も定着し、生徒と教師で授業を共に創り上げるという一体感が高まった。また、新しい取り組みとしては、生徒発案で行った「挙手大会」である。「みんなもっと授業にかかわりたいと思っている」「授業で分かるものに対しては発言したい」という生徒全体の意見を反映したこの取り組みは、生徒の中に浸透し、今まで積極的になれなかった生徒も第一歩を踏み出すきっかけとなった。しかし、一方では、学年別に定めた1年間の学びのゴールや学級ごとの短期目標が十分に意識できない時があったり、短期目標自体が難しかったりするという課題もあげられた。

昨年度の成果を活かし、反省点を踏まえながら確かな学力の定着をめざした「響き合い 高め合う学び」の実現に努めたい。「全ての生徒への学びの保証・学びの深まり・確かな学力の定着」を主眼にした犬山市のめざす教育の実現のためには、自ら学ぶ生徒・自ら学ぶ教師の姿は不可欠である。教師の資質向上を重要課題と捉え、積極的な授業公開と振り返り、主体的な授業視察、学び部会・教科部会の充実、若手教員の力量向上を目指した「フレッシュセミナー」の開催などを行っていきたい。

## 2 研究の内容

### (1) 求める生徒の姿（学びの三本柱）

能 動	協 同	成 就
人・もの・ことと「かかわる」	人とかかわりながら「高め合う」	自己をみつめ「ふりかえる」
「人・もの・こと」に関心をもち、それらに意欲的、主体的にかかわりながら学習を進めようとする。 自らの学力向上をめざして、主体的に学習に取り組もうとする。	人とかかわりの中で、考え方を伝え合い、互いを認め合いながら、高め合おうとする。 共に学ぶ学びの集団として、みんなで成長しようとする。	自らの思考・判断・表現と、仲間の思考・判断・表現を、様々な観点から振り返り、自らの学習を方向づける。そして、家庭学習にも意欲的に取り組み、基礎学力の定着を図ろうとする。

### (2) 教師が培いたい力

- 教科の本質に迫るための単元・題材・主題などの構成のあり方
  - ・学びを通して身に付けさせたい力（基礎・基本）の分析
  - ・効果的に単元（題材・主題）のねらいにせまり、習得できる単元（題材・主題）構成の工夫
  - ・生徒の思考過程と、身に付けさせたい力（基礎・基本）の系統性を明確にした指導計画の作成
  - ・基礎・基本の定着を図るために、教科・学年として統一して取り組む内容の工夫
  - ・基礎・基本の定着を図るために、毎日の宿題や休日課題の工夫
  - ・振り返りで本時の学習内容を確認し、定着を図る展開の工夫
- 「響き合い高め合い」の見られる授業のあり方
  - ・響き合い高め合う場面の設定の仕方の工夫
  - ・生徒が主体的に学習に向かい、学びを進めることができる授業の工夫
  - ・単元（題材・主題）構想において、年間を通して高め合い合う場面の設定
  - ・繰り返し学習して力を付けることのできる授業の工夫

### (3) 「みんなで分かるようになる」授業づくりの十七か条

#### 子ども主体の授業づくり

1. 生徒は主体的に学び、参加度は100%である
2. 生徒の主体性を引き出す工夫がされている
3. 明確な目標があり、生徒は授業の導入で学習の筋道を理解して授業に取り組んでいる
4. 計画的な時間配分とピタリ終了の授業である

#### 学習規律の確立

5. 望ましい学びを支える基本的な学習規律が確立されている
6. 学び合いのための学習ルールが確立されている（話型、グループ活動の手順、伝え合い・話し合い活動の手順等）

#### 課題提示と追究の方法

7. 学びたくなる・追究したくなる課題である（課題提示の工夫、課題づくりの工夫、課題の選択）
8. 追究し続けることができるようにするための手だてが施されている
9. 板書はわかりやすい量と文字の大きさにレイアウトされている
10. ノートやワークシートへの適切な筆記指導がされている

#### 表現活動（言語活動）話し合い（交流）

11. 自ら進んで表現しようとしたり、話し合ったりすることができる手だてが施されている
12. 表現活動の工夫、話し合い活動の工夫、伝え合い活動の工夫があったか
13. 教師は、豊かな表情・適切な声量で分かりやすい言葉づかいをしている

#### 仲間で支え合う授業づくり

14. 「どの生徒も仲間と共に高め合うことができる」ための手だてが、集団や個に施されている
15. 「どの生徒も仲間に支えられて成長できる」ための手だてが、個へ施されている

#### 自己評価（ふりかえり活動）

16. 学力の定着を目指したまとめ・ふりかえりがされている
17. ふりかえりカード（自己評価・相互評価）の活用や次時への生かし方が適切である

### 3 研究仮説

- ①授業のまとめを大切にした教科指導の充実・指導力の向上を目指した取り組みを進めることで、確かな学力を身に付けさせることができるであろう。
- ②本時の課題を明確にし、「みんなでわかるようになる」授業づくり十七か条にそった授業づくりの工夫を進め、「響き合い高め合う」場면을効果的に授業の中に位置づけた授業実践を重ねることで、生徒の響き合い高め合う姿を引き出すことができるであろう。
- ③生徒が学年ごとに「学びのゴール」を設定して、3期にわたって「短期目標→授業→振り返り」に臨み、その活動を充実すれば、求める生徒の姿を引き出すことができるであろう。

### 4 研究の手だて

#### (1) 手だて

- ①基礎・基本の定着をめざした取組み（教科・学年統一）

基礎・基本の定着のために教科や学年で統一して取組みを行う。指導者や教科による差をできるだけなくし、教科・学年として生徒を育てていきたい。



②指導案ライトを用いた公開授業・外部への授業視察（全職員1人1回以上）、フレッシュセミナー  
指導案ライトを用いた授業公開を1人1回以上行う。その後、ふりかえりカードを使用して授業者の反省を行う。生徒主体の授業づくりと確かな学力の定着を実現するには、教師の指導力向上が不可欠である。教師が教科や学年の枠を越えて互いに見合うことで、生徒の響き合い、高め合う姿を引き出すことにつながる授業実践のヒントを得られる。

③書記会（生徒主体の学びの取組）

生徒の主体的なかかわりなくして、響き合いや高め合いは生まれない。生徒主体の学びの取組を積み重ね、「響き合い高め合う学び」にせまりたい。

## （２）手だての具体的な取り組み

手だて①：基礎・基本の定着をめざした取組

- ・基礎的、基本的内容のチェックを、小テストやコンクール形式で、学年対応として進める。
- ・家庭学習の内容を具体的に提示して、基礎・基本の定着を求める。
- ・家庭学習課題の定着を求めて提出への指導を繰り返し行い、また定期的に時間を設定して定着度を確認する。
- ・授業の中で、まとめの時間を大切にし、本時の到達度を生徒に伝える。

手だて②：指導案ライトを用いた公開授業・外部への授業視察、フレッシュセミナー

- ・「みんなで分かるようになる」授業づくりの十七カ条にそって作成する。
- ・「響き合い高め合う」場面を授業の中に位置づける。
- ・単元（題材・主題）と、本時の学習の時間を明確にする。
- ・学習過程の中に、時間と学習形態を記入し、生徒の学習活動または主たる「発問の流れ」を記入する。
- ・生徒の主体的な活動や高めあうための指導者の支援・コーディネートについて、十分に考慮する。
- ・授業後、ふりかえりカードを使用して振り返りを行う。
- ・ふりかえりカードにおいて自己評価と反省をした後、校長・教頭に指導を仰ぐ。
- ・計画的に外部への授業視察を計画し、出かける。
- ・少経験者の研修の場《フレッシュセミナー》を実施し、教師の資質向上を目指す。  
※学校訪問・要請訪問の研究授業は細案で、それ以外の普通の公開授業は原則「指導案ライト」で行う。

手だて③：書記会（生徒主体の学びの取り組み）

ア．ねらい

- ・学級書記により組織、運営される全校書記会・学年書記会を行い、同じ目的をもって学習を進めていくことで、全校生徒による生徒主体の授業展開を作り出す。
- ・生徒が掲げた目標を達成できるような生徒主体の授業を展開するために、協同学習を基本とした教師の授業改善を高める。

イ．書記会の取り組み

- ・書記会は生徒主体の授業展開をつくり出すための話し合いの場・意思疎通の場とする。

- ・全校書記会で、生徒により提示された「話す」「聴く」「かかわる」それぞれの項目における努力目標（レベル1～4）を元に、年度当初に学びのゴールを設定し、授業改善交流週間では短期目標を設定する。

レベル	話す	聴く
1	適切な声の大きさで	話し手を見て
2	聞き手を見て	リアクションしながら
3	分かりやすく筋道を立てて	意見を比べて
4	つなげて	気持ちを読み取って
学びのゴール		

ウ. 組織 各学級男女各1名の学級書記により構成される。

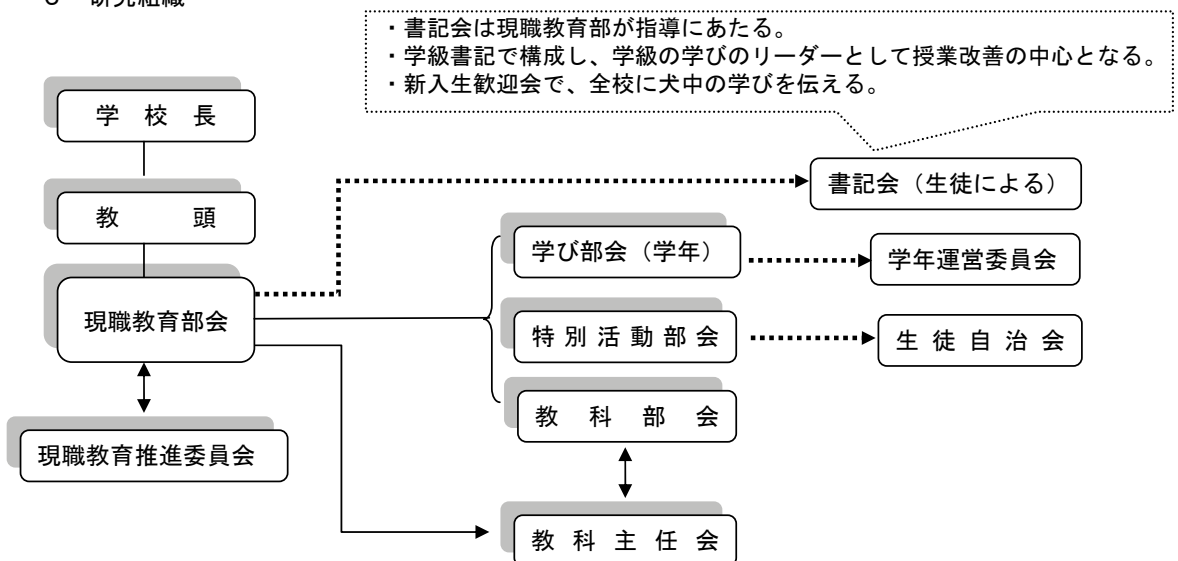
エ. 年間計画

月	1・2年生		3年生	
	学級	書記会	学級	書記会
4 5	学びのゴール設定に向けての話し合い	前期書記会開き 学びのゴール設定	学びのゴール設定に向けての話し合い	前期書記会開き 学びのゴール設定
6	短期目標の設定 実践 6/12～6/20	実践に向けての準備	短期目標の設定 実践 6/12～6/20	実践に向けての準備
7 8 9	実践のふりかえり 前期学びのアンケート	実践期間のふりかえり 前期学びのふりかえり (アンケート集計・まとめ)	実践のふりかえり 前期学びのアンケート	実践期間のふりかえり 前期学びのふりかえり (アンケート集計・まとめ)
10 11 12	短期目標の設定 実践 10/28～11/6 実践のふりかえり	後期書記会開き 実践に向けての準備 実践期間のふりかえり	短期目標の設定 実践 10/28～11/6 実践のふりかえり	後期書記会開き 実践に向けての準備 実践期間のふりかえり
1 2 3	短期目標の設定 実践 1/27～2/4 後期学びのアンケート	実践に向けての準備 実践期間のふりかえり 後期学びのふりかえり (アンケート集計・まとめ)	3年実践なし 後期学びのアンケート	ゴールのふりかえり 後期学びのふりかえり (アンケート集計・まとめ)

オ. その他

- ・学びのゴールは学年ごとに設定する。 ・目標設定とふりかえりへの時間は全校統一で確保する。
- ・授業改善交流週間中は、生徒は毎時間、授業の評価を教科担当より受け、所定のふりかえり用紙を使用して評価・ふりかえりを行う。
- ・授業改善交流週間中に、生徒発案の企画を行うこともある。その際は、別に提案をする。

5 研究組織



## 6 検証の方法

- ◇授業改善交流週間⇒第1期（6月）、第2期（10月）、第3期（1月）
  - この期間に指導案ライト版を使った公開授業・振り返りの会を行う。
  - 期間中は、すべて授業公開とし、互いに気軽に授業を見合う。
  - 生徒の授業改善交流週間と重ね、生徒側の授業改善について、毎時間の教科担当で授業の評価をする。
- ◇要請訪問⇒授業改善交流週間と重ね、年3回の授業研究を行い、指導助言を受ける
- ◇学校訪問⇒学校訪問時に、授業研究を行い、指導助言を受ける。
- ◇学びのアンケート⇒前期・後期で1回ずつ、学習についてのアンケートを行い、書記会で集計まとめをする。
- ◇授業時間の振り返りの活動
- ◇定期テストの作成・処理

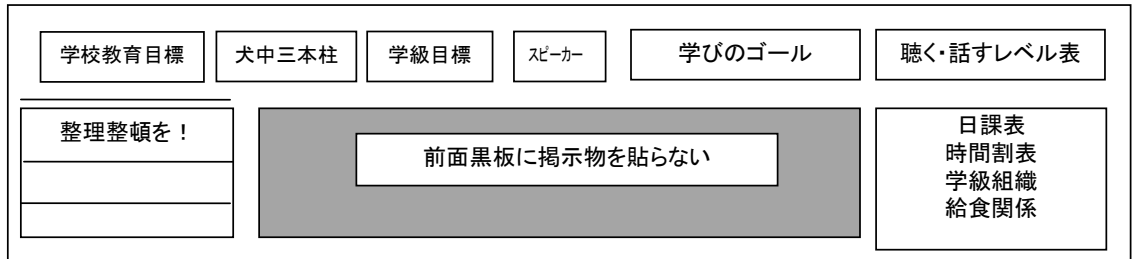
## 7 年間計画

4月	「研究主題・内容の周知徹底」
4・5月	「研究主題をうけての教科テーマと教科別各論作成・学びのゴール設定」 4/19 『『犬中の学び』の姿を共有し合うスタート模範授業」
6月～1月	「理論をもとにした実践」 6/12～6/20 授業改善交流週間①（6/13 要請訪問①、6/17 学校訪問） ※指導案ライトを使った公開授業&オープンな授業実践公開&短期目標実践週間① 8/1・8・20 夏の研修会 10/28～11/6 授業改善交流週間② (10/29 要請訪問②、11/1 犬山市授業創造交流会)
2・3月	「実践の検証とまとめ」 1/27～2/4 授業改善交流週間③（1/28 要請訪問③・全体交流会） ※教科部会・学び部会のまとめ…実践のふりかえりと、次年度に向けての話し合い 3月 研究紀要の作成

## 8 教科部会と学び部会について

教科部会 「計画・実践」を中心に	学び部会 学年ごとに部会をつくり、「交流」を中心に
①テーマの作成	①各教科の各論や実践の報告と交流
②主題・テーマに迫る研究・実践の計画 ・教科のめざす具体的な生徒像 ・どんな授業を創っていくのか ・評価の方法（評価規準・ふりか・単元テスト等）	②公開授業の計画（学校訪問や要請訪問以外に全教員1回は指導案ライトを作成して公開授業を行う）
③指導案の検討	③指導案の検討
④学年を越えて、教科で統一・共有して 取り組める内容の工夫（復習・まとめ等） →教科指導の質の向上を図る →生徒の教科の力を伸ばす	④学年で統一・共有して 取り組める内容の工夫（復習・まとめ等） →教科指導の質の向上を図る →生徒の教科の力を伸ばす
⑤基礎・基本の定着を図るために、 毎日の宿題や休日課題の工夫	⑤授業公開と参観
	⑥研究協議（ふりかえりの会）

## 9 教室環境と掲示物について



- ・授業で、毎時間目に入るので、あまり派手にしない。見出しは必ず付ける。
- ・生徒の学びや活動の足跡がみえる、生きた掲示をタイムリーに。生徒作品は必須。
- ・背面掲示などについては、学年の統一ラインのもと、教室間の情報量や内容にあまり差が無いようにする。

## 10 犬山中学校 現職教育グランドデザイン

### (1) 犬山市がめざす「学びの学校づくり」

犬山の学校教育は、人格の完成をめざし、すべての子どもの学びを保障することを主眼としています。また、学校では、子ども同士、子どもと教師の温かなふれあいの中で「学び」が深まり、子どもたちに豊かな人間性と確かな学力を育むよう努めなければなりません。「犬山の子は犬山で育てる」という共通の目標を持ち、それぞれの学校づくりを追い求めていきます。

### (2) 犬山中学校の教育目標

- ・ 思索し、創造する生徒
- ・ 誠実で、ねばり強い生徒
- ・ 健康で、明るい生徒

<犬中三本柱>

- A さわやかなあいさつ
- S 心を込めた清掃
- U 響き合う歌声

### (3) 現在の生徒の姿

- 人、もの、ことと主体的にかかわることができ、学級として、主体的な学びが見られるようになってきている。
- 仲間とともに学び合うことが理解へつながるという実感はもっている。
- 先生や仲間の意見をしっかり聴くことができる。話すという面では、他の意見につなげて発言したり、話し合いを通して高め合ったりという段階までには達していない。
- 学力の定着が不十分な生徒が増える傾向がみられる。

研究主題 確かな学力の定着をめざした  
「響き合い 高め合う 学び」を  
～「みんなで分かるようになる」授業づくりを通して～

犬山中学校教育目標

思索し創造する生徒 誠実でねばり強い生徒 健康で明るい生徒

■ ■ ■ ■ ■ 学びの三本柱 ■ ■ ■ ■ ■

授業キーワードは ①かかわる ②高め合う ③ふりかえる

能動

人・もの・こと  
かかわる

協同

人とかわりながら  
高め合う

成就

自己を見つめ  
ふりかえる

求める生徒の姿

「人・もの・こと」に関心をもち、それらに意欲的、主体的にかかわりながら学習を進めようとする。自らの学力向上をめざして、主体的に学習に取り組もうとする。

人とかかわりの中で、考え方を伝え合い、互いを認め合いながら、高め合おうとする。共に学ぶ学びの集団として、みんなで成長しようとする。

自らの思考・判断・表現と、仲間の思考・判断・表現を、様々な観点からふりかえり、自らの学習を方向づける。そして、家庭学習にも意欲的に取り組み、基礎学力の定着を図ろうとする。



<研究仮説>

- ①授業のまとめを大切にされた教科指導の充実・指導力の向上を目指した取組を進めることで、確かな学力を身に付けさせることができるであろう。
- ②本時の課題を明確にし、「みんなでわかるようになる」授業づくり十七か条にそった授業づくりの工夫を進め、「響き合い高め合う」場面を効果的に授業の中に位置づけた授業実践を重ねることで、生徒の響き合い高め合う姿を引き出すことができるであろう。
- ③生徒が学年ごとに「学びのゴール」を設定して、3期にわたって【短期目標→授業→ふりかえり】に臨み、その活動を充実すれば、求める生徒の姿を引き出すことができるであろう。

<研究内容>【授業(教科・道徳・学活・総合) 学校教育活動すべてにおける手立て】

- 主体的に学び続けることができる単元(題材)計画・教材研究
- 課題設定の方法(学習内容の明確化)
- 単元(題材)全体の見通しがもてる工夫(単元の1時間目の授業)

- 伝え合う力(表現力)の向上
- 協同的な学習の工夫・実践
- 学習・生活集団づくり
- 響き合い高め合う場面の設定
- 基礎・基本の知識をもとに高め合う学習の工夫

- ねらいを明確にした本時の学習内容に定着を図るふりかえりの充実
- 自己評価・相互評価の充実
- ふりかえりカードの内容の活かし方
- 基礎・基本の知識の定着の工夫

教科部会

研究の両輪

学び部会

教材論・方法論の議論と交流

環境が「学び」を創る  
そして「人」を創る  
主体的な「かかわり」を  
「書記会」でイメージする  
「学び」のベースにある「教室環境・学校環境」

国語



国語科が目指す「響き合い 高め合う 学び」

## 自分の言葉で考えを伝え、深め合う国語科の学び ～語彙を豊かにし、自分の考えを持ち、理解力を高める活動を通して～

### テーマに迫る基本的な考え方

人はだれもが自分の思いを完璧に伝えられるわけではない。自分が抱いている思いを適切に表すことができず、時には受け手に本来伝えなかった思いとは別の解釈をさせてしまうこともある。

そこで国語科では、基礎学力の定着を図ることで自分の考えや思いを伝えるために必要な語彙力を養わせたい。そして、自分の考えや思いがより相手に伝わるように表現するなかで自らの理解力を高め、互いに意見を深められる学びをめざす活動ができる生徒を育てたい。

### 国語科の「響き合い 高め合う 学び」

レベル 1：言葉の意味を理解し、文章を読むことができる。

レベル 2：読解した教材や文章について、考えをもつことができる。

レベル 3：自分が伝えたいことを自分の言葉で示すことができる。

レベル 4：相手を意識して、相手が理解できるように工夫をし、自分の考えを伝えることができる。

レベル 5：仲間との関わりを通して、自分の考えを深めることができる。

### 国語科における目指す生徒の姿

能 動	協 同	成 就
○言葉に対する関心を持ち、より積極的に語彙力を高めようとする生徒	○自分の考えや思いを相手に伝えるために工夫をするなかで、自らの理解を深め、よりよい考えを見つけ出そうとする生徒	○互いの意見を比べ、表現の豊かさを感じ、語彙力の向上を目指そうとする生徒

### 指導・支援の手立て

能 動	協 同	成 就
<ul style="list-style-type: none"> <li>●意欲的に取り組むために調べ学習を積極的に取り入れ、言葉に対する関心を高められるようにする。</li> <li>●基礎・基本の力の定着授業の初めに漢字練習や音読練習を取り入れる。単元テスト(漢字テスト)を定期的に行うことで、自らの力を確認する場を設ける。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●学習形態の工夫 自分の考えを自分の言葉で表現し、伝える活動を多く設けることで、お互いの考えを理解する。理解したことを踏まえて自分の考えを深められるように、自己表現活動を多く設ける。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●評価の活用 発表の場を多く設け、互いを評価し合うなかでよりよい言語表現を身につけることができるようにする。</li> <li>●「ふりかえりカード」の活用 授業中の自己の活動を振り返り、次の授業へと生かしていくようにする。</li> </ul>

# 自分の言葉で考えを伝え、深め合う国語科の学び

福 山 裕 子

## 1 はじめに

生徒はこれまでに随筆文や物語文などの現代文や古典文学など、多くの作品に触れてきた。なかでも、随筆や物語は作品全体に筆者や作者の考えが表れるものである。また、登場人物や情景が描写される物語は、直接的には描かれていない心情を読み取る活動ができる。言葉に直接表れない思いを捉えることは、他者の思いを推し量り、考えることにもつながる。そのような特徴を踏まえて学習することによって、相手の心を汲み取る力や異なる視点から相手を見つめる姿勢を養うことができる。

2年生最後となる7単元自分を見つけるは、2年生で学習する最後の単元として設定されている。本単元では古典的な作品の一つである『走れメロス』を扱う。語句やさまざまな言葉の役割などの知識の定着を図るとともに、作品中の語句の使い方や表現に注目させたい。そして、場面展開を踏まえた上で描写や会話に注目して読み、登場人物の心情の変化を捉えさせたい。さらに、作品を理解した上で様々な視点から登場人物について考え、意見を交流することで、一つの視点に捕らわれないで他者を理解しようとする姿勢につなげたい。また、登場人物の生き方について考えをまとめる活動を取り入れたいと考えている。作品から感じたことを自分に引き寄せて、自分の想いを言葉として表現する楽しさを実感させるとともに、言葉による表現力を養いたい。

## 2 教材について

(1) 単元 7 自分を見つける「走れメロス」

### (2) 単元の目標

- ①語句の使い方や表現の巧みさを読み味わうことができる。 (関心・意欲・態度)
- ②描写や会話に着目し、ストーリー展開や文章構成に沿って登場人物の人物像の変化を理解することができる。 (読む能力)
- ③視点を定めて話題を整理し、表現や文体を工夫して文章を書き、書いた文章を読み返して文章を整えることができる。 (書く能力)
- ④話の構成や展開などに注意して、伝える目的に応じて話の要点を聞き取ることができる。 (話す・聞く能力)
- ⑤抽象的な概念を表す語句や言葉の役割について理解し、語彙を豊かにすることができる。 (知識・理解・技能)

### (3) 指導計画

- |         |  |
|---------|--|
| <見つける>  | ①語句や表現を確認し、あらすじと登場人物を確認する。   |
| <高め合う>  | ②メロスの言動に注目し、心情の変化を捉える。<br>③王の言動に注目し、心情の変化を捉える。<br>④セリヌンティウスの言動に注目し、人物像を捉える。<br>⑤メロスが勇者かどうか意見をまとめる。 |
| <ふりかえる> | ⑥メロスの生き方と自分の生活を比較し、意見文を書く。   |



### 3 考察

本教材には難解な語句が非常に多く含まれており、生徒は教材の内容を読み解くにも時間がかかった。事前に語句調べは行ったものの、補足を加えながら物語の展開を確認する時間が必要となり、改めて生徒の語句の知識が不足していることが分かった。そして、本教材の主題「信実とは何か」を捉えるにあたって必要となるのは、主な登場人物の心情の変化である。しかし、先に述べたように語句の知識が不足しているため、登場人物の心情がなぜ変化したのかが分かる描写や登場人物の心情が徐々に変化しつつある様子が分かる描写に着目できない生徒がいた。そのため、1年時に「星の花が降るころに」で学習した心情曲線や簡単なイラストを用いて学習を進めた。そうすることで、視覚的に心情の変化や感情の起伏が捉えることができ、作品の理解を図ることができた。教科を問わず、視覚的な資料には効果があるが、国語という教科の特性を考えると、文章に返って、記述を忠実に読み取る力を定着させなければならない。

また、本教材では主題の「信実」について理解を深めるために、5時間目を書く活動を取り入れた。作文のテーマとして主人公が勇者であるか否かと設定し、どの登場人物の視点から見た考えなのかをまとめる活動を行った。生徒には、初読の段階で主人公が勇者か否かについて意見とその理由をまとめさせていた。その時点では、読者という一つの視点から主人公は勇者であるとする意見が大多数を占めていた。それを踏まえて5時間目では主人公、親友、王、民など様々な視点から、意見を書くことができた。活動に入る際、どのような視点があるかを、こちらから示さなければ考えをまとめられないのではないかと懸念していたが、実際に活動してみると実に多くの視点から捉えることができていた。想定していた「主人公・メロス」「友・セリヌンティウス」「王・ディオニス」「民」だけでなく、主人公の妹や最後に主人公に緋色のマントをかける少女など様々な視点から意見をまとめられた。そして、まとめた意見を班や学級での交流活動を行い、主人公が勇者か否かについて再度考えを深めることをねらった。班での活動を見てみると、安心して自分の意見を述べる生徒が多く、自分の考えは〇〇だけれど、どう思うかと班員に投げかける姿も見られた。正解がないからこそ、自由に互いの意見を伝えることができ、聞き手も素直に反応することができていて、思考の深まりはまだ浅かったように思う。

本実践を通して、今後の課題としてあげられるのは、語彙力を高めること、自分の考えを分かりやすく相手に伝えること、他者の考えを自分の考えと比較しながら考えを深めることである。しかし、これらの課題は今年度に限ったものではない。どのようにして生徒の力を高めていくのか、考えていかなければならない。

### 4 おわりに

今年度の現職教育のテーマでもある、みんなで分かるようになるためには、単に課題について理解するだけでなく、もう一度立ち止まって考えてみたり、理解したことをまわりの人に分かるように伝えたり、説明したりしながら互いに理解を深めていくことが必要である。根拠を明確にすることや考えるヒントを見出すこと、相手に合わせて理解したことや伝えたいことを噛み砕くこと、一つ一つを積み重ねていかなければならない。その手だての一つとして、第3回授業改善交流週間で全校体制で話型を意識することは効果があったように思う。特に、全校体制で取り組んだことで、より効果を得られたと思う。ただ、話型の言葉を言うだけにとどまっている場面も多く見られたため、話型の取り組みをもう一度見つめ、充実させるとよいのではないだろうか。一つの教科だけではなく、全校の取り組みとして活動していくことで、言語活動が活発となり、思考も深まっていくのではないかと考える。

# 相互にかかわりあい深く思考する学び合いの授業をめざして

近藤美幸

生徒たちが相互にかかわりあってより深く思考する学び合いの授業をめざして3年生での実践を行った。

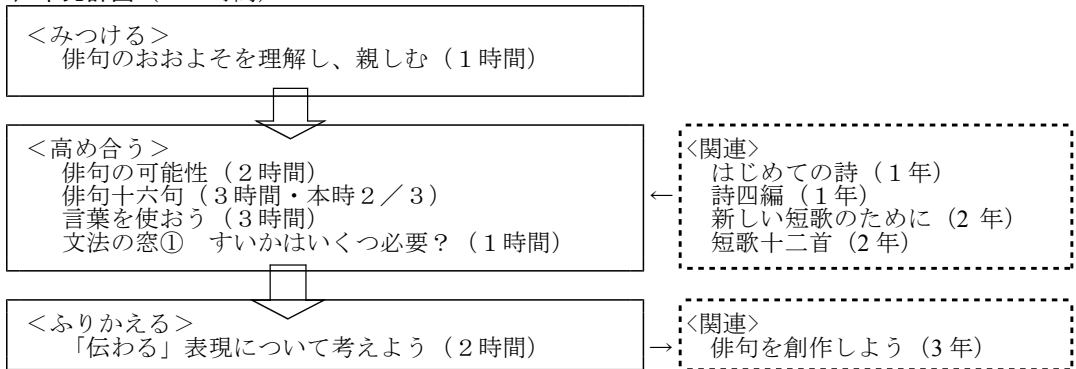
## 1 単元 豊かな言葉

### 2 単元構想

#### (1) 単元の指導意図

俳句は、今日まで継承されてきた日本の代表的言語文化の一つであり、広く知られた短詩型文学である。したがって、生徒にとっても親しみやすいものであると感じる。そこで、定型や季語などの約束事を学ばせるとともに、短い詩である俳句の豊かな表現力に気づかせ、簡潔な表現に込められたものの見方や感じ方を味わわせたいと考える。そして、自分の言葉で鑑賞文を書かせたい。それをもとに仲間の感じ方や表現に耳を傾け、鑑賞の深まりを体験させたい。そのために、班や学級全体での話し合い活動を取り入れ、その活動が円滑に行えるようなワークシートも工夫したい。

#### (2) 単元計画 (12時間)



### 3 本時の目標

- ①俳句の表現方法をもとに作者の感動を読み取ることができる。
- ②最も気に入った一句について、自分の言葉で説明することができる。

### 4 ひとりひとりに「響き合い高め合う学び」を与えるポイント

#### 響き合い高め合う場面

- 自分が最も気に入った句について鑑賞文を書き、発表し合う場面。
- ポイントとなる手だて
- 俳句の表現技法や作者の感動について交流する。

### 5 本時の学習過程 (本ページ下部より)

### 6 本時の観点別評価規準と評価方法

評価の観点	評価規準	評価方法
関心・意欲・態度	仲間と協力しながら、自分の考えを述べ合うことができる。	観察 ワークシート ふりかえりカード
書く能力	作者の感動を読み取り、自分の言葉で表現することができる	ワークシート

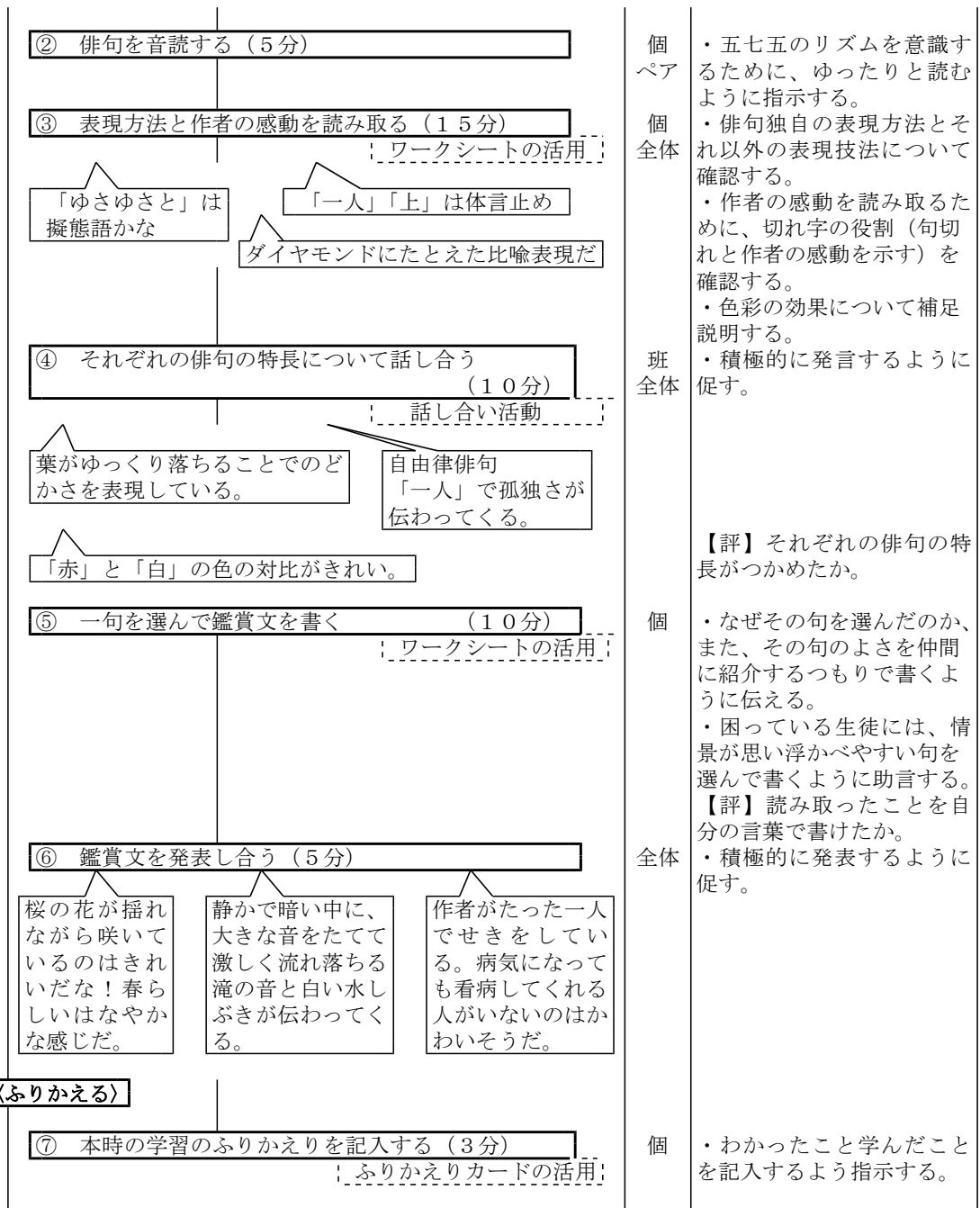
### 7 本時の学習過程

学習課題

学習活動・内容

手だて

生徒の活動・反応	形態	教師の支援・評価
<p>&lt;みつける&gt;</p> <p>① 既習の俳句独自の表現方法を確認する (2分)</p> <p>課題提示</p> <p>季語、季節、切れ字、句切れ、 無季俳句、自由律俳句</p> <p>最も気に入った俳句について鑑賞文が書けるようにする</p>	全体	・本時への意欲を高める。
<高めあう>		



## 8 考察

授業後に、「椿」を知らない生徒がいるかもしれないので写真を示すとよかったというご指導を受けた。確かにそのとおりである。赤い椿の花の鮮やかさや白い椿の花の清らかさを鮮明に思い浮かべられる生徒ばかりではないはずである。桐の葉にしても同様である。特別に写真を用意しなくても生徒各自が毎授業に持参する問題集に資料として写真は載っている。今後は生徒の実態をよく見きわめて、このような手軽な資料をもっと活用したい。

俳句の鑑賞文を書くことは前時にも取り組んでいるうえに、書きやすい句を選んで書けばよいので、とまどう生徒はいなかった。書いたものを発表し合い交流する場面では、予想以上に多くの生徒が挙手発表することができた。これは鑑賞文を書く前に班で話し合い交流する場面を設定したことで、それぞれの句への鑑賞を深めることができたからであると感じた。また、級友と交流しようという雰囲気づくりにもなったと思う。しかしながら、限られた時間に発表できなかった生徒もいたので、そのような生徒の鑑賞文も印刷配付するなどして紹介したい。

# 国語科の学び合いの授業—二つの授業実践を通して

馬場 小百合

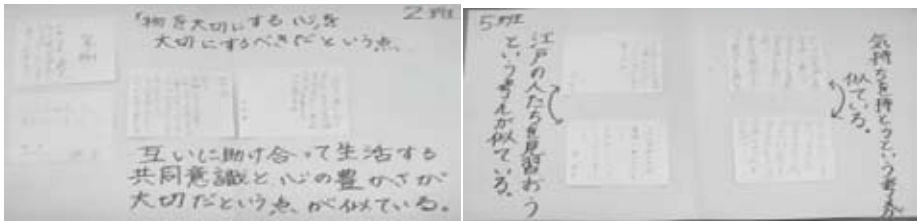
## 1 はじめに

今年の犬中の現職教育のテーマは「みんなで分かるようになる授業」であり、国語科の研究テーマは「自分の言葉で考えを伝え、深め合う国語科の学び～語彙を豊かにし、自分の考えをもち、理解力を高める活動を通して～」である。そのテーマに基づいて、今年の自分自身の授業実践を振り返ろうと思う。

## 2 実践

### (1) 実践1の授業課題

「江戸からのメッセージ」を読んで、自分の感じたこと、考えたことを隣の人に伝えることができる。

形態	生徒の活動
個別	① (5分) ・書きまっしょ。(漢字の練習)
個別	② (10分) ・「江戸からのメッセージ」を読んで考えたことを付箋に書く。
班	③ (15分) ・生活班の中で個人の考えを付箋に書いたものを示しながら発表する。 ・出し合った付箋を、同じ意見、違う意見のグループに分けながらまとめる。
	
全体	④ (10分) ・班の中で話し合った内容を全体で発表する。
個別	⑤ (3分) ・それぞれの班の発表を聞いた上で、もう一度自分の考えを付箋に書く。
ペア	⑥ (2分) ・書いた付箋を見ながら自分の考えを隣の生徒に伝える。
個別	⑦ (5分) ・今日の授業の振り返りを行う。 <u>最後に書いた付箋を振り返りカードに貼って提出する。</u> ※集めた付箋は後日全員分印刷して全体で一人ひとりの考えを共有することに活用した。

### (2) 授業実践2の課題

「竹取物語」の中で共感できる登場人物の気持ちを、隣の人に説明することができる。

形態	生徒の活動
個別	① (3分) ・「書きまっしょ」(漢字の練習)
個別	(2分) ・「読みまっしょ」(「竹取物語」の冒頭の文章)
班	② (5分) ・班で割り振られた登場人物の気持ちを付箋に書く。
全体	③ (10分) ・付箋を示しながら班で話し合い、班の意見をまとめる。
個別	④ (10分) ・班の意見を発表する。
全体	⑤ (10分) ・全体の発表を踏まえた上で自分が一番共感できる登場人物の気持ちとその理由を考えて付箋に書く。
ペア	⑥ (3分) ・付箋を見せながら、自分の意見を隣の人に伝える。
全体	⑦ (7分) ・教師のまとめを聞く。振り返りカードに記入し、 <u>最後に書いた</u>

### 付箋を貼って提出する

※付箋を利用して、共感できた登場人物で一番多かった登場人物を発表した。

## 3 学び合いの授業の手立て

以下の手立てを使うことを心がけて授業実践を行ってきた。

- 班での話し合いの場を多く作る。
- 付箋を活用し、一人ひとりの考えが全体で共有できるようにする。
- 個→班→全体→個の流れの定着を図る。
- 班の中での活動がスムーズに行われるように、司会・記録・発表の役割分担ができるようにする。
- 授業の課題をより具体的に、より明確に設定する。
- 授業のまとめで授業課題の確認を行う。
- 指導ステップを細かく区切らないようにする。

## 2 考察

授業の導入で、教科委員を中心に「読みまっしょ」「書きまっしょ」を行うことにより、授業に前向きな雰囲気ができる。この雰囲気こそが学び合いの基盤だと考える。そして班活動は以下にあるような「伝える」「広げる」「深める」学び合いの場として有効な形態であると考えられる。

- ・自分の考えを「伝える場」。
- ・他の人の意見を聞くことで自分の考えや視野を「広げる場」。
- ・自分と他の人の意見を比較し、自分の考えを「深める場」。

生徒はこの班活動を通して以下のことに気づく。

- ・自分と同じ考えを持っている人がいることに気づく。
- ・自分と同じ内容でも違う言葉や言葉遣い、言い回しがあることに気づく。
- ・自分の意見と比較して共通点、相違点に気づく。
- ・意見の共通点、相違点の説明が必要であることに気づく。

国語科の授業では、班の形態による話し合いで、結論を出すことに学び合いの成果をもとめるのではなく、班による話し合いの中で、発表する言い方や使用する言葉など、より良いものを選んだり、よりの確に表現できる言葉の存在に気づくなど、話し合いの過程にこそ学び合いがあるのではないかと考える。そのような気づきが生徒の表現する力を高めるのではないだろうか。また、同じ考えを持つ人がいるとわかることで、それを自信とし、全体の場で発表しようという表現意欲につながるのではないだろうか。

## 3 今後の課題

「みんなでわかる」ためには、わかった生徒がわかった内容を他の生徒にどのように分かりやすく自分の言葉で伝えるかが大切になる。また、理解した内容を「自分の言葉」で表現することにより理解が確実なものとなり、さらに理解した内容が定着する。教科書の文章中の言葉に頼って説明することで「わかった」「理解した」と満足することのないように、今後も授業の中で「自分の言葉」を使って伝える場面を作るよう、心掛けていきたい。

また、班で話し合った意見を発表する場合に、「いっぱなし」になり、話し合いに深まりが見られない。話し合いを深めるためには、自分と他の人の意見の共通点と相違点に気づくだけでなく、それを周りに伝えることが必要だ。後期の書記会の発案で、どの教科でも”意見をつなぐ”ということ「話形」から始めようという試みが行われた。短期間だったせいか定着には至らなかったが良い試みだと思った。この試みをぜひ来年度にもつなげていき、学校全体で意識していけば、いろいろな場面で話し合いの深まりが見られると感じた。

# 自分の言葉で考えを伝え、深め合う授業を目指して

## 一話し合い活動を通して

木村 英晃

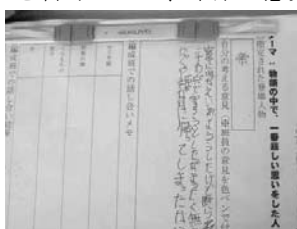
### 1 はじめに

国語科では「自分の言葉で考えを伝え、深め合う国語科の学び～語彙を豊かにし、自分の考えをもち、理解力を高める活動を通して～」をテーマに掲げている。「どうすれば仲間によりよく自分の意見を理解してもらえるのか」「仲間の言おうとしていることは何か」など、考える力を身に付けるために、授業の中で自分の考えを元に話し合いを行う場面を設定し、様々な立場の意見を聞くことでテーマに対する考えを深めていく。この活動を通して、考えを伝え合うことの難しさ、楽しさ、結論を出すまでの一体感、結論を出すことの達成感を感じさせたいと考えた。

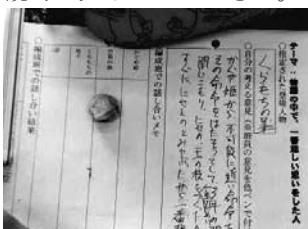
### 2 実践

#### (1) 自分の意見を「書く」

この研究でもっとも大切なことは、「自分の意見をもつ」ということである。そうでなければ話し合いをする材料がなく、結局は他人の意見や言葉を受け入れるだけで、自分の中で考えが深まったとはいえない。よって、話し合い活動の前提として「自分の意見」があることが最重要になると考える。今回の話し合いのテーマは「竹取物語のなかで、最も悲しい思いをした人」とした。そして選ぶ登場人物を「翁・かぐや姫・くらのもちの皇子・帝」と限定し、さらにどの人物について意見を書くかは教師側で班ごとに指示を出した。そうすることで、どの人物を選ぶか迷う時間を無くし、意見を書かせる時間を長くとるようにした。これは教師がどの登場人物についての意見を書くか指示することで、後半の話し合いでそれぞれの人物の立場の生徒がいる状況で話し合いができるようにするディベート的な意図も含まれている。また、最初に自分の本来の意見とは違う人物について意見を書くことで、本来の意見を客観的に見ることができた。



生徒A：帝についての意見



生徒B：皇子についての意見



生徒C：かぐや姫についての意見

#### (2) 話し合い活動

自分の意見を書いた後の班での話し合い活動は、前半と後半で2種類の班を構成した。前半は生活班（4～5人）で、通常の授業や学校生活を送る際の班活動をする日常的な班編成である。後半は編成班とし、それぞれの登場人物についての意見をもつ生徒が1人ずつ、合計4～5人が集まって班を構成した。

前半の生活班では、この班の生徒は全員が同じ人物について意見を書いている。まずは自分の意見を個人で書き、その後生活班で話し合いをするが、その場での話し合いの目的は「班員全員が意見を言えるようにすること」とした。個人の意見を具体的に書けなかった生徒には班員がアドバイスをし、班員の意見を参考にして自分の意見をもち、後半の編成班での話し合いに臨むことができるように指示を出した。この指示により、意見を書くことができなかった生徒も意見をもった状態で後半の話し合いに参加することができ、意見を書くことができている生徒は仲間に説明をすることで、自分の意見が正しいか、しっかりと根拠を持って発言できるかといったことを確認することができた。

後半の編成班では、一人一人がそれぞれ違った立場の意見をもっている生徒で構成されているので、全員の意見が同じで話し合いが進まないという状況はない。それぞれの立場の生徒が自分の意見を通すために、生活班で話し合った根拠を元に話し合いを進めていた。編成班での話し合いの目的は「4人の人物に1～4位の順位をつけること」とした。ただ発言力の強い生徒の意見だけで答えを決めるのではなく、順位を考えることでそれぞれの立場の意見も参考にしなければならない。より細かい意見の話し合いになることで、それぞれの立場の登場人物を深く読み取り、違う視点からも考えることができた。最後は話し合いが終わったところで黒板の表に各班の話し合いの結果を貼り、全体で確認をした。



「生活班」での話し合いの様子



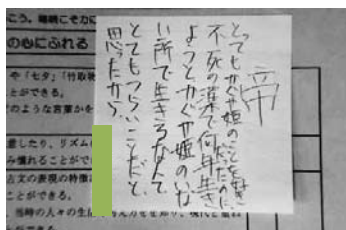
「編成班」での話し合いの様子



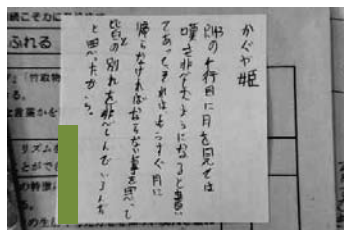
話し合いの結果を黒板の表に張る様子

### (3) 学習のゴールとふりかえり

黒板の表で各班の結果を全体で確認した後、生活班と編成班の話し合いを踏まえたうえでの、最終的な自分の意見を付箋に書くように指示を出した。生活班で書いたような指示された人物ではなく、編成班で決まった1位の人物でもなく、個人としての意見を理由とともに書かせることで、これまでの話し合いから深められた本当の自分の考えを持てたかどうかを確認することができる。本時のゴールは「自分の意見を根拠とともに隣の人に伝えることができる」である。全員が付箋に意見を書き終わったところで全員が起立して、隣同士で自分の意見を発表できたら座るように指示を出した。その際、決して他の人の意見を否定するのではなく、自分の意見を確立させた上で、他の人の意見を認めることが大切だという話をした。最後にふりかえりカードの記入を行う際には、付箋を貼って提出させ、次時でまとめたものを配付して紹介するよう伝えた。



生徒Aの付箋：帝



生徒Bの付箋：かぐや姫



自分の意見を隣に伝える様子

## 3 成果・課題

### (1) 成果

生徒たちは自分の意見を言葉にして伝えることの大変さ、多くの意見があることの楽しさ、意見がまとまったときの達成感などを体験できたように思う。また、教師があらかじめ意見を書く人物や司会、記録者を指名したことで、自分の意見を書くまでの流れ、話し合い活動の時間の確保が十分にできと思う。

### (2) 課題

生徒たちは活発に意見交換をする反面、聞く姿勢や話す姿勢が集中できていない場面があったので、もう一度授業のルールを確認し、徹底していきたい。また、自分の意見を書くときに自然と違った視点からも課題について考えられる力、活発な意見交換のために自分の意見をすばやくまとめる力、自分の意見を分かりやすく伝える力を学ばせたい。

# 理解を深める授業づくりを通して

今枝 玲菜

## 1 はじめに

古典と聞くと昔のこと、自分とは関係ないことだと思ったり、難しいものだと思ったりする生徒が多い。しかし、私たちの生活の中には、今も生き続けている古典に由来する言葉が多くある。小学校でも古典にふれてきている生徒たちがこれからさまざまな作品にふれることで、現代にまで生き続けてきた伝統的なものの見方や考え方があることを知り、自分の生活に関連づけられるようにしたい。

## 2 本時に託した思い

単元 いにしえの心にふれる 「今に生きる言葉」

「矛盾」と聞くと、子どもたちの頭の中には「ほこたて」というテレビ番組が浮かぶ。しかし、このテレビ番組ではAとBがそれぞれ最強と銘打ったものを競うというもので、本来の意味とは違いが生じる。子どもたちはこのテレビ番組のイメージが強いため、矛盾の意味を勘違いしてしまう恐れがある。そのため、「同じ人」が矛盾した状況を作っているということをしかり伝える必要がある。そこで、今回の授業実践では、「矛盾」の意味を理解させることに重点をおいた。

## 3 一人一人が理解を深めるためのポイント

### 理解を深める場面

- 仲間との話し合いを通して、自分の意見を深めていく場面  
ポイントとなる手だて
- 「矛盾」の故事の話を4コマ漫画を使って確認する。
- 「矛盾」の関係になる話を作り、班で交流する。

## 4 本時における指導について

### (1) 本時の目標

- ・「矛盾」の意味を理解し、矛盾を使った話を作ることができる。

形態	生徒の活動
班	<みつける> (1) 「矛盾」の故事の話を4コマ漫画で確認をする <高め合う>
全体	(2) 「矛盾」とは何か発表する
全体	(3) 「矛盾」の意味を確認する
個	(4) 「矛盾」の関係になる話を作る
班	(5) 作った話を班で交流する
全体	(6) 班ごとに発表する
	<ふりかえる>
全体	(7) ふりかえりカードを記入する

### (2) 考察と課題

(1) では、「矛盾」の故事の確認に4コマ漫画を使うことで古典の難しい文章を読んでいるという感覚をなくし、話を早く理解することができた。4コマ漫画で視覚に訴えることによって、より



分かりやすくなったと考える。また、班で活動することによって、それぞれの班にオリジナリティーがみられた。生徒の感想として「班のみんなで協力してできた」「矛盾の意味がよく分かった」といったものがあることから、班活動を通して意欲的に授業に取り組むことができたように感じる。

全ての班に発表させることで、より多くの例文に出会うことになり「矛盾」の意味も理解しやすかったようだ。よって(2)の「矛盾」とは何かという発問に対して多くの生徒が挙手をすることができた。普段は自分の考えに自信をもてない生徒も、今回は個人の活動だけでなく、班で協力して意見を出したので、自信をもって発表できたのではないかと考える。

(1)～(3)の活動で生徒たちは「矛盾」の意味が理解できているので、(4)の「矛盾」の関係になる話づくりはスムーズに進み、意味を間違えて使っている生徒はほとんどいなかった。しかし、いざ話を作ろうとすると、漢文の話に捕われてしまう生徒も多く、自分で新しく話を考えるということが苦手な生徒が多いということが分かった。

また、班活動では4コマ漫画や自分の考えた話を班員に発表することができたものの、発表をして終わりという班が多かった。他の班員の発表に自分の意見をつなげ、良いところを学ぶ。そして、仲間の意見を受け入れ、自分の意見と比較することでより良い意見へと高め合う班活動を大切にしていきたい。



班活動の様子



発表の様子

## 5 おわりに

生徒たちは「矛盾」という言葉を学んでから、「矛盾」という言葉を友達の発言に対して使うなど普段の生活でも使うようになった。授業で学んだ古典を「昔のこと」として捉えるのではなく、自分の生活と結びつけられるようになったと考えられる。ただ知識として知るだけでなく、得た知識を自分の力として使っていけることが本当の学力につながるのだと感じた。

その一方で、生徒たちは班活動での話し合いや自分の考えを自分の言葉で表現することが苦手だという課題が残った。ここまでの単元において、自分の考えを自分の言葉で表現するという力が定着していないという、授業作りの根幹に関わる課題が解決されていないことが明らかになった。今後の授業では、班活動で話型を示すことによる活発な話し合いをする工夫や、自分の言葉で意見を書く時間を重視し、少しでも得た言語知識を使って自分の考えを表現することができるようにしていきたい。

# 国語科ふりかえりカード

2年 組 番 名前

★ 忘れずに授業の記録をつけていこう。継続こそ力になります。

単元名 7 自分を見つめる

単元 の 目 標	関心・意欲	語句の使い方や表現の巧みさを読み味わうことができる。	自 己 評 価	
	話す・聞く	話の構成や展開などに注意して、伝える目的に応じて話の要点を聞き取ることができる。		
	書く	視点を定めて話題を整理し、表現や文体を工夫して文章を書き、書いた文章を読み返して文章を整えることができる。		
	読む	描写や会話に着目し、ストーリー展開や文章構成に沿って登場人物の人物像の変化を理解することができる。		
	知識・理解	抽象的な概念を表す語句や言葉の役割について理解し、語彙を豊かにすることができる。		

★「自己評価」観点

A：十分できた B：だいたいできた C：あまりできなかった D：全くできなかった

★「話すレベル」「聴くレベル」はレベル表を見て1～4で評価

月日	今日の内容	自己 評価	学習内容・分かったこと	話す レベル	聴く レベル

★「自己評価」観点

A：十分できた B：だいたいできた C：あまりできなかった D：全くできなかった

★「話すレベル」「聴くレベル」はレベル表を見て1～4で評価

月日	今日の内容	自己評価	感じたこと・分かったこと	話すレベル	聴くレベル

単元テスト・・・ 評価 A： 点満点 B： 点以上 C： 点未満

月日	内容	評価	テストを終えて

読みまっしょ・書きまっしょ・覚えまっしょの自己評価（A～D）をつけよう。

月日	内容	評価	月日	内容	評価	月日	内容	評価

単元を終えての感想・反省

社会

社会科が目指す「響き合い 高め合う 学び」

## 資料を活用し共に高め合う 社会科の学び

### テーマに迫る基本的な考え方

「公的資質」の基礎を養うことが社会科の使命である。この資質を手にするためには、いわゆる社会科の基礎・基本能力を身につける必要がある。これは、課題をみつける力、資料を用いて調べる力、考えを表現する力、話し合いをする力など、1人の日本人として、社会に有用な1人の社会人として生きていくために必要な能力である。基本的な事項（地名、年号、気候、産業、歴史的人物名など）を記憶することも、一定レベルまでは必要であるが、それ以上にこれらを駆使して、問題解決を図る能力が重要であると考え。これまでの社会科部会では、「みる・聴く・話す」能力を社会科の基礎・基本ととらえ、実践をすすめてきた。この流れをふまえ、かつ「響きあい高めあう学び」を模索することを目標に実践をすすめる。

### 社会科の「響き合い 高め合う 学び」

社会科の目指す学びは、新たな考えとの出会いによっておこるものと考え。これを、授業の中の話し合いの場面で生み出すことを試みたい。教師からの新たな真実や疑問の投げかけ、クラスメイトからの意見表明、疑問、驚き、迷い、喜び、あるいは新鮮な見方や考え方が、生徒の内面を揺さぶる。この心が揺さぶられた状態こそが、響きあい高めあう授業のスタートである。1つの話題について、多くの生徒がともに考え、意見を出し合い、刺激を受け、新たな心のふるえを感じることにつながるからである。こうした話し合いの場面を設定していきたい。

### 社会科における目指す生徒の姿

能動	協同	成就
○社会的事象に関心をもち、主体的にかかわり続ける生徒	○考えを伝えあい、自分の意見と仲間の意見を比較し、共に高めあう生徒	○課題の解決への道筋を見つけ次の課題の学びの方向づけができる生徒

### 指導・支援の手立て

能動	協同	成就
○社会的事象との出会いの設定の工夫をする。 ○単元計画の明確化と教材研究をすすめる。	○学習課題の工夫をする。 ○意見を言ったり討論したりするといった話す力の向上 ○適宜コの字型や班にするといった、学習形態の工夫をする。	○ふりかえりカードの活用 ○指導と評価の一体化 ○学んだ知識をもとに調べ活動や言語活動を行い、達成度の確認をする。

# 「響き合い 高め合う 学び」の構築

大野 佑樹

## 1 生徒の姿

これまでの社会科学習の状況を見ると、自らの考えを堂々と発表できる生徒はいる。しかし、明確な根拠をもった考えでなかったり、自分の考えに固執し、他者の意見を踏まえ、自分の考えをよりよいものにすることができなかつたりしている。また、自らの考えを仲間の前で発表することを苦手としている生徒もいる。

## 2 目指す生徒像

昨年度は「意見を出し合い、聞き合う生徒」を目指す生徒像と設定し、授業づくりに取り組んできた。現在の生徒の姿を踏まえ、本年度は「比べて聞き、加えて話せる生徒」を目指す生徒像に設定し、「響き合い高め合う学び」に迫ることを考えた。社会科の時間には、話し合いや討論を取り入れた学習を繰り返し行い、聴く力・話す力を育成することを重視したい。自分の考えだけに固執するのではなく、広く仲間の考えを聴く中で、様々な考えに出会い、自ら判断できるようにさせたい。



## 3 手だて

響き合い高め合う学びを実現するために、今回は課題設定を工夫することを手だてとした。次の3つのパターンの課題を設定し、実践を試みた。

- ①「なぜ〇〇は～だろう？」
- ②「AかBか？」
- ③「〇〇のうち、1番～なのはどれか？」

## 4 実践例

課題パターン① 単元「世界から見た日本の人口」

### (1) 単元計画 (3時間完了)

世界の人口分布と変化	(1時間) <本時 1 / 1 >
日本の人口と人口問題	(1時間)
日本の過疎・過密問題	(1時間)

### (2) 本時の目標

- ア 統計やグラフから、世界の人口が不均等な分布をしていることを読み取ることができる。
- イ 20世紀後半以降に人口が急増している様子をつかみ、その問題点について話し合うことができる。

### (3) 本時の学習課題

なぜ、人口の増加や減少が問題なのか？

#### (4) 授業の実際

### 「みんなで分かるようになる」社会科学習指導案ライト

平成25年4月18日(木) 第4時限		第2学年2組	指導者: 大野 佑樹
響き合い 高め合う場面	人口の増加や減少が問題となる理由を話し合う場面		
1 単元名	世界から見た日本の人口 (1/3)		
2 本時の目標	1 統計やグラフから、世界の人口が不均等な分布をしていることを読み取ることができる。 2 20世紀後半以降に人口が急増している様子をつかみ、その問題点について話し合うことができる。		
3 学習過程	学 習 活 動 or 「 発 問 の 流 れ 」		
10分 12分 5分 18分 5分	個 個→全 全 個→(グ) →全 個	<b>学習課題「なぜ、人口の増加や減少が問題なのか？」</b> ① 人口が多い国、人口密度が高い国ベスト5を調べる。 ② 人口密度が高い国と低い国がある理由について話し合う。 「なぜ、人口密度が高い国と低い国があるのだろうか？」 ③ 人口が急増した時期と地域について知る。 ④ 人口の増減に伴う問題点について考え、話し合う。 「なぜ、人口の増加や減少が問題なのか？」 ⑤ ふりかえりカードを記入する。	

【形態表示 個：個人、ペ：ペア、グ：グループ、全：全体】

#### 5 成果と課題

##### (1) 成果

導入では、クイズ形式で予想をたて、資料を使って調べたことで、生徒の心を引き付けることができた。課題設定については、みんなで考え、高め合えるためには適当な課題であった。学び合い・高め合う場面では、生徒は主体的に仲間とかかわりをもつことができた。



##### (2) 課題

4月だったため、学級の間人間関係が確立しておらず、互いに遠慮し合いながらの話し合いに感じた。学び合い・高め合う場面では、生徒は付け加えることはできるが、反論をすることまではできなかった。人間関係を深めるとともに、話し合いの場を今後も継続的に設定する必要性を感じた。

# シンキングツールを活用した社会科実践

坪内 茂雅

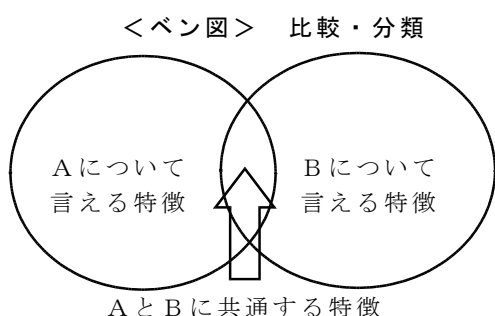
## 1 シンキングツールについての考え方

社会的事象について思考を進めるとき、それをイメージ化、見える化することができる。その助けとなる手順や図のことをシンキングツールと呼んでいる。シンキングツールは主として以下の5つの点で有効である。

- ① いろいろな角度から視点を当てて、頭の中にある漠然としたあいまいなイメージを意識できる。
- ② ひとつの文章として表現しにくいイメージを、断片的にはあっても表現できる。
- ③ まったく関係のないと思っていた事象同士に関係があることに気付く。
- ④ 複雑な事柄を単純化して、些細なことにとらわれることから抜け出すことができる。
- ⑤ 思考の方向を限定して、手順を示す。

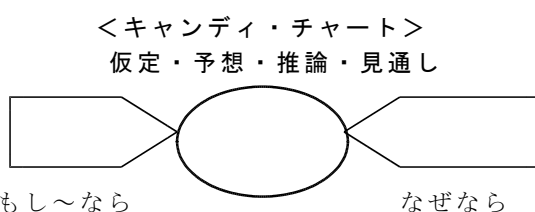
シンキングツールそのものはただの紙に図形が描かれているだけである。しかし、頭の中にある考えを視覚的に「見える化」できるものである。ただ何となく考えているだけではつながらない事象を、あえて視点や考え方を変えてみることで、別の見方や考え方が生まれてくることを助け、考えることを教え育むものである。

## 2 具体的なシンキングツールの紹介



複数の事実、考え、意見などについて、共通点、相違点の両方をリストアップして整理する。

何かを比べるとき、つい相違点にだけ視点が行きがちではあるが、ベン図を用いることで相違点と共通点の両方が意識できる。



キャンディ・チャートは予想を助けるツールである。

予想はでたらめな内容を書くのではなく、社会的事象を成り立たせている条件について検討した上で、予想の根拠と結果を書き込むように使用する。

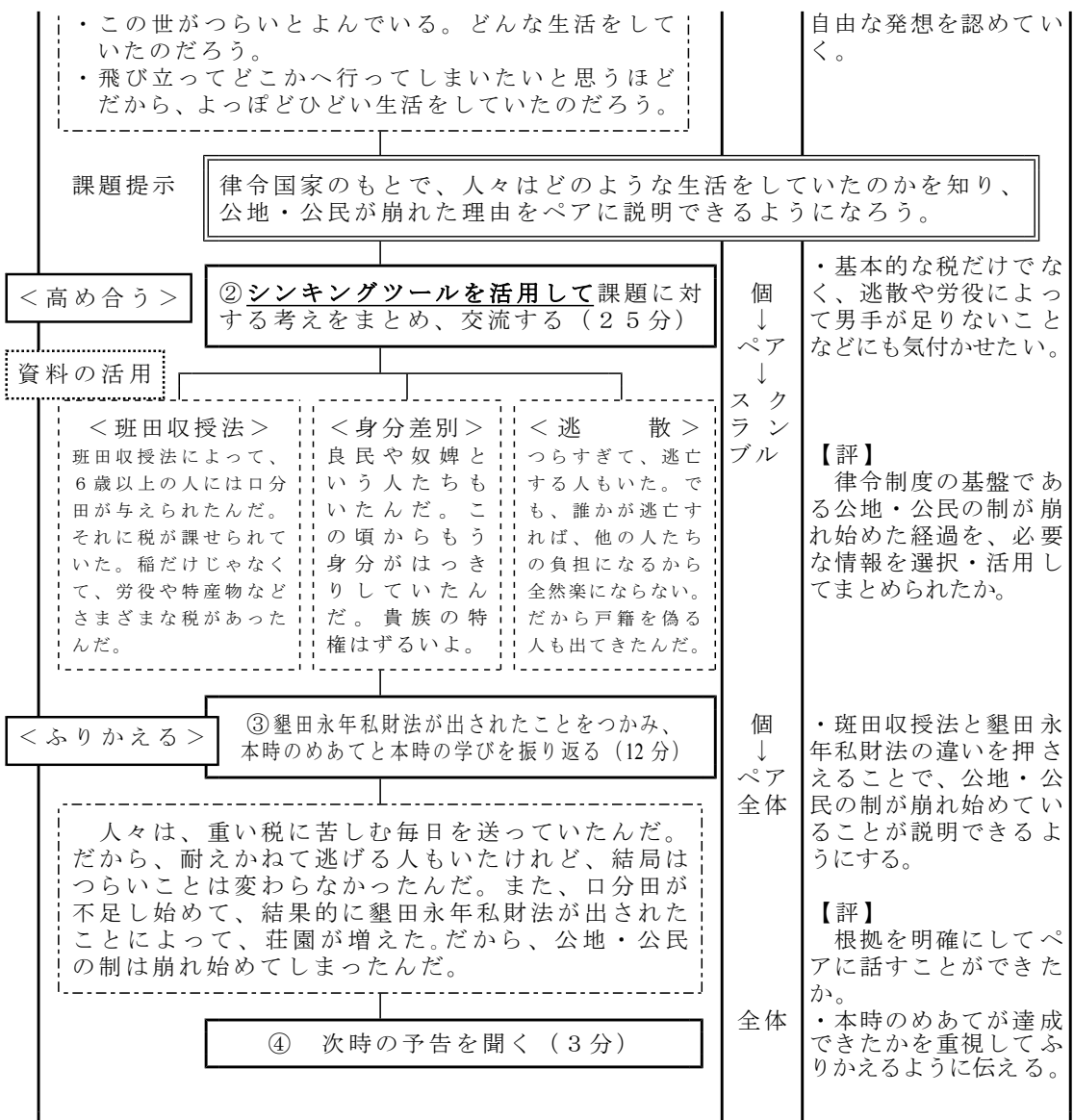
たとえば、「もし救急車が有料化されたのであれば」を左包み紙に、中央には自らの指呼の結果を、右側の包み紙にはその予想の根拠を示す、というように使用する。

## 3 シンキングツールを活用した授業実践の紹介

以下に＜高め合う＞場面でシンキングツールを活用した実践例を挙げる。

学習活動・反応		形態	教師の支援・評価
＜みつける＞	① 貧窮問答歌を読んで、本時の課題をつかむ（10分）	個 ↓ 全体	<ul style="list-style-type: none"> <li>・現代語訳も一緒に提示することでどんなことがうたわれているのか分かるようにする。</li> <li>・当時の生活について</li> </ul>



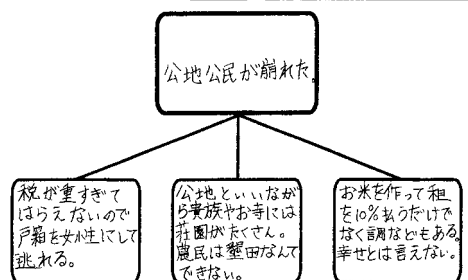


#### 4 実践を終えて

授業実践の中でシンキングツールを取り入れることで、意見の交流を積極的に行うことができた。生徒からは「同じ意見やん」「ひとつ書いてないからその意見もらおうわ」と言った、よりよい交流の在り方を見ることができた。

右に実際の授業実践で活用したシンキングツールを掲載した。なぜなにシートと言われるツールで、上段に記載された社会的事象にいたる原因を、史資料を活用して書き入れ、思考をまとめるシートである。本時においては、スクランブル交流の際にこのシートを手にして、三人以上とかかわることを指示した。複雑な社会的事象を単純化、整理して交流したことで社会認識の深まりが感じられた。

「なぜ」なにシート



## 第3学年6組 社会科学習指導案

関 千咲子

### 1 単元 現代の民主政治と社会

#### 2 単元の目標

- ①身近な生活と政治とのかかわりに関心を持ち、身の回りの社会的事象から、政党の役割や選挙の仕組み、現代日本の政治の課題について考えることができる。  
(社会的事象への関心・意欲・態度)
- ②選挙をはじめとする国民の政治参加が民主政治を支えていることに気づき、望ましい政治参加の在り方について、話し合いなどを通じて自分の考えを分かりやすく表現している。  
(社会的な思考・判断・表現)
- ③最近の選挙に関する話題や各政党の政権公約などについて、資料を収集し、複数の資料を比較したり、課題に即して読み取ったりまとめたりしている。  
(資料活用の技能)
- ④政治や議会制民主主義の意義や基本的な考え方について理解することができる。  
(社会的事象についての知識・理解)

#### 3 単元構想

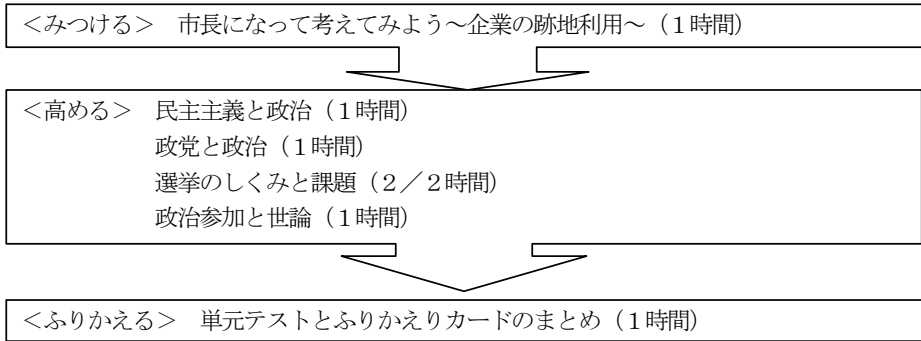
生徒が生きる現代社会は、情報化やグローバル化など、様々な面で急激な変化が進んでおり、自ら考え、自己責任のもとで適切な判断をして行動していくといった生きる力が求められている。したがって、広い視野に立って、社会に対する関心を高めていくことが大切である。そのような変化の激しい現代社会において、私たちの生活に結びついているのが政治である。自分たちの生活をより良いものにしようと考えることが、政治の原点であると考えられる。しかし、生徒にとって、分かりづらいこともあり、「政治離れ」が問題となっている。また、新聞やテレビといったメディアから発信される情報についても、深く考えることなく、鵜呑みにしてしまい、その本質が見えていない場合が多い。そこで、この単元を通して、生徒の身近な生活が政治につながっていくこと、そしてその政治に参加することで現代社会の課題が見えてくることを理解することで、改めて政治を身近に感じることができるようしていきたい。

本校の現職教育では、『確かな学力の定着をめざした「響き合い 高め合う 学び」を～「みんなでわかるようになる」授業づくりを通して～』という研究主題のもとで研究に取り組んでいる。研究主題を踏まえ、社会科部会では、「資料を活用し、共に高め合う社会科の学び」をテーマとしている。社会科の授業の中で、確かな学力となる基礎的な知識及び技能の習得を目指すことはもちろん、それらを活用して、課題を解決していく力を育てていくことが大切であると考えている。そこで、課題解決に必要な、資料を活用しながらじっくりと考える思考力、そこから自分の考えを相手に伝える表現力を重視していきたい。

本学級生徒のこれまでの社会の授業の様子を見てみると、資料から読み取ることができたとしても、自分の考えで意見を述べたりすることに対して苦手意識を持っている生徒が多く、教科書や資料集の言葉をそのまま発表する場面が多く見られる。つまり、発問に対する答えは、教科書や資料集に載っているものは安心して答えることができるが、個人の自由な発想による発言を控えてしまう傾向にある。そこで、班による話し合い活動を多く取り入れ、自由に発言できる場を設けていくことにした。そこで自分の考えをはっきりと伝えていくと同時に、班の仲間の意見を合わせて総合的に考察する力を身につけさせたい。また、資料から個人が熟考する場面を設定し、その後で個人が熟考した内容の意見交換を班で行う場面、そして全体に発表する場面というものを意図的に設定していきたいと考える。このようにかかわり合って学ぶことで、お互いに理解し合い、考えを深めることを目指したい。

本単元は、政治学習の導入と位置づけられており、日本の政治のしくみを理解する上で基礎となる内容を扱っている。学習内容の流れとしては、まず身近な生活と政治との関わり、そして現代の政治の基礎となる民主主義の意義、民主主義実現のための選挙、国民の政治参加、政党と政治のあり方などを学習する。その中で政治とは、人々の願いを実現し、よりよい社会をつくることであり、私たちが主権者として政治に積極的に参加していくことが大切であること、そしてその参加する重要な機会が選挙であることに気付かせたい。そして選挙をはじめとする国民の政治参加が民主政治を支えていくことを理解し、政治に対して関心を持てるような態度を育てたい。

#### 4 単元指導計画（7時間完了 本時 5/7）



#### 5 本時の学習

##### （1）本時の目標

- ①選挙は、国民が政治に参加する重要な機会であることを知り、選挙に参加することの重要性に気づくことができる。
- ②選挙の投票率の低下という課題について、資料を通して発見し、そしてその解決方法について考えることができる。

##### （2）準備

教師…資料、ワークシート、ホワイトボード、ペン

##### （3）ひとりひとりに「響き合い高め合う学び」を与えるポイント

###### 響き合い高め合う場面

○資料を通して、選挙の問題点について考え、意見を出し合う場面。

###### ポイントとなる手だて

○2つの資料を比読み取れるようにし、資料をもとに選挙の問題点が見つけられるように工夫する。

#### 6 本時の学習過程（次ページ）

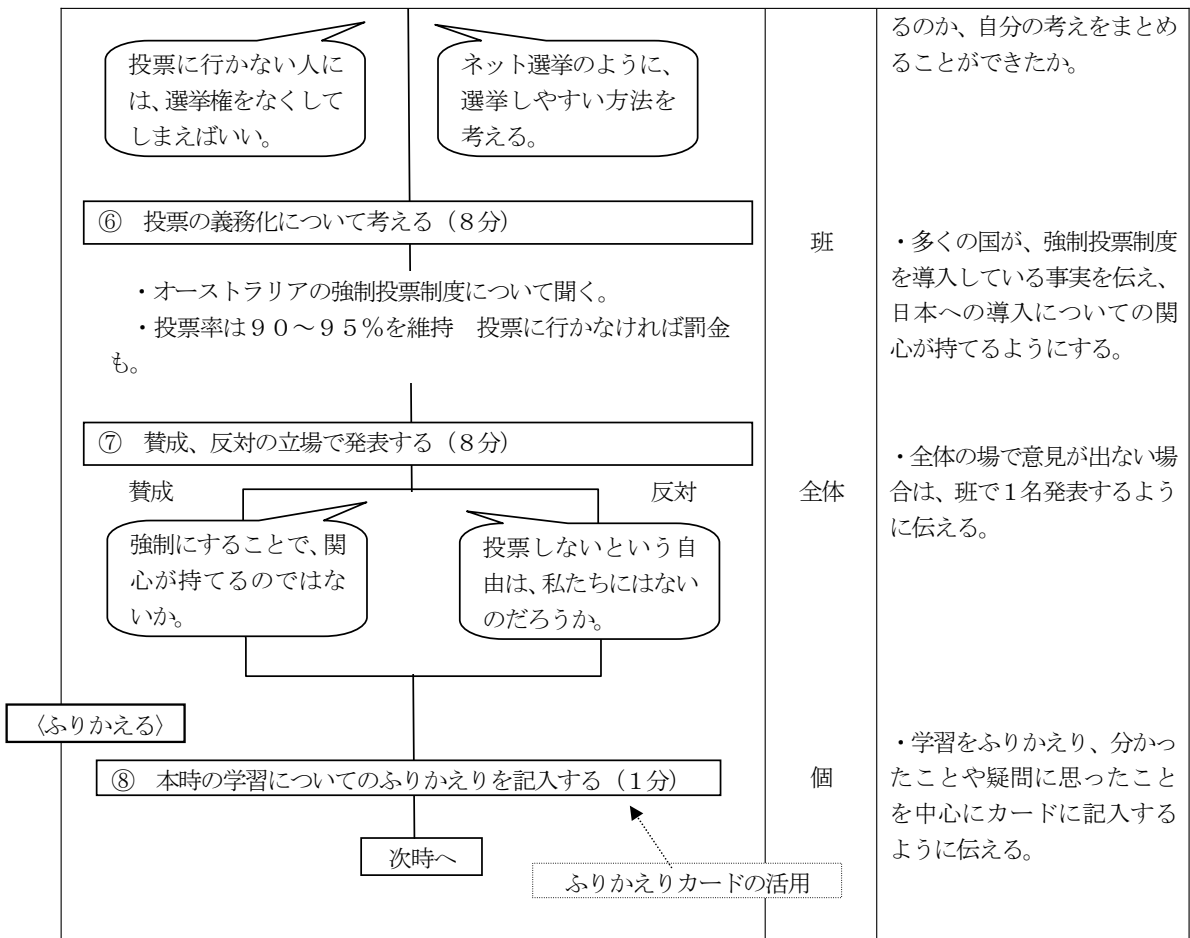
#### 7 本時の観点別評価規準と評価方法

評価の観点	評価規準	評価方法
資料活用 <span style="font-size: small;">の技能</span>	資料を通して、投票率の低下について読み取り、現在の選挙における問題点を読み取ることができる。	観察 ワークシート
社会的な思考・判断・表現	投票率が大きく低下している中で、どのようにしたら解決できるのか、自分の考えをまとめることができる。	観察 ワークシート

#### 8 板書計画

<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;">選挙の問題点を見つけ、解決方法を提案しよう</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;">選挙に行かない理由</div> <ol style="list-style-type: none"> <li>1位 用事があったから</li> <li>2位 支持者、もしくは支持政党がないから</li> <li>3位 選挙に関心がないから</li> </ol>	<table style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width: 50%; text-align: center; vertical-align: top;">                     ①選挙の問題点  <div style="display: flex; justify-content: space-around; margin-top: 10px;"> <div style="border: 1px solid black; width: 40px; height: 40px; margin: 5px;"></div> <div style="border: 1px solid black; width: 40px; height: 40px; margin: 5px;"></div> </div> </td> <td style="width: 50%; text-align: center; vertical-align: top;">                     ②投票率を上げる方法  <div style="display: flex; justify-content: space-around; margin-top: 10px;"> <div style="border: 1px solid black; width: 40px; height: 40px; margin: 5px;"></div> <div style="border: 1px solid black; width: 40px; height: 40px; margin: 5px;"></div> </div> </td> </tr> <tr> <td colspan="2" style="text-align: center; padding: 10px 0;">                     ※ 投票の義務化について                 </td> </tr> <tr> <td style="text-align: center; padding: 5px 0;">                     賛成                 </td> <td style="text-align: center; padding: 5px 0;">                     反対                 </td> </tr> <tr> <td style="padding: 5px 0;"> <ul style="list-style-type: none"> <li>・投票率が上がり、関心が高まる。</li> <li>・多くの人の意見が反映される</li> </ul> </td> <td style="padding: 5px 0;"> <ul style="list-style-type: none"> <li>・投票しない自由がある。</li> <li>・関心のない人が参加しても意味がない。</li> </ul> </td> </tr> </table>	①選挙の問題点 <div style="display: flex; justify-content: space-around; margin-top: 10px;"> <div style="border: 1px solid black; width: 40px; height: 40px; margin: 5px;"></div> <div style="border: 1px solid black; width: 40px; height: 40px; margin: 5px;"></div> </div>	②投票率を上げる方法 <div style="display: flex; justify-content: space-around; margin-top: 10px;"> <div style="border: 1px solid black; width: 40px; height: 40px; margin: 5px;"></div> <div style="border: 1px solid black; width: 40px; height: 40px; margin: 5px;"></div> </div>	※ 投票の義務化について		賛成	反対	<ul style="list-style-type: none"> <li>・投票率が上がり、関心が高まる。</li> <li>・多くの人の意見が反映される</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・投票しない自由がある。</li> <li>・関心のない人が参加しても意味がない。</li> </ul>
①選挙の問題点 <div style="display: flex; justify-content: space-around; margin-top: 10px;"> <div style="border: 1px solid black; width: 40px; height: 40px; margin: 5px;"></div> <div style="border: 1px solid black; width: 40px; height: 40px; margin: 5px;"></div> </div>	②投票率を上げる方法 <div style="display: flex; justify-content: space-around; margin-top: 10px;"> <div style="border: 1px solid black; width: 40px; height: 40px; margin: 5px;"></div> <div style="border: 1px solid black; width: 40px; height: 40px; margin: 5px;"></div> </div>								
※ 投票の義務化について									
賛成	反対								
<ul style="list-style-type: none"> <li>・投票率が上がり、関心が高まる。</li> <li>・多くの人の意見が反映される</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・投票しない自由がある。</li> <li>・関心のない人が参加しても意味がない。</li> </ul>								

生徒の活動・反応	形態	教師の支援・評価
<p>(みつける)</p> <p>① 3つの選挙の投票率を見て、何の数字かを考える(1分)</p> <p>② 選挙に行かない理由を予想する(5分)</p> <p>投票まで行くのが面倒くさいな。</p> <p>どうせ自分が投票しても変わらない。</p> <p>1位 用事があったから 2位 支持者、もしくは支持政党がないから 3位 選挙に関心がないから その他 投票所が遠い、天候が悪い、面倒くさい、投票しても変わらない</p> <p>課題提示 選挙の問題点を見つけ、解決方法を提案しよう</p>	<p>全体</p> <p>数値の提示</p>	<p>・明治23年、昭和55年、平成25年の国会議員の投票率を提示し、投票率の低下に気づくようにする。</p> <p>・理由が思いつかない生徒には、自分が行かないとしたらどんな理由がありうるか、考えるよう助言する。</p> <p>・関心がもてるよう、クイズ形式にして問いかける。</p>
<p>(高め合う)</p> <p>③ 投票率に関する資料を見て、選挙の課題を見つける(8分)</p> <p>A 日本とイタリアの投票率の推移 C 若者と高齢者の投票率の差 B 全国年齢別投票率</p> <p>④ 自分が考えた問題点を、班の中で発表する(7分)</p> <p>イタリアと比較して、日本は投票率がかなり低い</p> <p>20代~30代の人が選挙に行かないね。</p> <p>他の国に比べて、日本は高齢者の方が投票率が高いね。</p> <p>社会保障関係費の推移のグラフを見る</p> <p>⑤ どうしたら投票率を上げられるのか考え、提案する(12分)</p> <p>選挙を義務化して、選挙に行かない人に罰を与えるのはどうか。</p> <p>選挙に行った人に何か特典が出ると行くのではないか。</p>	<p>個</p> <p>班</p> <p>個↓班</p>	<p>資料の活用</p> <p>・3つの資料からそれぞれ気が付いたことを記入するよう伝える。</p> <p>・つまづいている班には、投票率が低いのは、どんな人たちかという点に注目できるよう助言する。</p> <p>【評】資料を通して、投票率の低下の特徴をとらえ、現在の選挙における課題を読み取ることができたか。</p> <p>・社会保障関係費の推移というグラフを見せ、若者が選挙に行かないことで、高齢者寄りの政策が優先されることを示す。</p> <p>・より良い話し合いになるように、個人で考える時間を十分確保する。</p> <p>・罰則や特典にばかり目がいくような生徒や班には、選挙方法の工夫に着目するよう助言する。</p> <p>【評】投票率の低下を学び、どのようにしたら解決でき</p>



## 9 成果と課題

資料から、投票率が若い世代を中心に減ってきている現状を把握し、そこからどうしたら投票率を上げるのかという課題への流れは、生徒中心に進めることができた。そして、投票の義務化という観点から、話し合い活動が起こり、活発な意見交換をすることができた。班活動を進める前に、じっくりと個人で資料の読み取りをしたからこそ、このような流れができたと思う。

課題としては、授業の流れを示す課題をもっと工夫することで、生徒の活動をさらに活発にしていくということである。授業を行う上で出される課題を、さらに具体的なものにしていく必要があった。そして、討論をする時間が足りなかった。1時間の授業内容をもっと精選し、意見交換する場面をもっと設定することで、話し合いの深まりが出たように感じた。



# 第3学年1組 社会科学習指導案

嘉山 義政

## 1 単元 現代社会と私たちの生活

### 2 本時の目標

- (1) 仲間と協力しながら、自分の考えを述べ合うことができる。
- (2) 資料から情報化社会の注意すべき点を見つけ出し考察することができる。

### 3 ひとりひとりに「響き合い高め合う学び」を与えるポイント

響き合い高め合う場面

○情報化の注意すべき点を資料集を読み取り考察し、話し合いを行う場面。

ポイントとなる手だて

○仲間との話し合い活動を通して、自分の考えを深める。

### 4 本時の学習過程 (次頁)

### 5 本時の授業の観点別評価規準と評価方法

評価の観点	評価規準	評価方法
関心・意欲・態度	仲間と協力しながら、自分の考えを述べ合うことができる。	観察・ふりかえりカード
資料活用の技能	資料から情報化社会の注意すべき点を見つけ出し考察することができる。	観察・ノート ふりかえりカード

### 6 板書計画

☆情報化社会の便利な点と注意すべき点を知ろう。

何で情報を手に入れているか

新聞、テレビ、携帯電話、雑誌…



情報化社会

情報化社会で便利になったこと

- ・新しい情報が手に入る
- ・世界に情報を発信できる

情報化社会の注意すべき点

- ・情報を精査しなければならない
- ・個人情報の取り扱い

### 7 成果と課題

成果としてはほぼ全員が授業に参加できる授業となり、関わりをもって班活動を行えたことで、活発な意見交流ができた。しかし、全体となるとなかなか意見が出ず、課題の設定をもう少し考えるべきだと感じた。班活動の時の自信を全体発表のときに持てるようにすることは来年度以降の検討課題にしていきたい。



本時の学習過程		学習課題	学習活動・内容	手だて
生徒の活動・反応		形態	教師の支援・評価	
(みつける)	① 確認テストを行う (5分)	全体	<ul style="list-style-type: none"> <li>・全員が参加できるような学びの雰囲気をつくるように声をかける。</li> <li>・事前に確認テストの内容を点検し復習すべきポイントをおさえておく。</li> </ul>	
課題提示	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教科委員が考えた問題を解き、前時までの復習をする。</li> <li>・教科委員が生徒を指名し、答え合わせをする。</li> </ul>		ふりかえりカードの活用	
	<p>情報化社会の便利なところと注意すべき点を知ろう。</p>		<ul style="list-style-type: none"> <li>・情報とはスポーツニュースやブログなどの身近な事例であることをおさえる。</li> </ul>	
(高め合う)	② 情報をどのような媒体を使って手に入れているかを考え、発表する (10分)	個	<ul style="list-style-type: none"> <li>・班員が自分の意見を発表しているか机間支援する。</li> </ul>	
	<p>テレビを見て情報を知った。</p> <p>携帯電話を使って情報を知った。</p>		【評】仲間と協力しながら、自分の考えを述べ合うことができたか。	
	③ 情報化社会がもたらす便利な点を考え、発表する (15分)	個 ↓ 班	<ul style="list-style-type: none"> <li>・思いつかない生徒が多い場合は資料集を参考にすることを提示する。</li> </ul>	
	<p>どこでもいろいろな情報を瞬時に手に入れられる</p> <p>情報の内容がタイムリーで手軽に入手できる。</p> <p>・班長が発表する。</p>		<ul style="list-style-type: none"> <li>・資料からネット犯罪の多さに着目するよう促す。</li> <li>・携帯電話の利便性に伴う問題点にも目を向けさせる。</li> </ul>	
	④ 情報化社会の注意すべき点を資料集を使い考え、発表する (15分)	個 ↓ 班	<ul style="list-style-type: none"> <li>・班員が自分の意見を発表しているか机間支援する。</li> </ul>	
	<p>資料集 P17 をから、簡単に報道を信じてはいけないこともある。</p> <p>手軽に情報を共有できるのだけれど、扱い方を間違えてはいけない</p>		【評】資料から情報化社会の注意すべき点を見つけ出し考察することができたか。	
(ふりかえる)	⑥ 本時の学習内容をふりかえり、記入する (5分)	全体	<ul style="list-style-type: none"> <li>・情報を発信するときはしっかりと考えることが大切ということに気付かせる。</li> </ul>	
			振り返りカードの活用	

# 社会科ふりかえりカード

年 組 番氏名

小単元名

文明のおこりと日本の成り立ち

## 態 度

- A：集中して授業に取り組むことができ、授業内容がよく理解できた。
- B：集中して授業に取り組むことができ、授業内容がだいたい理解できた。
- C：集中して授業に取り組んでいたが、授業内容はあまり理解できなかった。
- D：集中して授業に取り組むことができず、授業内容が理解できなかった。



## 表 現(聴く・話す)

- A：仲間の意見をしっかり聴き、よく考え、進んで発言し、積極的に反応・交流できた。
- B：仲間の意見をしっかり聴き、よく考えたが、あまり発言や交流ができなかった。
- C：仲間の意見をしっかり聴いたが、自分の考えを持つことができなかった。
- D：仲間の意見をしっかりと聴けなかったが、自分の意見は発表できた。
- D：仲間の意見をしっかりと聴くことができず、交流に参加できなかった。

月 日	曜 日	限	授業のタイトル	分かったこと・分からなかったこと	態度	表現	チェックテスト
/							
/							
/							
/							
/							
/							
/							
/							
/							
/							
/							
/							
/							
/							

(A：5点 B：4・3点 C：2・1点 D：0点)



### チェックテスト解答欄

月	日	曜	限	角	答	欄
/				1	2	3
				4	5	
/				1	2	3
				4	5	
/				1	2	3
				4	5	
/				1	2	3
				4	5	
/				1	2	3
				4	5	
/				1	2	3
				4	5	
/				1	2	3
				4	5	
/				1	2	3
				4	5	
/				1	2	3
				4	5	
/				1	2	3
				4	5	
/				1	2	3
				4	5	
/				1	2	3
				4	5	

小单元テスト評価	ふり 返り ・ 反省	----- ----- ----- -----	検印
----------	---------------------	----------------------------------	----

# 数学

数学科がめざす「響き合い 高め合う 学び」

# 「見だし 伝え合い 利用する」 ことで 個を認め共に高めあう 数学科の学び



## テーマに迫る基本的な考え方

学習内容に対する興味・関心を呼び起こし、数学的活動（①既習の数学を基にして、数や図形の数式などを見だし発展させる活動、②数学的な表現を用いて、根拠を明らかにし筋道立てて説明し伝え合う活動、③日常生活や社会で数学を利用する活動）を通して生徒の主体的な問題解決を重視した授業を構成していく中で、生徒は「わかった！」という声を発する瞬間がある。新しい数学的認知が構成されたとき一種の喜びをおぼえる。しかしながら、そこからの深まりが少ないのが、本校数学科の課題である。「わかった」ことを、さらなる思考力、表現力、創造性につなげる活動が少ないように感じていた。そこで本校数学科では、「わかった。だから目標を達成したのだ」ということで数学の学びをストップさせたくないと考える。「わかった！」から、さらに仲間とともに響きあい高めあう活動（思考・表現・創造）を通して、数学の学ぶことの面白さ、考えることの楽しさを実感できる学習を展開していきたい。

## 数学科の「響き合い 高め合う 学び」

日常にある具体的な数学的事象を中心とした教材とのダイナミックな出会いから、数学的活動を通して、主体的に問題を解決しようとする心を育成する。次に、積極的に仲間と多様な考え方を交流しながら、思考力や表現力や創造性を高め合うことに喜びを見いだす。そして、「できるようになった自分」「できるようになった仲間」を認め合い、さらにより高い数学的考え方や概念、判断を持つこと。

## 数学科におけるめざす生徒の姿

能 動	協 同	成 就
<ul style="list-style-type: none"> <li>○数学的な事象・課題に積極的に関わる生徒</li> <li>○「できる」ようになるために、ねばり強く、自らの力で学習課題に取り組む生徒</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○人に分かりやすく解法や自分の考えを説明することができる生徒</li> <li>○人の考え方を正確に読み取り、自分の考え方と比較し、さらに深めることができる生徒</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○「できるようになったこと」や「まだできないこと」を認識し、次の学習に生かそうとすることができる生徒</li> <li>○自他の学力の向上を素直に認め合える生徒</li> </ul>

## 指導・支援の手立て

能 動	協 同	成 就
<ul style="list-style-type: none"> <li>●内容に対する興味・関心を呼び起こす数学教材・教具の開発。</li> <li>●単元計画・学習課題の明確化</li> <li>●数学的調査活動等の重視</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●グループ活動など協同的な学習スタイルの工夫</li> <li>●活発な意見交流を支える教師の指導助言のあり方</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●授業中の声かけ（評価）</li> <li>●ふりかひの活用方法の発展化</li> <li>●生徒の評価、教師の評価を次の指導に生かす、新たな授業計画</li> </ul>

# 個人追求とグループ追求の指導の工夫

金原 佑介

## 1 単元 連立方程式

### 2 本時の目標

- ① 様々な解決方法に取り組む中で、連立方程式の有用性に気づき、進んで連立方程式の考え方や手法を生かすことができる。
- ② 具体的な事象の中の数量関係を捉えて、式に表すことができる。

### 3 ひとりひとりに「響き合い高め合う学び」を与えるポイント

#### 響き合い高めあう場面

○ 班活動を通して、自分の考えを班の仲間に伝える場面。

#### ポイントとなる手だて

○ 個人追求の時間に手が止まっている子にはヒントカードを与え全員に考えをもたせる。

#### 本時の学習過程

学習課題

学習活動・内容

手だて

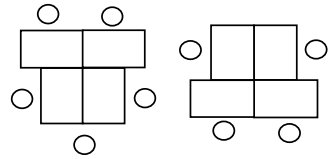
生徒の活動・反応		形態	教師の支援・評価
<p>&lt;みつける&gt;</p> <p>① 前時の復習をする(5分)</p> <p>② 本時の課題を知る(3分)</p> <p>連立方程式の良さを理解することができる</p> <p>課題1 1個30円のチョコと1個50円のチョコを合わせて30個買いました。そのときの代金は1180円でした。それぞれ何個ずつ買ったでしょう。</p> <p>③ 解法を考える(10分)</p> <p>わからないものが2つあるから文字を2つ使って解こう!!</p> <p>表を使って表したら求められそう!!</p> <p>一次方程式を使ってやってみよう!!</p>		<p>個</p> <p>全体</p> <p>個</p>	<p>・連立方程式の解法が身についているか確認する。</p> <p>・身近な話題の中での問題を提示することで生徒の興味をひく。</p> <p>・手が止まってしまった生徒にはヒントカードを見せる。</p> <p>・できた生徒には他の解法も考えるよう促す。</p>
<p>&lt;高め合う&gt;</p> <p>④ 班で交流をして発表の準備をする(10分)</p> <p>⑤ それぞれの解き方について考える(7分)</p> <p>30円のチョコを <math>x</math> 円、50円のチョコを <math>y</math> 円とすると</p> $\begin{cases} x + y = 30 \\ 30x + 50y = 1180 \end{cases}$ <p>と表される。この連立方程式を解く。</p> <p>30円のチョコを <math>x</math> 円、50円のチョコを <math>30 - x</math> (円) とすると</p> $30x + 50(30 - x) = 1180$ <p>と表される。この一元一次方程式を解く。</p>		<p>班</p> <p>全体</p>	<p>・班の全員が解き方を理解してから発表の準備を始めるように指示をする。</p> <p>・それぞれの解き方を比べて、それぞれの良さや関連性に気づかせる。</p> <p>【評】 連立方程式の有用性に気づき、進んで連立方程式の考え方や手法を生かすことができたか。</p>

表を元に考える。	<table border="1"> <tr> <td>30円のチョコ</td> <td>30</td> <td>29</td> <td>28</td> <td>27</td> <td>...</td> </tr> <tr> <td>50円のチョコ</td> <td>0</td> <td>1</td> <td>2</td> <td>3</td> <td>...</td> </tr> <tr> <td>合計金額</td> <td>900</td> <td>920</td> <td>940</td> <td>960</td> <td>...</td> </tr> </table>	30円のチョコ	30	29	28	27	...	50円のチョコ	0	1	2	3	...	合計金額	900	920	940	960	...		
30円のチョコ	30	29	28	27	...																
50円のチョコ	0	1	2	3	...																
合計金額	900	920	940	960	...																
	⑥ 課題2を解く(10分)	個	<ul style="list-style-type: none"> <li>・課題1のどの解き方を使ってもよいことを伝える。</li> <li>【評】具体的な事象の中の数量関係を捉えて、式に表すことができたか。</li> </ul>																		
課題2	みかん2個とリンゴ3個で610円、みかん1個とリンゴ2個で380円になりました。みかん1個とリンゴ1個の値段はいくらでしょう。																				
<ふりかえる>																					
	⑦ 本時の学習をふりかえる(5分)	個	<ul style="list-style-type: none"> <li>・問題によって表や一元一次方程式は使いにくいことを話し、連立方程式の良さに気づかせる。</li> </ul>																		

#### 4 今回の授業で意識したこと

生徒同士が関わりをもてるように3つの工夫をしました。

1つ目は机の配置です。机の配置はなるべく生徒の頭が近づくような形で考えました。5人班と4人班で机の形を変えて取り組みました。



2つ目は個の時間を確保することです。グループでの話し合いを活発にするためには、まず個人の意見をしっかり持たせることが大切です。そこで、グループで考える時間の前に、誰にも相談せず一定時間自分の考えで問題を解く時間を設定し、その後のグループ学習へつなげるための自分の考えをしっかりと持たせる時間を作りました。また、ヒントカードを準備して考えをもてない子への支援も

していきました。

3つ目は、班の全員が説明できるように班活動をするように声かけをしたことです。分からないと言える雰囲気をつくり、理解出来た子からの関わりだけではなく、理解出来ていない子からも「なんで？」や「どうして？」という関わりを出来るような雰囲気をつくりました。



#### 5 終わりに

今回の授業では、生徒同士が関わりをもてるような授業を意識しました。その結果、生徒たちは自分から分かろうとする姿を見せてくれました。分かる子が一方的に教えあうのではなく、相互に関わりあって、どちらにとっても効果的な学習が行えていたように感じました。今回のように生徒が自分から関わりをもちたいと思えるような授業をもっと考えていきたいと思いました。

# 学び合いの授業のコーディネートとその評価

## —子ども主体の授業展開とするための工夫について—

喜田村 次郎

### 1 はじめに

本校の現職教育では、「確かな学力の定着をめざした『響き合い 高め合う 学び』を～『みんなで分かるようになる』授業づくりを通して～」という研究主題のもとで取り組んでいる。この研究主題を踏まえ、教科部会では『「見だし 伝え合い 利用する」ことで個を認め共に高め合う 数学科の学び』をテーマとし、本学年の学び部会では、「『かかわり』を大切に、『みんなでできた』『みんなができた』という喜びが得られる授業」をテーマに掲げ取り組んでいる。生徒一人ひとりが調査、体験、表現などの活動を通して、主体的に数学的事象の意味や働きを考え、自分の考えをもち、自分の言葉で話し、仲間の考えを聞いて交流し合う中で、互いの考えを高め合うことができる授業になるよう心がけている。

### 2 授業実践例

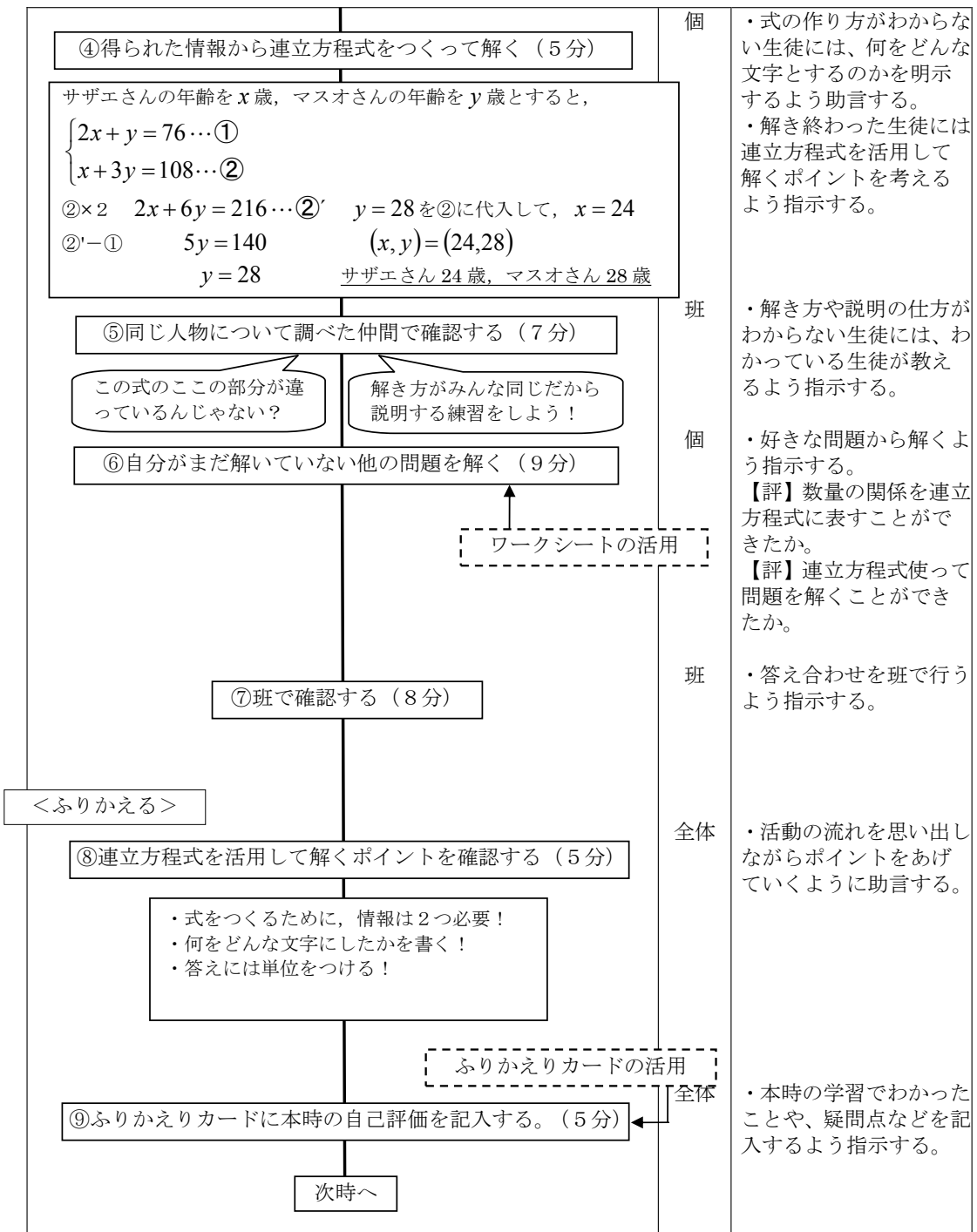
#### (1) 単元 連立方程式 (6/14)

#### (2) 本時の目標

- ①問題を解決するために、数量の関係をとらえ、見通しをもって連立方程式に表すことができる。
- ②連立方程式を使って、問題を解決することができる。

#### (3) 学習過程

生徒の活動・反応		形態	教師の支援・評価
<みつける>	①本時の学習内容を知る (3分)	全体	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学習内容の一部をふせることで、何について学習するか興味・関心を高めるようにする。</li> </ul>
	<p>あの登場人物の年齢を連立方程式を活用することで明らかにしよう!</p> <p>情報カードの活用</p> <p>②受け取った情報カードを基に解く (3分)</p> <p>この情報だけだと解けない!</p> <p>答えが1つに決まらない!</p> <p>もっと情報がほしい!</p>	個	
<高め合う>	<p>③必要な情報を持っている相手を探しその情報を伝え合う (5分)</p> <p>サザエさんの年齢の2倍と、マスオさんの年齢の和は76歳である。</p> <p>サザエさんの年齢と、マスオさんの年齢の3倍の和は108歳である。</p>	全体 & ペア	<ul style="list-style-type: none"> <li>・活動の流れを確認することで、見通しをもつようにする。</li> <li>・誰と情報を伝え合えばいいかわからない生徒には、同じ人物についての違う内容の情報を持っている子を探すよう助言する。</li> </ul>



### 3 おわりに

子どもたち皆が知っている『サザエさん』を教材として扱うことで、興味・関心を高めることができた。グループ学習や発表など、子どもが主体となる活動を中心とすることで、積極的に考え方を話し合い、理解を深め合うことができた。発表の場面では、全員が生き生きと積極的に発表することができた。

これらのことから、本時の目標である「問題を解決するために、数量の関係をとらえ、見通しをもって連立方程式に表すことができる」は、達成できたと感じている。

## 1 単元 平面図形

2 内容 いろいろな作図問題に挑戦する。

## 3 本時の内容

- ①問題文を理解し、作図の仕方を説明できる。
- ②グループで活動し、問題を解決することができる。

## 4 響き合い高め合う場面

問題文を飛んで、作図の仕方を説明し合い、問題を解決することができる場面。

## 5 本時の学習過程

<みつける>

- ①音声計算トレーニングを行う。(個・ペア)
- ②基本の作図をかく。(個)
  - ・垂直二等分線
  - ・角の二等分線
  - ・与えられた線分の長さを1辺とする正三角形
  - ・直線上にない点Pを通して直線に垂直な直線
- ③答え合わせをする。(全体)
- ④垂直二等分線、角の二等分線、円の意味を集合の考えで確認する。(全体)
  - ・垂直二等分線・・・2つの点から等しい距離にある点の集合
  - ・角の二等分線・・・2つの(半)直線から等しい距離にある点の集合
  - ・円・・・ある点から一定の距離にある点の集合

<高める>

- ⑤本時の目標を知る。(全体)
 

問題文を理解し、作図の仕方を説明しあって、問題を解決させよう
- ⑥グループ取り組み方を確認する。(全体)
  - ・班長を指名する。
  - ・班長が司会をし、時計回りに考えを発表して、問題を解決する。  
「わからない」は禁句で、間違ってもいいから、自分の考えを発表する。
  - ・班で解決できたら「OK」マークを、解決できなかったら「SOS」マークを黒板にはり、他の班からの応援を頼む。
- ⑦問題文を読み、班で問題解決の作図を考えて、問題を解決する。(班)

<ふりかえる>

- ⑧ふりかえりカードで、本時のふりかえりをする。(個)





6 参考資料 (授業で使ったプリント)

### (1) 基本の作図

基本の作図を復習しよう 組番氏名 \_\_\_\_\_

① 線分ABの垂直二等分線      ②  $\angle AOB$ の二等分線

③ 線分BCの長さを1辺とする正三角形      ④ 点Pを通り、直線ABに平行な直線

### (2) 問題編

怪盗ルパンを探え!!

正三角形で構成された作図問題のプリントです。...

### (3) 作図編

7 生徒の感想

- ・ルパンの宝を探ることができた。
- ・問題8までしかできなかったが、1つ1つの作図をしっかりとすることができた。
- ・思ったより難しいところがあったが、班で楽しく協力してできたのがよかった。

8 成果と課題

生徒全員が、コンパス、分度器、三角定規の3点セットを持ってきて、基本の作図に取り組んだことから、生徒の参加度は100%とみてよいと思う。

生徒が興味のある課題で、班全員で話し合いながら問題を解決し、作図に挑戦していたため、生徒から満足する声を聞くことができた。

参観者(社会科)から、作図より問題文を理解するほうが大変という意見があった。そのためか、時間内に解決できない班があったので、難しい問題文のところには、ヒントを与えて、時間内に解決できる配慮をしたい。

# 数学科学習指導案

横山 雄大

## 1 単元 平方根

### 2 単元構想

中学1年で学習する負の数は、温度計やゴルフのスコア等、今日では生徒が身近に接する機会が多く、負の数の実在については抵抗がない。一方、 $\sqrt{2}$ のような数に接する機会は、中学3年で学習するまで皆無であったといっても良い。日常生活で使用する機会がなかったからである。しかし、意外なところにルートの関係が隠れている。そこに、目を向けることで平方根を扱うことへの抵抗をなくし、直接活用される二次方程式につなげていきたい。

### 3 本時の目標

- ①身のまわりにある比の規則を探ることができる。
- ②計算によって平方根を求めることができる。

### 4 ひとりひとりに「響き合い高め合う学び」を与えるポイント

#### 響き合い高め合う場面

○班でより多くの比を測る場面

#### ポイントとなる手だて

○班の全員が活躍できるように、班の活動時に役割を分担する。

### 5 本時の学習過程（次ページ）

### 6 本時の授業の観点別評価規準と評価方法

評価の観点	評価規準	評価方法
関心・意欲・態度	進んで身のまわりの比を探ることができる。	観察
知識・理解	身近にある平方根を見つけ、求めることができる。	ノート・観察

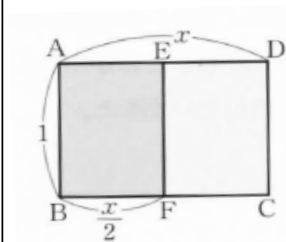
### 7 本時の考察

本時では、平方根が紙の大きさの比に使われていることを知り、身近に感じるように取り組んだ。身のまわりの物の比を調べているとき、黄金比とは別の比はないかを探す課題を出したが、黄金比の物を探す活動のようになってしまった。課題の提示方法に問題があったのか生徒が目的が分からないままの活動になってしまった。そのため、活動後の話し合いがうまく進むことがなかった。自分は今年度、追求し続けたい課題を設定するように取り組んできた。課題の設定は良かったが、課題を伝えることができなければ意味がないので設定だけで終わらないようにしていきたい。

### 8 今年度の取り組み

今年度は基礎学力の定着のため、基礎問題を多く解くように取り組んできた。

授業の最初に基礎的な問題を解く時間をとり、基礎力の向上の時間とした。昨年度の音声計算トレーニングや宿題の復習のチェックテスト、入試過去問の計算問題などに取り組んだ。また、毎授業で授業の復習を兼ねた宿題を出し、家庭学習での基礎問題を解く時間を確保した。

生徒の活動・反応	形態	教師の支援・評価
<p>&lt;みつける&gt;</p> <p>① チェックテストを行う (5分)</p>	<p>個 全体</p>	<p>・教科委員が行うテストのサポートをする。</p>
<p>② 長さを測らずに長方形を描いて比を測る (5分)</p> <p>1 : 1.7      1 : 1.6      1 : 1.4</p> <p>身近に使われている平方根を見つける!</p>	<p>全体</p>	<p>・長方形の比が1.6に近いことから黄金比についておさえる。</p>
<p>&lt;高め合う&gt;</p>		
<p>③ 身近にあるものの縦と横の比を求める (13分)</p> <p>教科書は18cmと25.5cmだから約1 : 1.4だ</p> <p>折ったフリカは15cmと21cmだから1 : 1.4だ</p> <p>開いたフリカは21cmと29.6cmだから約1 : 1.4だ</p>	<p>班</p>	<p>・比を出すときに1 : xの形にする計算方法を伝える。 ・班内で仕事を分担することで一人一人が活動できるよう指示する。</p>
<p>④ 測った比を全体で確認する (5分)</p>	<p>全体</p>	<p>・ふりかえりカードを開いた状態でも閉じた状態でも比が同じであることに気づくような支援する。</p>
<p>⑤ 計算によりふりかえりカードの正確な比を求める (12分)</p>	<p>班</p>	<p>・解き方が分からない生徒には班内の仲間に助けをもらうように支援する。</p>
 <p><math>1 : x = \frac{x}{2} : 1</math></p> <p><math>\frac{x^2}{2} = 1</math></p> <p><math>x^2 = 2</math></p> <p>xは正の数だから <math>x = \sqrt{2}</math></p>	<p>全体</p>	<p>【評】計算によって平方根を求めることができたか。 【評】身近にある平方根に気づくことができたか。</p>
<p>⑥ 白銀比について知る (5分)</p>	<p>全体</p>	<p>・生徒が調べた比を使い、白銀比の便利さを伝える。</p>
<p>&lt;ふりかえる&gt;</p>		
<p>⑦ ふりかえりカードを記入する (5分)</p> <p>ふりかえりカードの活用</p>	<p>個</p>	<p>・今回の授業で分かったこと分らなかったことをふりかえるよう助言する。</p>

# 進んで学ぶ 犬山の生徒の育成

## 一身のまわりにある用紙に潜む平方根を考えることを通して一

東 猴 弘 晃

### 1 単元 平方根

#### 2 単元構想

##### (1) 単元の指導意図

本単元では、数の平方根について理解し、数概念についての理解を一層深めることを目標にしている。また、今後学習する二次方程式や三平方の定理などで、平方根が、基礎として重要な働きをすることになる。そのために、平方根の意味をしっかりと理解させたり、平方根を含む式の計算などは十分習熟させたい。

##### (2) 単元計画

15 時間完了 本時 13/15

### 3 本時の目標

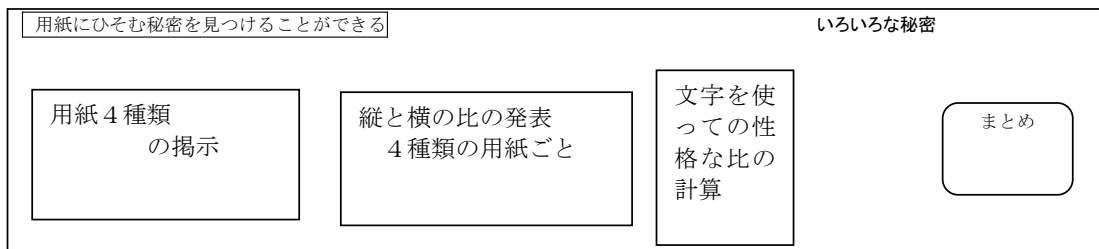
- ① A版・B版の縦と横の比を求めたり、面積の関係を求めることができる。
- ② 仲間と共に高めあうために、積極的にかかわり、挙手、発言、反応ができる。

### 4 本時の学習過程 (次ページ)

### 5 本時の授業の観点別評価規準と評価方法

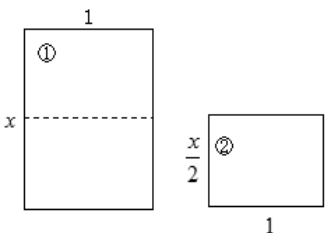
評価の観点	評価規準	評価方法
関心・意欲・態度	自分の意見を持ち、進んでかかわり参加することができる。	観察
知識・理解	用紙の縦と横の比や、面積の関係を求めることができる。	ワークシート・発表

### 6 板書計画



### 7 生徒の様子と反省

A3、A4、A5、B4、B5 の用紙を見せ、何に使われているかを考えさせたところ、小説や雑誌、週刊誌などイメージを沸かせ楽しい雰囲気ではじめることができた。縦と横の比を求める場面では、丁寧に筆算で求める生徒も多かった。難しい生徒に対しては、計算機を渡し、解決の支援とした。数学が苦手な生徒を含め、すべての生徒が縦と横の比が 1.41 に近い値を求めることができた。正確な比を文字を用いて求める場面では、教師主導で⑥の図をかき、長さを与えることで比の計算を取り組みやすいように工夫した。比の計算では、途中式までは自力でかけるが、最後の  $x$  の値を求めるところまでは難しい生徒が多かった。しかし、前単元の平方根の復習をすることで解決することができた。紙の大きさの良さから感動につなげることはできなかった。

<p>&lt;みつける&gt;</p> <p>①導入課題に受けてのクイズを提示する (3分)</p> <p>②4種類の用紙について気づいたことを発表する (3分)</p> <p>A4 という名前      面積が半分!      Bの方が大きい</p> <p>③本時の課題を提示する (2分)</p> <p>4種類の用紙を提示</p> <p>A版・B版の用紙にひそむ秘密を見つけまとめることができる</p> <p>④用紙の縦と横の長さを測り、その比を求める (10分)</p> <p>A4の横は2.1cm、縦は2.97cmだから縦÷横で1.414・・・cmだ。</p> <p>&lt;高め合う&gt;</p> <p>⑤用紙の歴史・工夫を知る (7分)</p> <p>資料配布</p> <p>紙の寸法には、A版とB版がある。A版はドイツ工業規格で、B版は、江戸時代の公用紙である美濃紙に由来する日本独自の規格である。 A版もB版も、何回長い辺(縦)を半分に折っても、縦と横の比は同じで、形を変えないまま、面積が半分になっていくので紙に無駄がない。この形を紙の規格にすることを、ドイツの物理学者オズワルド氏が、提案した。A4版を半分にするとA5版、A5版を半分にするとA6版で、文庫本の大きさになる。</p> <p>⑥B5、B4の用紙の縦と横の正確な比を求める (15分)</p>  <p>①の縦:横 = ②の縦:横  <math>x : 1 = 1 : \frac{x}{2}</math>  <math>\frac{x^2}{2} = 1</math>  <math>x^2 = 1</math>  <math>x = \sqrt{2}</math></p> <p>⑦学習内容をまとめる (5分)</p> <p>A版B版ともに、半分に折っても、同じ形になるようしてある。そのために、縦と横の長さの比は<math>\sqrt{2}</math>と決められている。A版の面積の1.5倍がB版である。</p> <p>&lt;ふりかえり&gt;</p> <p>⑧ふりかえりカードを記入する (5分)</p>	<p>全体</p> <p>全体</p> <p>全体</p> <p>個人 ↓ 班</p> <p>全体</p> <p>個人 ↓ 班</p> <p>個人</p> <p>個人</p>	<p>・表紙を隠した4冊の本の種類を当てるクイズを提示することで、意欲を高める。 ・気づいたことを気軽に発表できるような雰囲気を作る。</p> <p>・かかわりがもてない生徒には、かかわることが得意な生徒に声をかけるよう促す。</p> <p>・仲間の計測値を教えてもらい異なっていたら平均値を求めるよう指示する。 【評】自分の意見をもち進んでかかわり参加することができたか。</p> <p>・2つの図を提示し、横の長さとして一段小さい用紙の縦の長さが等しいことを文字で表わすことができることを伝える。</p> <p>・解決が困難な生徒は、自分がどこまで理解しているかを、仲間に伝え、教えてもらうよう声かけをする。 【評】用紙にひそむ秘密について</p> <p>自分の言葉でまとめることができたか。</p>
--	---	--

1 単元 文字の式

2 本時の目標

- ①山登りにかかる時間を文字を使って表すことができるようになる。
- ②個数や料金などの数量を、文字を使つて的確に表すことができるようになる。

3 ひとりひとりに「響き合い高め合う学び」を与えるポイント

響き合い高め合う場面

○班追究で、答えを求めるための式を考え、関係性を見つけ出す活動をする場面。

ポイントとなる手だて

○班追究で関係性を見つけ出す場面で、共通な部分と違う部分に注目できるようにする指示。

4 考察







(1) 成果

- ・生徒同士でスムーズな交流ができ、今回から始まる単元の教えあえる雰囲気づくりの基礎ができたと感じることができた。
- ・小学校で得た知識を序盤に持ってくることで、総ての生徒が課題に入っていくことができた。
- ・ワークシートを活用したことで、関係性を見つけることが目で確認し易く、交流しやすい環境を作ることができた。
- ・前の単元の「正の数、負の数」で得た知識を確認しながら、授業を進められた。

(2) 課題

- ・文字式には ( ) をつけて単位を表すこともここで教えなければならなかったが、ワークシートに単位をつけてしまい、徹底できなかった。
- ・生徒達は何が分かって何が分からないのかを把握できておらず、もっとテンポよく進められる場面を作ることで、考える時間や交流する時間を余裕を持たせられると良かったと感じた。

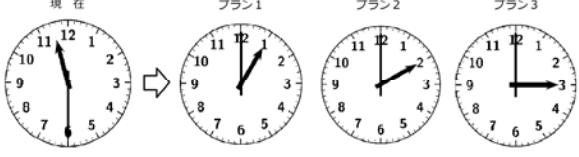
家族で山登りしようとする計画を立て、到着するプランが3つ考えられる。出発の時刻は11時30分にした。頂上まで何分で到着するかを考えて、計算式をたてて求めてみよう。

現在の時刻	頂上に到着する時刻	かかる時間
		( ) 時間 ( ) 分 式) _____ (分)
		( ) 時間 ( ) 分 式) _____ (分)
		( ) 時間 ( ) 分 式) _____ (分)

↓

長針が12を指す場合を文字を使ってあらわすと  
( ) 時間 ( ) 分  
式)



学習活動・内容	形態	教師の支援・評価
<p>&lt;みつける&gt;</p> <p>① 音声計算トレーニングを行う (5分)</p>	全体	<ul style="list-style-type: none"> <li>・声を出す活動をするすることで、場を活気づかせる。</li> </ul>
<p>課題 いろいろな式を文字を使ってあらわせるようになるろう</p> <p>② 山登りにかかる時間を求める計算式を考えて発表する (10分)</p>	班全体	<ul style="list-style-type: none"> <li>・どのように計算すると答えが求められるのかを班で伝え合う指示する。</li> </ul>
<p>ワークシートの活用</p> <p>家族で山登りをしようと計画を立て、頂上に到着するプランが3つ考えられる。出発の時刻は11時30分にした。頂上まで何分で到着するのかを考えて、計算式をたてて求めてみよう。</p>  <p>現在 → プラン1 → プラン2 → プラン3</p> <p>プラン1は1時間30分かかるから、<math>60 \times 1 + 30 = 90</math> (分) ...</p> <p>③ 文字式で表し方を知る (6分)</p> <p>a時間30分かかる場合だから、<math>60 \times a + 30</math> (分)</p>	班全体	<p>【評】山登りにかかる時間を文字を使って表したとき、文字式で表そうとすることができたか。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・数字の式で3つの場合を比較して、共通の部分と違う部分がどこかを判断できるように支援する。</li> </ul>
<p>&lt;高め合う&gt;</p> <p>④ 1種類の文字を使って文字式で作る問題に取り組む (10分)</p> <p>1個 a g のドーナツ 5 個を、40 g の箱に入れたときの全体の重さは、(1個の重さ) <math>\times</math> 5 + 40 (g) だから、表し方は <math>a \times 5 + 40</math> → 問2</p>	全体 個 全体	<ul style="list-style-type: none"> <li>・問題文からキーワードのまとまりになる部分を考えるよう支援する。</li> </ul>
<p>⑤ 2種類の文字で表される数量を文字式で表す (12分)</p> <p>1冊 120 円のノートを a 冊と 1本 100 円のボールペンを b 本買ったときの代金を式を書きなさい。 → 問3</p>	全体 個 全体	<ul style="list-style-type: none"> <li>・問題文からキーワードのまとまりになる部分を考えるよう支援する。</li> <li>・問3を全員が達成できるように、ペアでの相談を指示する。</li> </ul>
<p>&lt;ふりかえる&gt;</p> <p>⑥ 本時の学習のポイントを確認する (3分)</p> <p>ワークシートの活用</p>	全体	<p>【評】文字を使って、いろいろな数量を式に表すことができたか。</p>
<p>⑦ ふりかえりカードに、本時の自己評価を記入する(4分)</p> <p>ふりかえりカードの活用</p>	個	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分自身のよかったこと、気づいたこと等の記入を指示する。</li> </ul>

# 数学科学習指導案

牛田 達夫

## 1 はじめに

本校では、本年度全学年共通の内容として、下記の2つのことを実践している。

- ①授業の最初に音声計算トレーニングを行い、基礎学力向上を図る。
- ②授業の最後に時間をとり、振り返りカードを記入し授業のまとめを行う。
- ③授業内容の復習として、学習した内容を課題に出し、確認を計った。

本単元では、平方根の意味を理解し、平方根の大小関係や根号を含む式の計算を学習してきた。本時は、日常生活に目を向け、どのような場面で平方根が利用されているかを知ることによって親しみやすいものとしてとらえさせていきたい。また、さらに平方根の意味を理解させ、次時の単元である二次方程式につなげていきたい。

## 2 授業実践

### (1) 単元 平方根 (13/15)

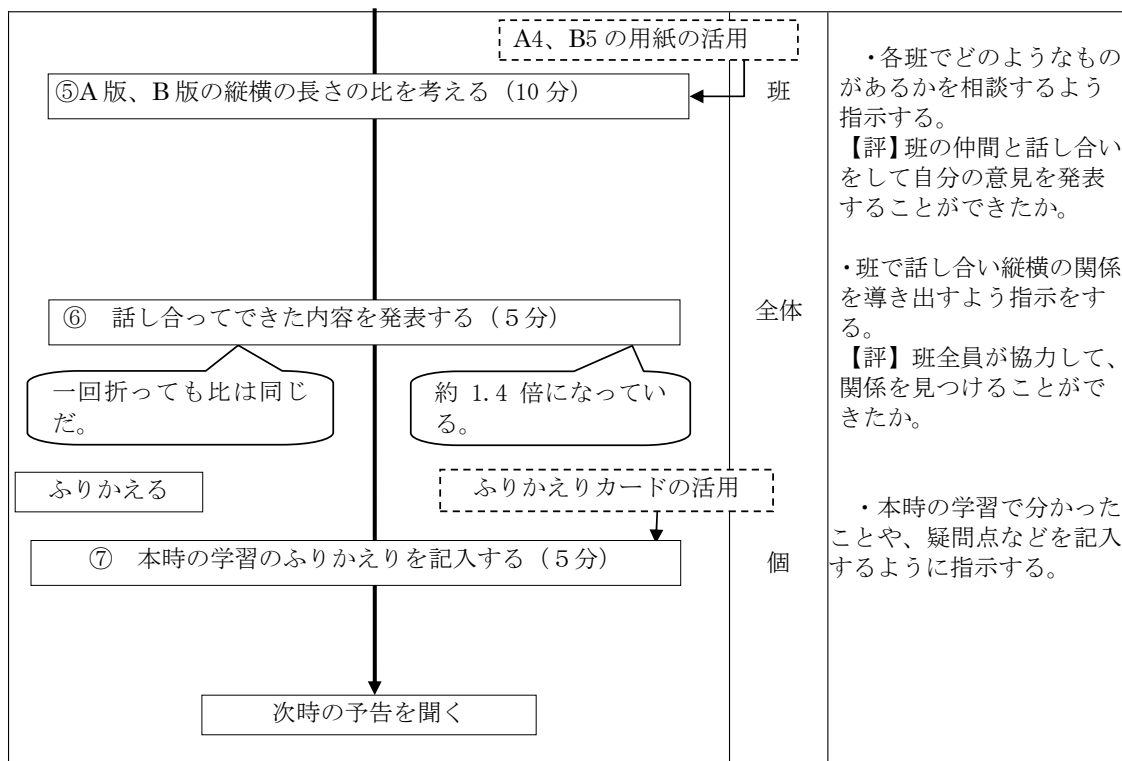
### (2) 本時の目標

- ①平方根の基本的な内容を理解し、活用することができる。
- ②平方根を身近なものとしてとらえることができる。

### (3) 学習過程

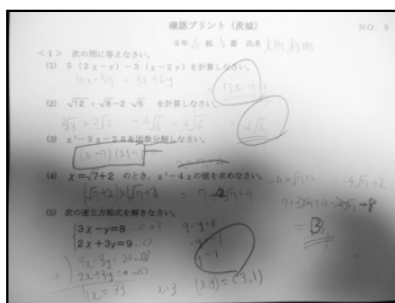
学習課題	学習活動・内容	手だて
生徒の活動・反応	形態	教師の支援・評価
みつける ①小テストを行う (5分) 身近なものの中から平方根を見つけよう	個	・各自で問題を解き、分からない問題については相談して解決するよう指示する。
② 縦横の長さの比を調べる (10分) ワークシートの活用 ノートの縦は、横は、 教科書はどうだろう 下敷きは、どうだろう	ペア	・自分が持っているものの縦横の長さを測り何倍になっているか考えるよう指示する。
③ 調べた内容を発表する (5分) 教科書の横と縦の長さの比が1:1.4 下敷きは、約1:1.4かな	班	・教科書、ノートの縦横の関係をおさえる。
高め合う ④ 同じような比になっているものを考えよう (10分) ワークシートの活用 黒板は違うかな? A4、B5の紙はどうか 他にはないかな	ペア	・求めた答えをワークシートに記入するよう促す。



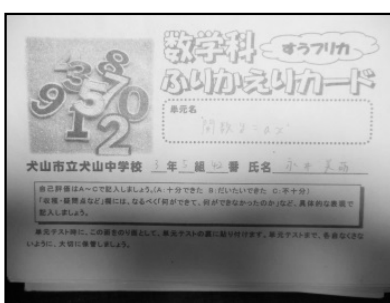


#### (4) 生徒の様子

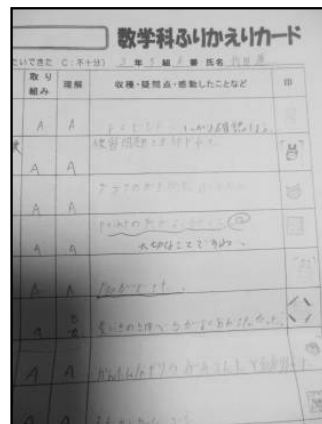
個人で計測をしたり、ペアで確認をすることで、自分の考えを出し合いながら意見交換をすることができた。さらに、班でまとめることで、個々が気がついたことを班長中心に意見をまとめ、個々の意見を確かめ合うことができた。また、発表の場でも黒板に提示したやり方を分りやすく記入し、説明することができた。全体に、自分とは違った意見が出た時は、やや不安に思う反面、同じ意見があることがわかると自信を持って発表する場面も見られた。



<小テスト>



<ふりかえりカード>



### 3 おわりに

昨年度、数学科として全学年統一した音声計算トレーニングについては、復習問題として形を変えて毎回行った。最初のうちは、1人で行っていた生徒も何度の繰り返すうちに、分からない問題については、教え合って解くようになってきた。また、学習した内容をすぐ復習することで定着しやすいと考え、学習内容に関する課題を出し、次時の始めに確認を行った。さらに、毎回最後に行っているふりかえりカードを通して、どこがつかずしているのかがわかり、次回の授業で確認することができた。しかし、授業中での発言・発表の場面をみても、自分の意見に自信がないと躊躇する場面も見られた。今後、自分の意見に自信がもて、堂々と発言できる生徒が増えるように、個・ペア・班での班活動を場面を考えながら活用していこうと考える。また、私自身も他の先生方の授業形態を参考にし、話し合うことで学習の内容や流れなどを工夫していく必要があると感じる。



<p>&lt;高め合う&gt;</p>	<p>模型、ワークシートの活用</p>	<p>【評】展開図をもとにして、立体の面と辺の関係を見つけることができる。</p>
<p>⑤ 円錐の展開図を考える。(10分)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>展開図を、ワークシートにかく。</li> <li>辺の色分けをする。</li> <li>立体模型を切って確かめる。</li> <li>正しい展開図を知る。</li> </ul>	<p>円と三角形になると思う。</p> <p>底面以外はおうぎ形になった！！</p> <p>模型の活用</p>	<p>個 ↓ 班</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>展開図は、フリーハンドでかくように指示する。</li> <li>考え易いように、各班に1つずつ円錐の模型を渡す。</li> <li>円錐を切り開くときは、切り込みの位置を指定することで、生徒の失敗を減らすよう配慮する。</li> <li>問題の意味を理解することができない生徒は、記号の記された展開図を利用するように指示する。</li> </ul>
<p>⑥ 四角錐の重なる頂点を求める。(9分)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>個で問題を解く。</li> <li>分からない場合、記号の記された展開図を取りに行く。</li> <li>全体で答え合わせをする。</li> </ul> <p>&lt;ふりかえる&gt;</p>	<p>【目標達成問題】 四角錐の展開図において、点Dと重なる点を求めなさい。 また辺DEと重なる辺を求めなさい。</p> <p>ふりかえりカードの活用</p>	<p>個</p> <p>【評】重なりについての問題を解くことができる。</p>
<p>⑦ ふりかえりカードを記入する。(2分)</p>	<p>個</p>	<p>個</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>本時の学習で分かったことや、疑問点などを数学用語を踏まえて、記入するよう指示する。</li> </ul>
<p>⑧ 次時の学習内容を聞く。(1分)</p>		

## 5 反省

円錐の展開図を予測させる場面では、模型を利用して重なる辺を考えることができたが、円錐台の展開図を予測させたときに正解にたどりつかない生徒が多くいた。模型で見せるだけでは、生徒の理解を深めるという点では物足りなかったようだ。今後は生徒に対して、根拠を明確にする「おさえ」を意識して指導にあたっていきたいと思う。

単元名

# 数学科ふいかえりカード

自己評価 (A: 十分できた B: だいたいできた C: 不十分)

年

組

番

氏名

	月日	学 習 内 容	取 り 組 み	理 解	収 穫・疑 問 点・感 動 し た こ と な ど	印
1						
2						
3						
4						
5						
6						
7						
8						
9						
10						
11						
12						
13						
14						
15						

	月日	学 習 内 容	取 組 み	理 解	収 穫 ・ 疑 問 点 ・ 感 動 し た こ と な ど	印
16						
17						
18						
19						
20						
21						
22						



# 数学科 すうづりか ふいかえりカード

.....  
 単元名  
 .....

犬山市立犬山中学校 \_\_\_\_年\_\_組\_\_番 氏名\_\_\_\_\_

自己評価はA～Cで記入しましょう。(A:十分できた B:だいたいできた C:不十分)

「収穫・疑問点など」欄には、なるべく「何ができて、何ができなかったのか」など、具体的な表現で記入しましょう。そして、失敗から学ぼう！！

単元テスト時に、この面をのり面として、単元テストの裏に貼り付けます。単元テストまで、各自なくさないように、大切に保管しましょう。

理科

## 平成 25 年度 理科各論

理科が目指す確かな学力の定着をめざした「響き合い 高め合う 学び」

# 科学する目を育て、仲間とともに高め合う 理科の学びづくり

### テーマに迫る基本的な考え方

自然界の様々な現象を科学の目で見えていくと、より具体的にそしてより単純なこととしてとらえることができる。理科学習の目的は自然に対する関心を高め、目的意識を持った実験観察を通して、科学的に調べる能力や科学的な見方・考え方を養うことである。以上のような理科の目的を意識して本校の理科教育の目指すべき方向は、「科学する目を育て、仲間とともに高めあう理科の学びづくり」をテーマとして、教材開発と科学的情報の醸成にあたる。

なんらかの法則や知識を学びの主体者（生徒）が持っている状態で、「生の体験」をさせたい。そこから、「すごい！」「あっそうかあ！」「わかったあ！」「なるほどお！」という子どもの反応を引き出していきたい。

### 理科の「響き合い 高め合う 学び」

「おもしろい」とか「楽しい」とかは、受容する側の感情であり、与える側が決められないので、多くの子どもたちに、楽しい理科を経験してもらえるよう支援体制を構築していかなければならない。また、仲間とのかかわりを大切にすることで、学び合いを創っていく必要も大きい。やる気が旺盛になる生の体験や、生活に役立つ直接体験を通して、物事を科学的に考える力を養成していきたい。しかし、体験を通してだけでは理解できにくい概念もある。そこで、納得が理解につながるように、しっかりとした「結果」と「考察」を積み上げてゆく必要がある。目に見える事象に感動しつつ、考えを深め、理解し、感動する授業を構成することも心がけてゆきたい。そのためには「考察」を「語る」場面を多く設定することで、考えが深まっていることを確認する。語った話を、仲間が「かかわり」ながら「聴く」ことで、理解をさらに深めるような授業づくりを目指したい。

### 理科でめざす生徒像

能動	協同	成就
○理科的好奇心を持ち、積極的に事象に関わる生徒 ○実験・観察から発見・確認の思考活動に取り組む生徒	○共に考え、自らの意見を伝え、相手の意見も聞くことができる生徒 ○協力して実験や観察に取り組み、何かを見つけ出そうとする生徒	○仲間と協力して思考し、新たな発見を見出す喜びを感じることができる生徒 ○自他の学力の向上を素直に認め合える生徒

### 指導・支援の手立て

能動	協同	成就
●理科的好奇心を呼び起こす実験教材・教具の開発。 ●単元計画・学習課題の明確化 ●実験技能を向上させる指導形態	●ホワイトボードを使った話し合い活動の定着 ●教科委員中心の授業展開の定着	●ホワイトボードを利用した全体発表で自らの意見を伝える ●教科委員の活動のシステム化 ●スムーズな実験作業。

# 理科学習指導案

佐橋 幸彦  
高野 明香

## 1 単元 身近な物理現象（本時：空気の圧力 19/23）

### 2 本時の目標

- ①大気圧に関わる実験の予想をし、そのように考えた理由を他（班や全体）に発信することができる。
- ②ボウリングの球が空気の力で持ち上がる理由を説明することができる。

### 3 一人一人に「響き合い高め合う学び」を与えるポイント

#### 響き合い高め合う場面

○大気圧にかかわる実験の予想や結果について意見交換をし、納得していく場面。

#### ポイントとなる手立て

○いくつかのスモールステップの実験を通して、実験の結果を考察しながら理解を深め、自分の言葉で説明できるように、意見交換をしながら思考していくグループ学習。

### 4 本時の学習過程

- 1 前時のふりかえり  
圧力の計算を確認する。（宿題のプリント答え合わせ）

- 2 本時の目標の提示

ボウリングの球が空気の力で持ち上がるかどうかを考え、自分の言葉で説明できるようにしよう。

<みつける> 「個人→グループ」

- 3 風船を用いて空気には重さがあることを確認する。机の上の下敷きが持ち上がるかどうかの実験の予想をし、ワークシートに記入をする。グループのメンバーに自分の意見を発信し、実験で確認する。

<かかわる> 「個人→グループ→全体」

- 4 その他の実験の予想をし、グループ内で意見交換をする。自分の予想を他（全体も含めて）に発信する。（演示実験で確認）

<高めあう> 「個人→グループ→全体」

- 5 ボウリングの球が空気の力で持ち上がるかを考え、意見交換をする。

<まとめ> 「全体→個人」

- 6 演示実験より、実験結果を確認する。教師の説明をもとに結果をワークシートにまとめる。

<ふりかえる> 「個人」

- 7 本時の実験結果をペアで説明し合い、個の理解を深める。（起立→終わったら着席方式）その後、ふりかえりカードに記入をする。



## 5 考察および今後の課題

- 実験1 空気を入れる前の風船と入れた後の風船で質量はどうなるか。  
実験2 机上の下敷きを持ち上げることができるか。  
実験3 水を入れた紙コップを下敷きで押さえ逆さにするとどうなるか。  
実験4 空き缶の空気を抜くとどうなるか。  
実験5 風船を容器に入れ、容器の空気を抜いたり入れたりするとどうなるか。  
思考1 地上で購入したポテトチップス（袋）を富士山頂に持っていくとどうなるか。  
思考2 ストローを使ってジュースが飲めるのはなぜか。  
実験6 ボウリングの球を空気の手で持ち上げることができるか。

<実験1> 空気は目に見えないが粒があり、質量もある。つまり、空気には重さがある。

<実験2> 持ち上がらない。空気の粒が上から下敷きを押しつけている。

<実験3> 下敷きが落ちない。水もこぼれない。空気の粒が下から下敷きを支えている。

<実験4> 空き缶がつぶれる。空気の粒が横から空き缶を押しつぶす。

実験2～4において、大気圧は四方八方、あらゆるところからはたらくことを知る。この知識を習得するからこそ、思考1、思考2、実験6の思考が深まっていく。

<思考1> 袋が膨らむ。上空に行くほど、空気が薄く、大気圧が小さくなるため、袋の中の圧力が大きくなるから。

<思考2> ストローの中の空気を抜くことで、ストローの外の圧力が大きくなるため、大気圧によってジュースが押し上げられていく。この思考をすることで、最後のボウリングの球の実験につながる。

<実験6> 筒の中の空気を抜くことで、ボウリングの球が大気圧によって持ち上げられる。この実験で大気圧の大きさを目の当たりにすることができる。ストローと同じ原理なので、生徒もしっかりと説明をすることができた。



- ・ 個人思考をした後に、グループでの話し合いをすることで、自分の意見をもって話し合いに臨むことができる。つまり、話し合いの際、意見を言いやすくなる。担当クラスの理科のグループは1年間の固定であるため、話し合いもスムーズである。このことから、個人思考の時間を確保することは重要であると考える。仮にわからなくても、自分がどこでつまづいたのか、どこがわからないのかを把握した状態で、相談活動に入ることができる。
- ・ 相談活動において、教師が求める内容領域に生徒が達することができなかつたとしても、その領域に近づくために生徒自身が考えることが大切であり、その過程があるからこそ、教師の説明が身につくと思われる。相談活動を取り入れればよいということではなく、授業において、効果が期待できる相談活動を意識して、その時間を確保していきたい。
- ・ 第1学年4月からの継続的な協同学習の取組により、ホワイトボードに記入することや発表、実験の準備や片付けをすることなどを、教師がその都度割り振りをしなくても、生徒同士で分担して取り組めるようになった。発表者などはグループ内で考えてローテーションできるようになっている。しかし、ごく一部のグループでは、ほぼ決まった生徒が活躍する場面も見られるので、グループのメンバーがバランスよく活躍できるようなしかけが必要であることが課題の1つである。1つ確実に言えることは、3年間でどのような授業スタイルを確立するかを、1年次から生徒に伝えながら指導していくことが大切である。一朝一夕では無理。スモールステップを積み重ねる継続的な教科指導が必要である。教材研究はいうまでもなく、常に改善していくべきである。

# 理科学習指導案

林本 幸雄  
高野 明香

## 1 単元 身近な物理現象（本時：「音の性質」 9 / 22）

### 2 本時の目標

- ①音に関するさまざまな現象を体験することで、音に関する興味を高めることができる。
- ②音は音源の振動によって起こることや音の伝わり方を説明することができる。

### 3 一人一人に「響き合い高め合う学び」を与えるポイント

#### 響き合い高め合う場面

- 音に関するさまざまな実験を通し、音の伝わり方を思考する場面。

#### ポイントとなる手だて

- 生徒の興味・関心・思考力を高める各種の実験を用意する。
- 実験をワークショップ形式にし、各自のペースで進める。

### 4 本時の学習過程

#### 〈みつける〉「個人」

- 1 本時の学習過程を確認する。
- 2 本時の目標の提示

音に関わる現象を体験し、音の正体を説明できるようにしよう。

#### 〈かかわる・高め合う〉「個人・班・全体」

- 3 音に関するさまざまな実験を各自行う。
  - ①机やパイプ、壁を叩き、音が伝わるか
  - ②音が鳴っているスピーカーの前に風船を置き、さわってみる
  - ③ボウルにラップを張って食塩をまき、そこに向かって大声を出す
  - ④糸やばねは音が伝わるか
  - ⑤水中では音は伝わるか
  - ⑥太鼓の上にピンポン玉を置き、叩く
  - ⑦ストロー笛を製作する
- 4 ⑧音さを用いる実験を班で行う。
- 5 実験から考えられることを各自プリントに記入する。その後、班で討論を行い、班の意見をまとめ、全体で討論を行う。

#### 〈まとめ・ふりかえり〉

- 6 音の伝わり方をまとめ、ふりかえりカードを記入する。

## 5 考察および今後の課題

中学校理科最初の物理単元である「身近な物理現象」では、「光」・「音」・「力」について学習する。作図や計算等を多く必要とするため、多くの生徒が苦手意識を持ち、「理科は難しい」、いわゆる『理科離れ』が始まるところでもある。そのため、各章での導入ではできるだけ生徒が楽しんで行える実験を取り入れるようにし、興味・関心を持って学習に取り組めるよう配慮した。前章「光」は目に見えるため、視覚によって光の現象が掴みやすい。しかし「音」は目に見えないため、導入では音による現象をできるだけ目に見える形になるように工夫した。

実験が始まると、生徒たちは我先にやりたいところに殺到し、楽しみながら実験を行っていた。生徒実験①・④・⑤で、生徒は音は空気中だけでなく固体や液体中も伝わることを確認できた。特に水中を伝わる様子やばねを伝わる時にはエコーがかかったように聞こえることに驚いていた。実験②・③・⑥では音を発しているものは振動していることを聴覚だけでなく、視覚と触覚によっても体感することができた。⑦ではストローの長さを変え、音の高さの違う2種類の笛を製作する生徒もいた。班で行う実験⑧では、音さの共鳴に驚く姿が見られた。

以上の実験を元に、音の伝わり方を考えた。実験②・④・⑤で音を発しているものは必ず振動していることを確認しているため、その振動がどのように伝わっていくのかを考えるようにした。音さを水面につけたときの様子から、振動が波紋のように伝わっていくことに結び付いていった。

また、本時の次の授業（10 / 22）では、運動場で雷管を用いて音が伝わる様子を実際に観察した。約100mの距離に生徒が旗を持って並び、雷管の音が聞こえたら旗を降ろすもので、旗の降りていく様子から音の伝わり方を視覚で体感することができたように思われる。

今回の実践で、導入で光や音のさまざまな現象に関する実験を多数用いて体験させるが、生徒の興味・関心を高める上で効果があることが確認できた。体験したことをもとに、自然事象の原理や仕組みを考察する上でも思考を助ける一助になったように思われる。しかし、冒頭でも述べたように、この単元は作図や計算が多数必要とされるため、せっかく興味を持って学習を進めても壁にぶつかってしまい、「面白いけど難しい」という中途半端な思いを持たせて終わってしまうことがある。やはり「面白くてよく分かる」授業にしていきたいために、興味を高め、かつ力をつけられる授業を目指していきたい。



# 理科的思考力を高める理科授業

## －運動とエネルギーの概念思考を通して－

篠田 浩志

### 1 はじめに

新学習指導要領が完全実施となり、今まで重点がおかれてきていた「生きる力」に加え、それを支える確かな学力、豊かな心、健やかな体の知徳体をバランスよく育てていくことが、より重視されるようになった。特に「言語活動の充実」が加わったことが大きな変化となる。つまり言語活動を通して、思いや考えを伝え、理解を深め、高め合う学びが求められるようになってきた。

そこで、教科委員の活動を中心にして、班学習活動を展開していくことにより生徒たちの理科的思考力の向上を狙った。今回取り扱った題材は途中でレールが無くなったときの物体の運動の仕方であり、力学的エネルギー保存の法則をしっかりと理解しないと、説明することができない現象である。この現象を取り上げ、生徒たちの思考の深まりを目指していきたく考えた。

### 2 実践事例

研究主題に迫るために、以下のように仮説と手だてを設定した。

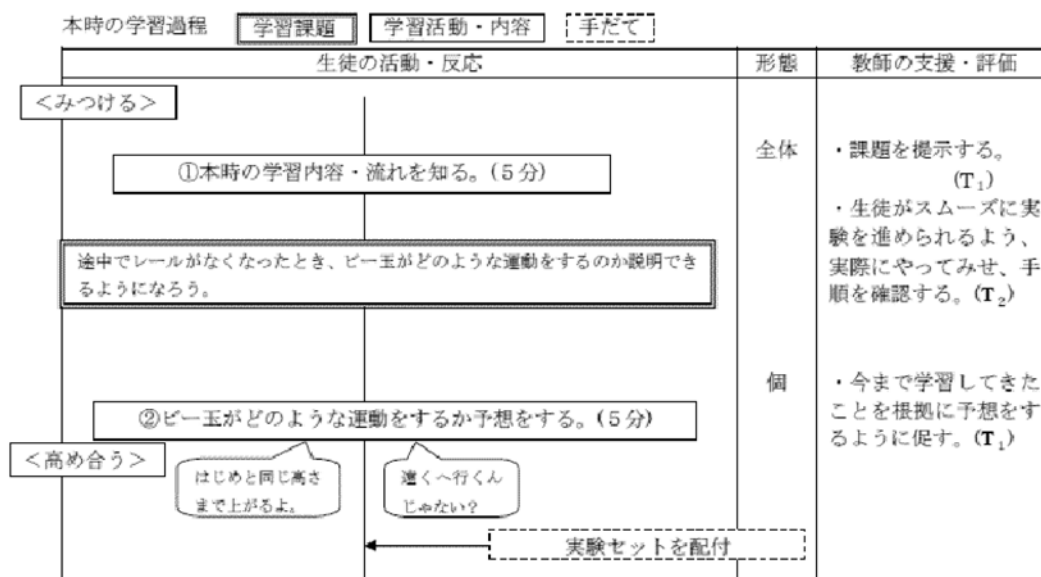
#### (1) 研究仮説

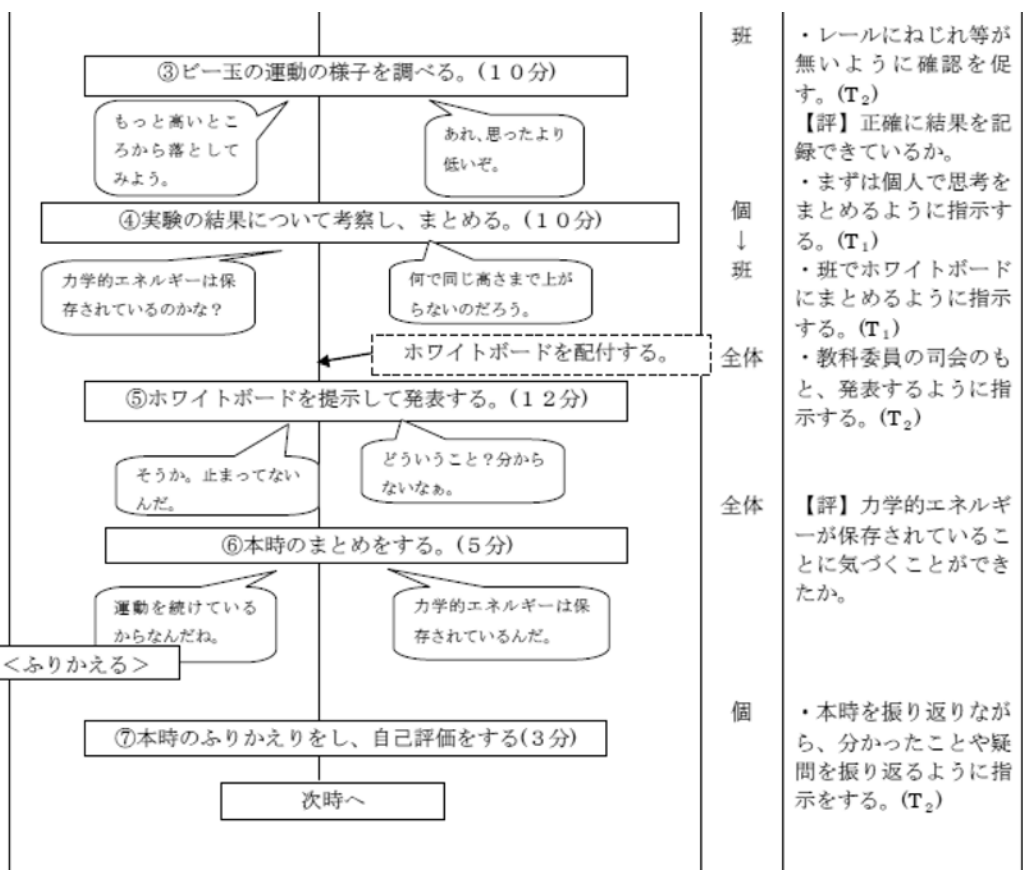
教科委員を中心として授業展開をし、班活動の時間を作ることで、生徒各々が授業を自分たちのものと捉えることができるようになり、個の理科的思考力を高め、集団の質を高めることができるであろう。

#### (2) 手だて

- ①授業開始時に教科委員が本時の目標をみんなに伝え、終了時には本時のまとめを伝える場面を設定する。
- ②ジェットコースターの実験を通し、位置エネルギーと運動エネルギーを関連付けて運動を分析していく場面を設定する。
- ③班発表の折には、教科委員が中心となって司会進行を進める場面を設定する。
- ③班活動の折にはホワイトボードを活用し、思考の過程や思考の変化を記入することで、思考を高める場とする。

### 3 研究の実際





#### 4 研究の成果と考察

授業の開始時に教科委員が本時の目標を全体に伝えることで、生徒はゴールを見据えて授業を始めることができた。このことが、その後の活動をスムーズに行えた大きな要因だと感じる。また、発表時にも教科委員が前に立って進行していくことで、生徒は授業を教師から与えられるものではなく、自分たちで作っていくものという意識が芽生え、ものすごく良い雰囲気での発表が進めることができた。

班活動の折には、ビー玉の運動を正確に捉えることによって、生徒はエネルギーの保存と運動を照らし合わせいろいろな意見を出し合い、それぞれ考えをまとめていくことができた。ホワイトボードに頭を寄せ合って真剣に話し合う姿も見られ、生徒の高い意欲を感じることもできる。最終的には正解の解答にたどり着けない班がいくつかあったが、それでもかまわないと感じている。大事なことは、事象を正確に捉え、その原因・理由に頭をめぐらせ思考していくことだと考えているからだ。その思考過程こそが、最終的な理科力に繋がっていく。科学という分野は道の世界に迫っていく分野でもある。答えがあらかじめ用意されているのではなく、答えを見つけ出していくのが科学である。あらゆる方面からの可能性を考え、追求していく。その中で誤りに気付いてはもう一度元に戻り、再思考をしていく。幾度もの失敗を経てようやく、真実へとたどり着くのである。このような理科的思考力をつけていくトレーニングの場が中学校理科だと考える。

あなたが、正しい答えを導き出した発表が素晴らしいものだと思ってしまいが、実は塾ですでに習っていることを書いているに過ぎないこともある。それよりも、独自の斬新なアイデアで事象の本質に迫ろうとした、思考過程のほうが何倍も素晴らしく、科学技術立国である日本の未来を託す可能性が大いにある。

今後とも、この理科的思考力を高めていける理科授業の創造に努めていきたい。

# 日常生活と結びつき、五感で体感できる理科授業を目指して

高野 明香  
林本 幸雄

1 単元 植物の生活と種類（本時：植物のなかま分け 17 /19）

## 2 本時の目標

- ①被子植物を分類するからだのつくりの特徴を覚える。
- ②分類形質を用いて野菜の種類を同定し、食用部分が体のつくりのどの部分か分類する。

## 3 一人一人に「響きあい高め合う学び」を与えるポイント

### 響きあい高め合う場面

○各グループで既存の知識で野菜を分類し、意見交換をして班内での意見を集約する場面。

### ポイントとなる手立て

○教材として使用する野菜に、気づけばヒントとなるような部位を残したまま提示する。  
(例えば、タマネギの場合には、葉と根がついたものを用意する。)

## 4 本時の学習過程

1 既習内容の簡単なふりかえり

2 本時の目標提示

被子植物の特徴について理解し、身近な野菜を分類できるようにしよう

<みつける> 「個人→グループ」

3 被子植物の分類方法について各自まとめをし、グループ内にて確認をおこなう。

<高め合う> 「全体→グループ」

4 被子植物の分類のポイントについて全体で確認する。

5 分類の確認方法についてグループで話し合い、実験方法について確認する。

6 各グループで考えた方法で野菜の分類を行い、ホワイトボードにまとめる。

<まとめ> 「全体→個」

7 野菜の種類と分類したポイントの確認を行い、可食部がどの部位か確認する。

<ふりかえる> 「個人」

8 本時学習した内容を振り返る。

## 5 考察および今後の課題

### (1) 子どもの姿

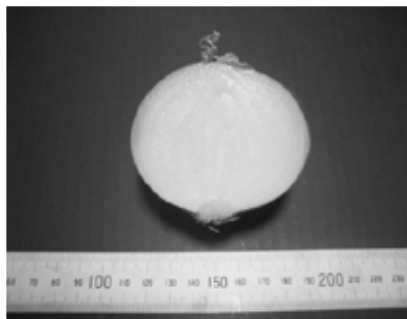
近年、教育現場のみならず様々な場面で知識先行型の子どもを多く見かけるようになった。その様な子どもの場合知識が優先され、体感する事をないがしろに考えている傾向にある。実際に実験をさせると技能が伴っていないことが多く、知識と経験が結びついていないケースが多々ある。今年は1年生を主に3クラス受け持っているが、皆とても素直で、理科実験や現象に興味を持っている子どもも多くいる反面、小学校時代から理科に対する苦手意識を持ち続けている子どもも少なくない。そこで、理科授業が日常生活の現象と結びつけば理科の苦手意識を払拭させることが出来ると考え、日々、日常生活と結びつくような授業展開を考えている。

### (2) 実践内容

(単元) 今回実践した単元は、被子植物の分類の単元である。子どもたちはこれまでに、被子植物の体のつくりの特徴を学び、グループごとの特徴について学習してきた。そこで導入で被子植物の分類群ごとの特徴をもう一度体系的に学び、実際に普段の生活で目に入る野菜をこれまでに得た知識で(葉脈、維管束、根の作りなど)分類させた。最終的には野菜の分類名と可食部について考えさせ、グループごとにホワイトボードにまとめ発表させ、意見の共有をはかった。

(教材) 使用した教材は、ブロッコリー(離弁花類; 花・茎・葉)、アスパラガス(単子葉類; 花・茎・葉)、キュウリ(合弁花類; 果実)、タマネギ(単子葉類; 茎・葉)であり、キュウリは茎を(花卉が残っているものはそのまま使用)、タマネギは根が付いたものを使用した。食紅、カミソリ、ルーペ、顕微鏡を準備し自由に解剖したりして観察することを許可した。

(子どもの反応) 分類に関しては、問題なく正解できた。しかし可食部では、ブロッコリーやアスパラガスが花や葉まで食べている事までに気づくグループは限られていた。加えて、タマネギは葉の部分を食べている事実を知らせると、みな一様に驚いていた。



タマネギの断面図。断面底部に見える部分が茎であり、その部分からひげ根が出ている。

### (3) 日常生活と関連した授業の効果

実際に授業で習ったことを生かす実践を取り入れたため、子どもたちの達成感や満足度は非常に高い結果となった。ふりかえりカードに書かれた意見を取り上げると、「自分が学んだ知識が使えて良かった」や「これから道端に生えている草を分類しながら歩きたい」などの効果をうかがわせるようなものがあった。さらに「野菜も植物だということが分かった」などの意見もあり、今回の授業の効果を感じさせる意見である一方、いかに普段の生活が授業と結びついていないかが分かる意見でもあった。

### (4) 今後の課題

上記のふりかえりカードの意見から日常生活と理科の授業の乖離が明らかとなり、明確な今後の課題であることが伺える。その為、実験に日常に即するものをなるべく取り入れる努力が必要であると考えられる。加えて、日々の授業からちょっとした発言などで日常で体験している事柄などを例に挙げ、いかに普段の現象と理科の授業で学んでいることが結びついているのかを実感させる必要もあると考えられた。

# 科学する目を育て、仲間と共に高め合う理科の学びづくり

藤江 敬代

## 1 はじめに

理科は基本的に身近な現象がテーマであり疑問が沢山あるはずである。しかし、最近は教師が与えた情報に対して受け取るだけで、どうして？と発言する生徒が減少しており危機感を感じている。いかに課題を興味深く提示するかは、生徒の学習意欲を高めるために非常に重要である。更には課題を追究する意欲の向上にも欠かせないと考えている。

## 2 手立て

- ①何を学ぶのかをしっかりと提示する。
- ②前時までの基本的な考え方、知っておくべき既習事項について確認、説明をする。
- ③思考を効率的に進めるためのポイントを説明しながら現象を見せる。
- ④個→班→全体で考えをまとめ、結論を導き、しっかりと定着させる。

## 3 実践

### (1) 単元名 電流と磁界

### (2) 本時の目標

- ①フレミングの法則を正しく理解する。
- ②モーターのしくみを説明する。

### (3) 響きあい高めあう場面

モーターの現象を確認し、便利さを確認するとともに前時までの学習を使ってそのしくみを考え、原理を発見する場面

### (4) 授業づくりの視点

- ①生徒は主体的に学び、参加度は100%に近い授業であったか。
- ②授業で扱った課題は学びたくなる・追究したくなる課題であったか。

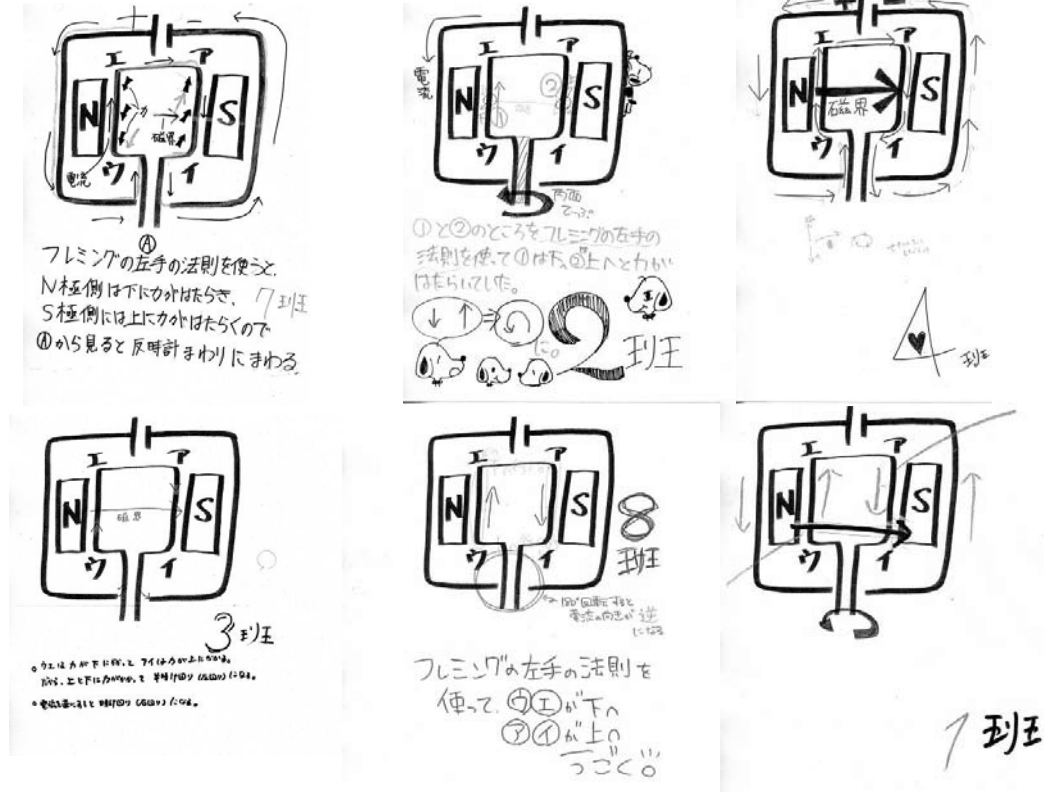
### (5) 学習過程

モーターのしくみを説明しよう。

- ①フレミングの法則の確認をする。〈全体〉
- ②モーターを実際に動かしてみよう。現象を確認する。〈班〉
- ③個人で動くしくみを考える。〈個〉
- ④班で考えをまとめる。〈班〉
- ⑤班ごとに考えたものを発表する。〈全体〉
- ⑥まとめと先生の補足説明を聞く。〈全体〉
- ⑦本時のふりかえりをカードに記入する。〈個〉



#### 4 成果



生徒たちは、モーターという身近な題材が高速で回転するのを観察し、興味を持って取り組むことができた。さらにどうして回転するのかを意欲的に思考することができた。

フレミングの法則をヒントに考えるように指示を与えることによって考察をしっかりと進めることができた。今回の課題は複雑なため一人で考えていると混乱しがちなところを班で討論することによって結論にたどりつけた班が多く見られた。最後は全体発表で結論を確認、定着させることができた。

#### 5 まとめ

今回の取り組みでは生徒に課題への興味を持たせて授業を進めることが出来た。理科の授業では疑問が必ず出てそれを引き金に成長するものだとは私は考えている。課題の提示と追究の方法をいろいろ考え、まずは生徒に興味を持たせ、その上でしっかり思考出来る生徒を育てていきたい。もちろん教師側にも常に力量向上の努力が必要なのはいうまでもないことと考えている。

もう一つの課題は授業内容をしっかりと定着させることである。TTを最大限に生かして小テストなどの回数を確保するなどの努力を今後も続けていきたい。

## 仲間と楽しみながら覚える授業

加藤 由佳

平成 25 年 10 月 9 日 (水) 第 2 時限	第 3 学年 3 組	指導者： 加藤 由佳
響き合い 高め合う場面	イオン式のカードを使って、班の中で電離の式をつくる	
1 単元名	単元 4 「化学変化とイオン」	
2 本時の 目標	①イオン式からイオン名、結合によってつくられる物質名を答えることができる ②イオン式を用いて陽イオンと陰イオンの結合をイメージすることができる。	
3 学習過程	学習活動 or 発問の流れ	
10分 30分 5分 5分	全 グ 全 個	①イオンカードを使ったゲームについて説明する ②班の中でゲームに取り組む ③片付けをする ④授業のふりかえりをする

↑【形態表示 ペ;ペア、グ:グループ、全:全体】

### 1 教材について

本教材は、3年生の「化学変化とイオン」で用いたものである。本単元で生徒たちは、イオン式を覚え、電離の式をいくつか覚えなければならない。なかなか、イメージができず本単元を苦手とする生徒も少なくない。そこで、イオン式のカードを用意し、子どもたちが手持ちのカードから結合できるものをあわせて出していくというゲームを用意した。指導書に書かれていたものを参考にしている。

#### 【用いたイオン式】

陽イオン		陰イオン	
水素イオン	亜鉛イオン	塩化物イオン	炭酸イオン
ナトリウムイオン	銅イオン	水酸化物イオン	硫酸イオン
カリウムイオン	マグネシウムイオン	硫酸イオン	酸化物イオン
アンモニウムイオン	アルミニウムイオン	炭酸水素イオン	リン酸イオン
カルシウムイオン		硫化物イオン	

〔作ることのできる式の例〕

- $H + OH \rightarrow H_2O$
- $Na + Cl \rightarrow NaCl$
- $Ba + 2OH \rightarrow Ba(OH)_2$
- $Cu + 2Cl \rightarrow CuCl_2$
- $2H + SO_4 \rightarrow H_2SO_4$

### 2 授業時の工夫

実際に授業で活用すると、様々なことが起こる。そこで、生徒たちの反応を見ながらルールを変更したり、生徒に提供するものを変えたりして改善した部分の紹介。

カードゲームを行う前にイオン式での電離を授業の前半で行い、イオン式カードで結合させていくイメージを持たせた。また、カードをうまく活用できるように紹介として陽イオンごとに結合する陰イオンをまとめたものを作成して黒板に貼り、生徒たちがカードを出す際の手助けになるようにした。また、3 価のイオンである「アルミニウムイオン」と「リン酸イオン」は渡すことを中止し生徒たちがより簡単に結合の式を作ることができるようにした。

### 3 生徒の感想(イオン式カードゲーム)

- ・カードゲームを通してイオン式に慣れたし、覚えることができました。楽しかったです。
- ・楽しくできた。イオン式をあまり覚えられてなくて大変だったので、覚えておきたいです。
- ・頭を使ったけど、とても楽しくできました。イオン式もだんだん分かってきました。またやりたいです。
- ・カードゲームでイオン式が少し分かってきた。毎日やったらマスターできる。
- ・イオン式の使い方が分かってみました。カードのゲームも自分で分かった組み合わせもあったし、全部なくなって良かったです。
- ・カードゲームがけっこう頭を使って難しかったです。
- ・Cu の使い勝手の悪さがすごすぎる。意外と覚えやすくなった。

### 4 感想と反省

より楽しく覚えてもらいたい、興味を持ってもらいたいという気持ちで用意した教材である。実際に授業で使用してみると、生徒たちへ配る説明書、板書の工夫、渡すカードの種類など改善点が多かった。

生徒たちの反応はよく、ふりかえりカードにも「楽しかった」という内容の感想が多かった。実際に、授業中の生徒たちの様子を見ていても、班の中で楽しそうに活動し和気藹々とゲームをしている様子が見て取れた。ゲームということもあり、普段の授業では活躍できない生徒がいち早くコツを掴み、他生徒に教えている場面を見ることもできた。

また、授業の中で生徒の反応を見ながら、TT で組んでいる先生のアイデアもあり様々な工夫をすることができ、より良い教材に仕上げる大きな第一歩となったと思う。今後のために、生徒へ配る説明書の改善をし、渡すカードの枚数や種類を変えて、より多くの生徒がゲームをあがることができるようにしたい。

## 2年理科 ふいかえりカード

### 天気とその変化

組 番 班 氏名

### =学習のねらい=

単 元 の 目 標	関心・意欲	天気に関心を持ち、科学的な視点で気象についてとらえようとする。	自	
	科学的思考	雨の降る理由や、季節の変化による気圧の変化などのしくみについて考えることができる。	己	
	実験・観察	協力して観察をおこなったり、考察したりすることができる。	評	
	知識・理解	天気図を見読むことができる。	価	

### =自己評価=

A：十分できた B：だいたいできた C：やや不十分 D：不十分

★ 「自己評価 観点：①興味を持てたか ②考えることができたか  
③実験に参加できたか ④覚えることができたか

時数	月 日	今日の課題	自己評価	思ったこと	検
1		犬山の今の天気を調べよう	③ A・B・C・D		
2		大気圧とは何か考えよう	③ A・B・C・D		
3		湿度の定義を理解しよう	② A・B・C・D		
4		雲はどうしてできるのか、考えよう	③ A・B・C・D		
5		水の動きをイメージしよう	③ A・B・C・D		
6		空に何があるのかをイメージしよう	② A・B・C・D		
7		高気圧と低気圧のまわりの空気の流をイメージしよう	④ A・B・C・D		
8		暖かい空気と冷たい空気が交わると、どのようになるか？	③ A・B・C・D		

時数	月日	今日の課題	自己評価		思ったこと	検
9		前線をともなう低気圧のできかた	③	A・B・C・D		
10		四季の天気の特徴をつかみ、説明できるようになろう	②	A・B・C・D		
11		天気予報ができるようになるろう	②	A・B・C・D		

＝学習活動の記録＝

月日	項目	評価	月日	項目	評価

＝単元を終えての感想・反省＝

	自己 評価

音樂

音楽科が目指す「響き合い 高め合う 学び」



## 豊かな感性を育む音楽科の学び

### ～感じる・伝え合う・高め合う～

#### テーマに迫る基本的な考え方

音楽は、人の心に直接的にかかわりを持ち、人の多くの感情を高める力を持っている。また、音楽を聴いたり、観たり、体験したりする経験を重ねることで、さらに心は揺さぶられ、互いにその感動を伝え合い、より分析的に聴く力を養いながら高め合えるものだと考える。

音楽科では、感性を育てることが、重要な目標である。感性を育てるには・・・

- ①自ら求めて音楽のよさや美しさを**感得できる**ような、数多くの音楽体験をする。
- ②互いの思いや表現を音楽の言葉を使って**伝え合い**、音や音楽を知覚する能力を育てる。
- ③進歩や成長を実感しながら、音楽のよさや美しさを仲間と共に**高め合う**音楽活動ができる生徒を育てる。

ことが大切であると考え。このように、「感じる・伝え合う・高めあう」音楽活動のステップアップを通して、生涯にわたって音楽を愛好する心情を育てていくことができるように指導にあたりたい。

#### 音楽科の「響き合い 高め合う 学び」

「響き合い、高め合う学び」は、自らの音楽を大切にするとともに、他の音楽の美しさを認めようとする気持ちが根底になければならない。また、人・もの・こととのかかわりをもちながら音楽のよさ・美しさに響き合い学ぶことは、「音楽に対する感性」を高めることにつながっていくと考える。

#### 音楽科における目指す生徒の姿

能動	協同	成就
○音楽に関心を持ち、意欲的に音楽活動に取り組む生徒	○曲想を考え、互いに意見を発表し合い、曲作りを進めたり音楽を表現したりすることができる生徒	○「歌えた」「響き合った」喜びを味わい、さらに表現や鑑賞力の向上をめざす生徒

#### 指導・支援の手立て

能動	協同	成就
<ul style="list-style-type: none"> <li>●興味・関心の持てる楽曲の選曲</li> <li>●合唱曲や楽曲の提示の方法</li> <li>●生活に密着した題材の工夫</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●パートの活動目標を明確にしてパート練習の活性化を図る</li> <li>●楽譜への記入から積極的な合唱づくりへ</li> <li>●音楽を共に創り上げる音楽活動への支援の仕方</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●響きを聴き（確かめ）合うための指導方法の工夫（ア・カペラ練習など）（ア・カペラ練習など）</li> <li>●相互評価や客観的に演奏を聴取する活動の工夫</li> <li>●学年や全校練習（縦横のつながりと</li> </ul>

# 豊かな感性を育む音楽科の学び

## —共通事項を通して音楽の本質にせまる—

津田 美恵子

### 1 題材 曲想の変化を感じ取って 「魔王」

#### 2 題材構想

##### (1) 題材の指導意図

音楽を鑑賞する活動には音と言葉が不可欠である。鑑賞では、音楽を形づくっている要素を知覚し、それらの働きが生み出す特徴や雰囲気を感じ取り、言葉によって確認する。

大切にしたいことは、要素と特徴・雰囲気との結び付けである。本題材では、人物ごとの表現の違いを感じ取るとともに、「Aが怒っているように聴こえるのはなぜだろう。」というように、要素をその働きで生まれた特徴・雰囲気と結び付けることを大切にしたい。また、グループ内で、感受した曲の特徴や雰囲気を言葉で伝え合う活動を行っていききたい。グループ内で曲想について活発に意見がでるように、また、言葉で表すことが苦手な生徒のために、学習プリント「音楽の言葉」を活用することで、音と言葉を結び付ける活動を活発にしていきたい。

##### (2) 題材の指導計画

<みつける>

人物ごとの表現の違いを感じ取る。

(1時間・本時)

<高め合う>

楽曲や歌唱の表現を歌詞と結び付けながら感じ取り、表現の豊かさを味わう。

(1時間)

<ふりかえる>

作曲家・作詞に者について知り、音楽の特徴や特質と結び付けながら楽曲全体を味わう。

3人の独唱者の演奏を比較鑑賞し、批評文を書く。

(1時間)

### 3 本時の目標

- ①人物ごとの表現の違いを感じ取る活動に、意欲的に取り組むことができる。
- ②音楽を形づくっている要素の働きと効果を知覚し、人物ごとの表現における曲想の変化や雰囲気を感じ取ることができる。

### 4 ひとりひとりに「響き合い高め合う学び」を与えるポイント

#### 響き合い高め合う場面

○音楽の諸要素と歌唱表現の結びつきに気づくことができる過程。

#### ポイントとなる手だて

○学習プリント「音楽の言葉」を活用することで、知覚・感受したことを言葉で表しやすくする。

○知覚・感受したことを言葉を使って交流していくことで、感じ取ったことを膨らませていく。

### 5 本時の観点別評価規準と評価方法

評価の観点	評価規準
関心・意欲・態度	独唱者の登場人物ごとの表現の変化に関心をもって、音色と曲想の関係を探ることができる。
鑑賞の能力	登場人物ごとの表現における曲想の変化や雰囲気を感じ取ることができる。



## 6 本時の学習過程

### <みつける>

- ①「魔王」を聴く。  
《聴き取るポイント》
  - ・演奏形態      ・何語      ・状況
  - ・演奏形態（伴奏楽器）
- ②本時の学習内容をつかむ。



人物ごとの表現の違いを感じ取り、言葉で伝え合おう

### <高め合う>

- ③人物ごとの表現を感じ取り、ワークシートに記入する。
  - ・DVDの視聴（登場人物ごとの部分再生）
  - ・「音楽の言葉」の活用
- ④個人のワークシートをもとに、グループで伝え合う。
- ⑤日本語訳を知り、日本語の歌詞で歌われている「魔王」を鑑賞する。
- ⑥登場人物A～Cが誰であるか知る。



### <ふりかえる>

- ⑧ワークシートのふりかえりに、本時の自己評価をする。

## 7 考察

生徒の楽曲への興味と自由な発言を引き出せるように、明るく友好的な雰囲気而努力して授業を進めた。音楽を形づくっている要素が楽曲とどのようにかかわっているのか発見できるように、学習プリント「音楽の言葉」を提示した。強弱や音の高さの変化について、特徴的な変化のある子どもの部分をDVDで取り出して聴かせた。子どものセリフは全部で4回出てくるが、連続して聴かせると変化がわかりやすく、生徒たちは、「子どもは魔王に呼びかけられるたびに、だんだん強くなった」「音も高くなっていった」と迷わず答えることができた。他の登場人物の歌い方については、「音楽の言葉」プリントを活用しながら、感じ取ったことやその理由を自分の感じ方に近いものから見つけ出し、言葉に置き換えることができた。友達に感じたことを説明する姿が見られると同時に、自分の気づかなかったところに友達が気づいていることにも目を向けることができた。感じたことを言葉に置き換えることに難しさを感じる生徒や伝え方が分からなかった生徒も、学習プリント「音楽の言葉」を使うことによって、交流が活発となり、伝えれたことに満足げな様子が見られた。

共通事項の指導においては、生徒が、自分なりの意図や自分なりの意味を持つ手がかりとなる要素の特性や働きに着目させる展開が必要である。学習過程において、要素についての感受を意図的・計画的に位置づけていくことが重要である。このような活動を積み重ねることで、いずれ学習プリント「音楽の言葉」がなくても自分の言葉で伝えることができるようになると思われる。週1時間位の少ない授業時間数の中で、いかに効率的に学習の積み重ねをしていくかである。

# 感じる・伝え合う・高め合う授業を目指して －生き生きとした合唱練習の活動を通して－

横井 宏美

## 1 はじめに

本校では、合唱を大切にしており、さまざまな行事で合唱をする機会がある。合唱練習をする機会も多くあり、学校生活の中に自然と合唱が入っている。しかし、声の響きを大切にすることや、作曲者の思いを伝えるまでは意識できず、ただ大きな声を出せば良いとか、歌っているだけという生徒も少なくない。より主体的に生き生きと歌うためには、楽譜から曲の特徴や良さを感じ取り、表現をしようとする意欲を大切にすることが必要である。ほとんどの生徒は、合唱練習に対して前向きに取り組む姿勢が見られる。強い思いをもって練習に取り組む生徒が多い中で、同じ方向を向いて練習することができない生徒もいる。これまでに、パートリーダーを通して、口の開け方や表情について発声練習から意識をするように声かけをしてきた。合唱が好きで、頑張りたいという意思が強いため、合唱の素晴らしさを伝え、実感させることで、さらに、仲間と共により良い合唱を作り上げる喜びを感じることができると考える。合唱を通して、集団の意識を高めるとともに、生き生きと合唱をすることにより多くの達成感や喜びを味わうことができると考え本主題を設定した。

## 2 研究テーマの仮説

- ・合唱を通して歌詞の内容や曲想を味わうなどして、曲にふさわしい音楽表現を工夫することにより、歌う学習に意欲的に取り組むことができるであろう。
- ・よりよい合唱をめざして仲間と共に音楽づくりをしていくことにより、意欲的に表現しようとすることができるであろう。

## 3 研究の手立て

- 発声練習をしっかりと行う
- パート練習を充実させ自分たちで合唱を創り上げる
- ワークシートの活用
- 録音をして、自分たちの合唱を客観的に評価をする

## 4 実践と考察

### (1) パート練習を充実させ自分たちで合唱を創り上げる

CDを使用し、パートリーダーを中心に自分たちで練習に取り組む。(写真1)「伝える」ということにポイントを置き、5つの項目をかかげた。「よく響く声で」「表情で」「歌詞で」「身体を使って」「強弱などの曲想で」の5つを練習中、常に目のつくところに置き、パート練習で確認するよう声をかけている。パートリーダーが確認するポイントにもなり、5つの視点から気づいたことをアドバイスしている姿が見られた。そして、パートリーダーに言われたことを楽譜に書き込むことにより、意識をすることに心掛けさせている。



写真1 パート練習の風景



写真2 パートリーダーにいわれたことを楽譜に書きこむ様子

また、学年のパート練習を意欲的に取り組むためことができるようにするために、各クラスのパートリーダーを集めて、合唱のポイントや曲の特徴、音程を確認して学年のパート練習に臨んだ。(写真4)パートリーダーの合唱練習はどの生徒も生き生きと歌っている姿が見られる。一つ一つの言葉を丁寧に歌ってみたい、曲想を考え表現しようとしてみたいしていた。このような前向きな雰囲気は学年全体に浸透することを願い、パート練習を行った。しかし、学年パート練習は人数が多いので、歌う姿勢になるまでに時間がかかり、リーダーが声をかけてもすぐに落ち着くことができない。ただパート練習をするというだけでなく、もっと一人一人が目的意識をもってパート練習に臨むことができるような声掛けをしていかないといけないと同時に、意欲的なリーダーが自信をもって活躍できる雰囲気づくりの方法を考えていかなくてはならないと感じた。



写真3 学年パート練習の練習風景



写真4 パートリーダーの練習風景

## (2) ワークシートの活用

合唱練習を進めていく上で、練習の足跡を残すということは大切なことだと思う。また、曲を深く読み取るためにも有効に活用できると考えている。本研究では、曲を細かく区切り、歌詞と音楽の要素に注目をして考えるためのワークシートを活用した。「春に」という合唱曲を取り扱い、この曲を歌うにあたって、特に、「枝の先の膨らんだ…」のところは曲想の変化が一番あらわれている部分であるため、個人やパートでじっくりと考える時間をつくった。「表現したい曲想」「工夫したい音楽の要素」「歌い方の工夫」を、楽譜を頼りに考えた。「表現したい曲想」では「もやもやとした気持ちがどんどんこみ上げてくる感じ」「成長していくことに対して自分の気持ちと葛藤している感じ」などという意見が出された。言葉が対比のようになっていることや、男女の掛け合いがあり、声部の役割を考えて歌うことなどを個人やパートで考え全体で交流することができた。歌っているだけではなかなか気づくことができないことも、楽譜を頼りに歌詞や音楽の要素などから考えることで、表現することに生きてくると感じた。また、ふりかえりを記入するようにした。自分をふりかえることで、本時の反省と次回の課題を見つけることにつながると感じたためである。

## 5 成果と課題

合唱は学校の柱の一つである。だからこそ、じっくりと曲と向き合い表現をし、生徒一人一人が生き生きと合唱をすることを願い本研究を進めてきた。合唱練習を進めていく中で、生徒たちはパート練習や話し合い活動に前向きに取り組むことができるようになってきた。女子は意欲的に話し合い、改善点を見つけ楽譜にメモをする姿が見られた。男子もパートリーダーを中心とし、自分たちで高めていこうとする姿勢が感じられるようになってきた。だが、パートリーダーとその他の生徒がどのように関わ合いながら練習をすすめていくことができるかが、今後の課題であると感じる。そして、今後はクラスや学年での練習で、どのような練習をしたら良いのかを見つけることができるようにしていきたい。音楽の授業では、自分たちで創り上げていく方法や表現の方法を伝えていきたいと考えている。生き生きと合唱をすることで、クラス、学年、学校が一つになることを期待したい。合唱を通して仲間と共に創り上げる喜びや、歌う喜びを味わうことができるような方法を今後も模索していきたい。

美術

## 『題材や仲間と響きあい、 感動を思いのままに表現できる』 美術科の学び

### テーマに迫る基本的な考え方

美術科の授業で味わう感動とは、「新しい題材に触れ、新たな表現と出会う感動」「よく練ったアイデアを生み出した時の感動」「アイデアが確かな技術で表現された作品となる感動」「完成した作品が仲間に評価された感動」「仲間の作品を鑑賞して味わう感動」「作品から感じたことを相手に伝え、共有できること」の感動などが挙げられる。

美術科では感動につながり、人間の個性を生み出す重要な要素として、育てていかなければならないものとして「感性」と「表現力」に重点を置く。感性とは「美しいものに感動し、あこがれる心」である。表現力とは「美しいものを意図したとおりに自らの手で作り出す力」ことである。これらの要素を大切にしていくことで、作品を生み出すことを通して自己実現へとつなげていくことができると考える。これらの創作活動を通して、生涯にわたり美術を愛好する心情を育てていくことができるように指導していきたい。

### 美術科の「響き合い 高め合う 学び」

自分の作品が仲間に評価された時や、仲間の作品を味わい、よさを見いだした時に、ことばを通して相手に伝えることが、響き高めあうことにつながるものだと考える。また、仲間の作品から感じ取ったことを生かし、自分の作品をより美しく仕上げたいと創意工夫することも、それにあたる。互いに刺激しあい、より美しい表現を求めて追求していくことが、自分自身を高めることにもつながると考える。

### 美術科における目指す生徒の姿

能動	協同	成就
○表現したいことを言葉や作品で工夫を凝らし作品をつくることができる生徒	○互いに響きあいながら制作活動や鑑賞ができる生徒	○鑑賞活動や、相互評価から、新たな制作への意欲をもつことができる生徒

### 指導・支援の手立て

能動	協同	成就
●ふりかえりカードの活用 ●興味・関心の持てる題材の設定	●作品を相互鑑賞する時間の設定 ●活発な意見交流を支える教師の指導助言のあり方	●作品を展示し発表する機会を持つ ●アドバイスカードなどの活用

# 学習指導要領の改訂に基づいた授業実践について

七澤 秀一郎

## 1 はじめに

新学習指導要領が平成 24 年度より全面実施されている。今回の改訂にあたってポイントとされている点を踏まえ教科書の内容も大きくリニューアルされた。特に今回の改訂で新たに「これからの国際社会で活躍する日本人を育成するために、我が国や郷土の伝統や文化を受け止め、そのよさを継承・発展させるための教育や、異なる文化や歴史に経緯を払い、人々と共存してよりよい社会を形成していこうとするための教育を充実する必要がある」という項目が加わった。それは美術という教科が持つ美的なものを理解し、心動かされた感情を造形的なものとして創造し、文化・人間理解を通して育む心の教育という視点に合致するものであると確信する。それには、まずは私たち日本人がこれまで共に培ってきた「和」という概念を深く理解し、美術における課題に「和＝日本的な物」という作品コンセプトを掲げ、これまで見過ごされてきた伝統工芸のよさや、日本美術への造詣を深めるための指導計画に基づき授業実践と及びその構想を練ることとした。

## 2 教科書に見る「和」の精査と実践

改訂された教科書には日本の美意識を知るための要素が幾重にもちりばめられている。どの題材にも日本人作家の作品が取り上げられ、一つの課題の中に多様な表現があることが分かると同時に、中でも「日本的な美意識の価値」を喚起させるようなレイアウトにもなっている。美術 1 では、日本人作家の作品が多く掲げられており、美術 2・3 上では 25 名となって（年表や伝統工芸のページは除く）おり、掲載作品全体に占める割合は高い。私たち教師にとっても、これまで日本的な美意識に触れることはあったとしても、今回の改訂ではより強く日本が持つ技や美術文化の再考を促し、その価値のよさを共有していこうという高い意識を見て取ることができる。そこで、教科書で取り上げられる和の題材をベースとし、そこから派生する授業内容にしようと考えた。

年間指導計画の概要	
1 年生	2 年生
オリエンテーション 教科書の扉絵作品及び内扉の作品鑑賞（ゴッホ、伊藤若冲、尾形光琳、カプール）	
パンジーのデッサン	
<ul style="list-style-type: none"><li>■色の整理（色についての基礎的知識理解から、伝統的な日本の配色を学ぶ）</li><li>■班活動によるマーク制作（特別教室に用いるマークというテーマのもと班単位で作品を共同制作）</li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>■フォトコラージュ（コラージュの歴史を学んだ後、木曾総合学習での思い出を表すという意味も含めて、木曾六十九次をテーマとしてコラージュ作品を制作）※生徒が作品に入り込むという設定でポーズを撮りそれを撮影し貼る素材とし、現代風テーマをイラストに各自が描き、それも使用する）</li><li>■フォトコラージュ共同作品（学年制作）</li></ul>
<ul style="list-style-type: none"><li>■絵文字（上記で学んだ伝統的な日本の配色を取り入れた彩色を目指して配色計画を立てる）</li></ul> ※絵文字相互鑑賞会	<ul style="list-style-type: none"><li>■水墨画（雪舟、等伯、蕭白、国宝作品を鑑賞し基礎技法を学んだ後、模写）</li></ul> ※水墨画相互鑑賞会
写生大会のためのワークショップ 水彩画基礎技法の習得	写生大会のためのワークショップ 線遠近法及び空気遠近法の習得（ワークシート使用）

1 年生	2 年生
写生大会 ※カルチャーフォーラムで優秀作品を展示	
<p>■張り子のお面制作(日本伝来の郷土のお面を鑑賞した後、油土と和紙を用いた伝統的な行程でお面作りを行う) ※お面の相互鑑賞会</p>	<p>■鍋敷きの彫刻(彫刻刀による各種彫り方を学んだ後、トレーニングを行い、木製素材の鍋敷き用教材に彫刻刀の基礎技法を用いながら彫刻) ※鍋敷き相互鑑賞会</p>
<p>■浮世絵と印象派(19世紀末の日本美術とヨーロッパの美術文化の交流やその違いについて学ぶ) ※美術作品の鑑賞</p>	<p>■根付け制作(彫刻刀を立体制作物に置き換えた作品を制作させたいという考えから、時間があれば行いたい)</p>
1 年間のまとめ	

### 3 各題材の実際の展開

①パンジーのデッサン<全学年>・・・美術1 P.10 “いろいろなスケッチ”

犬山中学校では3年間美術の授業の年度始めに必ず「パンジーを描く」ことに取り組んでいる。同一の題材を年度を超えて描くことは、自分自身の成長を感じるうえでも貴重な経験になると感じる。しかし、学年ごとに明確に達成目標を持たせるなどさらに具体的な題材設定への意味付けが求められる。



②色の整理<1年生>・・・美術1 巻末資料P.42-44 “色を学ぶ”

中学校美術では必ず取り組む題材であり、絵の具の混色方法と合わせて、子ども達が美術というものを科学的に捉えることで驚きを感じる大切な導入の時間であると思う。今回は、色の整理に加えて日本の伝統色を知りその名称を覚えることを主眼とした。今後は、どのような場所に使用されているかなどの具体例を見せ生活と結びつけた知識として定着させたい。



③班による活動<1年生>・・・美術1 P.25 “マークのデザインを考えよう”

個人での作業に偏りがちな美術の題材において、グループ活動をどのように取り入れていくかは頭を悩ませる部分でもある。しかし、デザインの分野や伝統工芸などの作家性を織り込むファインアートとは別の観点で作品に魂を吹き込むような創作活動には、むしろ「チーム」で取り組むケースが多い。そこでそうした分野に的を絞り班にチームとしての意味合いを持たせた課題を設定した。今回の題材は、特別教室のマークを制作するという内容であるが、共同で使用するものを互いに「どうしたら皆が共通して伝わることのできるイメージを持たせることができるか」といった意味で皆に必要とされるデザインをブレインストーミング的な話し合い活動を実施した。



④フォトコラージュ<2年生>・・・美術2, 3上 P.7 “私との対話”

美術というものを子ども達が知るうえで、教科書が扱う表現形態は従来の絵画や彫刻といった表現形式では捉えきれないような現代美術にも脚光があたり作品という概念が多種多様になりつつあることは明白である。そんな中にあり私たちはこれまでの題材にとらわれることなく(題材への価



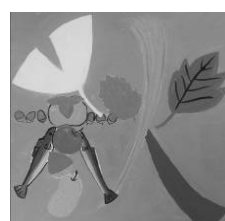
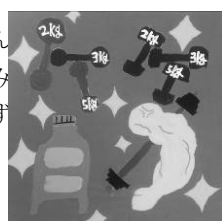
値を理解した上で)現代の子ども達を取り巻く状況に合わせた表現方法を追求していくことが大切であると感じる。コラージュとは、比較的「描く」ことが苦手な生徒でも、本人の柔軟な感性とアイデアさえあれば作品として面白いものができあがるものがある。技術的な観点から美術に対して苦手意識を持っている生徒への導入としては、格好の題材ではないかと考える。本題材では、犬山中学校が2学年時に実施している「木曾総合学習」とリンクさせているものでもある。学校行事での思い出を作品として表現するという主題のもと行っている。この題材で意識したこととしては、表現形態の多様化である。技法としてはコラージュを扱っているが、作業の流れとしては①浮世絵作品の鑑賞(木曾地域を扱った作品に限り鑑賞し、そこに自分自身が入り込むことを想定して思いを巡らせる)②素材としてのポーズ写真撮影(浮世絵作品のある場所に貼ることを想定したポーズを3パターン撮影する。パフォーマンスによる身体的表現作品も想定)③コラージュに用いるイラスト素材制作(和紙を適当な大きさに配布し、そこに現代風イラストを描く。画面上にミスマッチな要素が入ることの面白さを入れた)④コラージュ制作(今回の作品は、発想や貼り方などのアイデアの大切さを説き、その要素も大きく成績に入れることを事前に伝えた)⑤個人作品の鑑賞会⑥木曾六十九次全作品を用いた学年共同作品の制作(かねてから学年単位や全校単位で共同制作ができないかと考えていた。今回は六十九次の全浮世絵作品へのコラージュということにチャレンジした。1クラスずつ授業の度に貼っていくため、少しずつ作品が完成していく様子が生徒達にも興味深く、また新鮮なものだという印象を与えたようである。

⑤絵文字<1年生>・・・美術1 P.24 “文字や形で伝える”

絵文字については、絵の具の使い方、色の整理や構成を学んだ後にデザイン感覚を作品に昇華させるうえで比較的取り組みやすい題材であるといえる。教科書にも絵文字については必ず取り上げられており今後も続けていきたいと考える。しかし、こうであらねばならないという固定観念が強い年頃からか、自由な発想の作品が出にくいことも感じている。それには、アイデアスケッチの時間を十分に確保したり、資料集めの重要性、アイデアマップを用いたトレーニングなどを繰り返していくことで、発想重視の作品の価値を高めていく必要がある。また、日本の伝統色を感じさせるために色見本などを用意して、使用する色を規定して臨むことなども今後取り組んでいきたいと考える。

⑥水墨画名画の模写体験<2年生>・・・美術2 P.26,27 “墨が生み出す豊かな世界”

和をテーマにする題材を行う上で、墨を用いたモノクロームの世界の美という概念を生徒達に強く伝えたいと感じた。制作時は各班に洗面器を1つ中央に置き、淡墨、中墨、濃墨用の絵皿を置き濃度の違う3色の墨を使い分けながら描いた。絵皿と隈取り筆は学校より備品購入していただき、実際的水墨画の制作に少しでも近くなるように配慮し制作を開始した。まず、導入として雪舟、等伯、応挙、蕭白、芦雪の作品をスライドで鑑賞し、中国から伝わりながらも日本の伝統的な美意識に昇華し





ていった作品群とそれらの作家

の人となり解説した。次に最終的な目標は色紙に描くこととし、色紙に収まるように作品の一部をトリミングした見ほん作品を一定数用意し、その中から描いてみたい作品を生徒達に選ばせた。そこから1時間目に練習用の半紙を用いて、破墨法、積墨法、勾勒法を反復練習した。次に模写したい作品の筆跡やぼかしなどの描き方をよく鑑賞し、それを再現すべく模写の練習を2時間実施した。現在は、色紙に描く本番の段階を迎えているところである。当初は、自ら描いたモチーフを水墨画として成立させることを計画したが、一発勝負の作風である水墨画にはまずは作品をよくみて描く模写制作が最適であると感じ、作家の表現にどこまでせまることができるかということテーマとし、水墨画の世界を生徒達も堪能している。水墨画を描く際の美術室はいつも以上に静寂が訪れ子ども達の視線が一心に、和紙の表面の水墨の線に注がれ、モノクロームの画面と和の落ち着いた世界に没入している。それらの姿を見ると和の世界を知るといテーマに迫るとい意味においてこの課題の意義を感じ取ることができた。



#### ⑦水彩画の基礎技法と遠近法のワークショップ（写生大会に向けて）＜1，2年生＞

本校では、写生大会が学校行事として永く行われている。全校生徒が美術に関わる機会が行事として存在していることに、美術科にとって美術という教科への関心を高める上でも、本校生徒が情操を養う機会としても非常に重要な行事であると位置づけたいと感じている。また、それには「ただ楽しく描きました」では学びの機会が希薄になってしまうことも危惧される。そこで、技法を主眼とした授業を事前に行い写生大会当日を迎えることで生徒達がより向上心を持ちながら風景画にとりくめると感じた。

1年生では、水彩画の基礎技法（ウェットオンウェット、ドライブラシ、リフティング）を学び、2年生では線遠近法（1点透視図法、2点透視図法、3点透視図法）及び空気遠近法を学ぶことで、知識と技術を用いてより作者の思いが深く反映された風景画が描けるように事前学習を実施した。どちらの学習も技術習得を主としたワークショップ形式とし、技法や理論が作品にどう影響していくかといった視点を持ちながら生徒が活動できる授業を目指した。

#### ⑧張り子制作と鍋敷き彫刻について＜1・2年生＞・・・美術1 P.18,19 P.38 美術2 P.22,45

和をテーマとして年間の指導計画を作成するにあたって、後期は「つくる」ことに照準を合わせた内容とした。1年生は伝統的な製法で作られる工芸の張り子面を、2年生は実際の木を用いてのレリーフ彫刻を取り入れた鍋敷き制作を計画している。これらの作品は後期からスタートし長期に渡り制作していく題材になるが、ここでも和を感じる作業を大切にしながら進めていきたい。張り子については実際の工芸品を鑑賞し、そこからインスピレーションを得た「和」を表現した作品を制作し、完成した作品については教科書にも取り上げられている各国のお面についても比較しながらそれぞれの文化のよさについてディスカッションする機会をつくりたい。一方鍋敷きについては各種彫刻刀を用いた基本的な彫り方（日本の伝統的な文様を取り上げる）を学んだ後制作にとりかかりたいと考えている。また、木彫の題材を鍋敷きとしたのは、生徒達が制作後も自宅に持ち帰り、繰り返し使用できる素材であるということ、自然素材を用いた本来の創作活動の原点に触れさせたいという考えからである。自ら創作する用と美を兼ね備えた作品が、日常の生活の中にとけ込むことで家族間の会話が生まれるようなきっかけになれば、学校と家庭のつながりが美術を通して生まれることにつながるのではないかという願いもある。

### 3 成果と課題

年間の授業数が限られた中で、どのような題材をとりあげ指導計画を練るかは難しい課題でもある。今回、新学習指導要領による改訂によって、これからの美術教育が必要とされる指針が新たに示された。それらはこれまで幾多の場面で取り上げてきた題材でありながらも、我が国の文化についてより踏み込

んだ内容にすべく言及され、それと同時に教科書も改訂された。私自身も義務教育で取り上げる美術科の題材について、美術文化とリンクする内容の必要性を兼ねてから感じてきた。この度指導要領が大きく改訂されたことを一つのチャンスと捉え、創作活動に必要な基礎技法については、これまで連綿と続けられてきた伝統工芸や私たちの美術文化の中に存在する技法に立ち返りそれを少しでも題材の中に取り入れていきたいと考える。また、授業の中に ICT 機器を導入することで授業内容をより魅力あるものにすることや、新たなメディアを用いた表現活動の可能性も探っていきたいとも同時に考える。いずれにしても現代という混沌とした社会の中であって、美術というものの表現も多種多様になりつつある。美術という教科が本来持つ、人の心や感性を育てる「情操」という理念をしっかりと見据え、今後も教科書と指導要領に定められた目標に向かってよりよい授業を創造していきたいと考える。

# 感性を豊かにし、基礎的な能力を育てる造形活動

## －個々の視点を深める学び合いの鑑賞授業を通して－

溜 久美子

### 1 はじめに

「コミュ障」という言葉をよく聞く。「コミュニケーション障害」略である。略語が使われるのは、その使用頻度が高いことを裏付けている。人は、人と関わって生きていく。しかしその関わるのが難しくなっている人が増えていることも事実である。様々な要因で人と関わるのが苦手になっていくのであるが、まず「自分」を見つめる時間がなければ、発信は難しい。コミュニケーション能力はある程度訓練や経験が必要である。でも、それを積み重ねるためには、発信する源が必要なのではないだろうか。「自分」を見つめる時間。最近では、コミュニケーション・ツールが多く普及しているため、広くそしていつでも人と関わってられる。発信源を温める時間もない。発信源は自分のアイデンティティとも深く関わる。自分と対峙する時間をもつことの喜びを、思春期にこそ味わってほしい。

### 2 主題設定の理由

「自分」とは、何者であるか。何が好きで、何が苦手なのか。何に夢中になれるのか。「自分」は何が必要で、何に求められるのか。何に支えられているのか。個々のアイデンティティが確立してくる15歳になる生徒たちにとって、造形表現を通しての活動は多くの気づきを与えることができる。目に見えない自分の心や想像、精神、感情、イメージなどを可視的・可触的に表現することは、自身を客観視させ、自己理解につながったり他との相違に気づいたりすることができる。そこで、15歳の自分自身を可視化させるために『15歳の肖像』に取り組みせたい。題材名は独自のものであるが、内容としては教科書の2・3下の、第一章「イメージの力」と第二章「社会の中で」と多く重ねていき、参考資料として活用する。そして造形ギャラリーに取り上げられている『『ゲルニカ』を語る』に触れ鑑賞活動を行う。多様な表現方法と個性を提示した後、ワークシートによる下絵作成をする。「今の自分」「ふるさと」「社会」この3つの視点から自分自身を探っていく時間を十分に取る。そして、最終的には、ポスターカラーでB4サイズのケント紙に「15歳の肖像」として、一枚の絵に表現する。自分自身のことを見つめた上で、未来へ向かっていく自分自身の姿勢を表出させる。自分の内面の実体化を通して、基礎的な能力及び創造的能力を育てたい。

### 3 研究の仮説

- |   |
|---|
| <p>①一つのテーマについて考える時、意図的に視点を多方面から向けさせると、形や色に変化や深みを持たせることができるのではないかと。</p> <p>②自分のアイデアを固めた上で、鑑賞の授業を入れると、より作者の意図を考えたり、することができるのではないだろうか。</p> |
|---|

### 4 研究の方法

- ①多方面からの視点で自分を見つめることにより、より深く自分自身と向き合う。
- ・「今の自分」「ふるさと」「社会」と、視点を変えて形と色で表現するワークシートを3種類行うことで、どの生徒にも客観視を自然に促せるようにする。
- ②素直な表現ができるように、鑑賞活動を行う。
- ・ワークシートで作品のアイデア出しをさせてから、ピカソの表現方法に触れる。自分自身の感情に素直に表現し続けたピカソの創作活動に触れることにより、素直な表現のよさに触れる。

### 5 実践

- (1) 題材名 「15歳の肖像」

## (2) 題材の目標

- ①創造活動に意欲的に取り組み、楽しさを味わうことができる。(関心・意欲・態度)
- ②自分を見つめ、伝えたい内容を形と色を使い発想することができる。(発想や構想の能力)
- ③形と色を工夫し、美しく印象に残るように表現することができる。(創造的な技能)
- ④作家や友達の作品を鑑賞し、それぞれの発想や構想のよさ、表現の工夫を味わうとともに他のよさを自己の表現に生かすことができる。(鑑賞の能力)

## (3) 題材の構想

「伝えること」は進化しているのだろうか。インターネットや携帯電話の普及によって私たちは飛躍的に時間と距離感を縮めてコミュニケーションをとれるようになった。しかし、そのことによって私たちは思いを届けることができているのだろうか。人と人との心の距離は縮んでいるのだろうか。生徒たちは毎日メールやネット上に思いを綴ってコミュニケーションをとっている。しかし、自分の感情をぶつけるばかりで、言葉に相手への思いやりが欠けていたり、言葉が少なかったり、お互いに傷つけあっている場面が多々起こっている。時間と距離を縮める技術に生徒たちの未発達なコミュニケーション力は追いついていない。自分の考えや思いを吟味する時間も機会も少なくなっている。コミュニケーション・ツールが発展しても、思いを届けることとしては希薄になってしまったのではないだろうか。これまで、生徒たちには、美術の授業を通して、自分の思いを吟味することと、人との視点の違いやよさを知っていくことを体感する場面を積み重ねてきた。

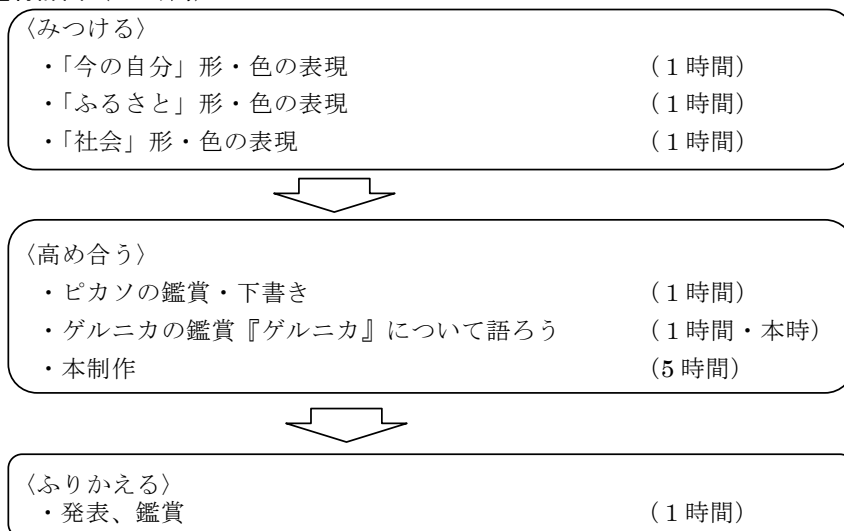
本学年の生徒は、自分の思いや考えを表現することに苦手意識をもっている。自信のなさもあるが、人にどう思われるかに不安を抱いている。ネット上の書き込みや噂に翻弄されている毎日が子どもたちに不安を抱かせているのであろう。一方でよいものを「よい」と素直に感じられる心を持っている。自分の思いや考えに自信はないが、よりよいものに対する憧れや感受性を持っている。そこで、自分や他者との考えや感受性の違いに多く触れることにより、他者を認め、自分自身も認める心を育てたい。

現職教育のテーマ「響き合い高め合う学び」を美術科では、「自分と作品や題材」、「自分と仲間」の2つの響き合いの場として大切にしてきた。「自分と作品や題材」の響き合いでは、自分の意見や考え、思いを持つことができる。「自分と仲間」との響き合いでは、一人一人の視点や考えの違いに気づくことで、人と違うことへの恐れを払拭し、自己有用感へと結びつけたい。この2つの響き合いを通して得られるものの見方感じ方は、生徒が生きていく様々な場面で自分自身の価値観を育む基礎となるとよい。生徒たちは中学生になって、より自己の表現に焦点をあて、表現活動を行ってきた。1年生では、絵文字の制作や構成の要素を活用して、伝えるための表現を深めた。2年生では、浮世絵や日本の文様に触れることにより、伝統的な美に触れた。3年生では、「個」を見つめ、学級や学年・社会との関わりについて考え、自分の考えや思いを表現する楽しさを味わわせたい。進級してから生徒たちは、「個」での意見を見つめ文章表現する場が多くあった。「今年の目標」や「青年の主張」などで普段彼らがなかなか声に出して表現することができない思いを綴っていた。きっと言葉に綴れない思いもあるであろう。目に見えない心や感情を、可視的・可触的なものに表現する楽しさを味わわせたい。表現の楽しさとは、カタルシス(浄化)的な効果がある。でも、本題材では、他者との交流の楽しさを含めた表現の楽しさとした。互いのよさを発見できる手段としての表現活動を感じさせたい。

本題材の『15歳の肖像』は、「今」の自分をB4サイズの紙面にポスターカラーで自由に表現する活動とする。自画像や具象物だけにとらわれることなく、「今」の想いや価値観、心象風景を平面にぶつられるようにしたい。表現は多岐にわたるが、目に見えない心や感情の可視化であるので、抽象的な表現まで追究できるように手立てを講じたい。しかし、「抽象表現」としての説明はあえてせず、感情の生々しさを表現するために構図の工夫や色の組み合わせ、形のデフォルメなどの、表現の工夫を促したい。よって、最初のアイデア出しでは、形と色だけでの自分の表現を3パターン行う。そして、そのアイデアを練り上げる前にピカソの鑑賞を2時間行う。ピカソに関しては、ピカソの表現の変容を人生や心情の変化を追って触れる鑑賞と『ゲルニカ』に焦点をあてた鑑賞とをそれぞれ1時間ずつ行う。この2時間の鑑賞を通して、表現の多様性に触れ、表現とは自分の心の在り様をうつすものであることを実感さ

せたい。そして、表現の自由・鑑賞の自由を体感し、生徒の制作に対しての“こうあるべき”という固定概念をなくしたい。作品は生徒が1年生の頃から使い慣れているポスターカラーを選んだ。本題材を通して、自分と他者との違いを認め、自分自身の表現に自信をもたせたい。そして、自分も他者も認める心を育てたい。

#### (4) 題材計画 (11 時間)



#### (5) 題材との響き合いを高める場面 「ワークシートの活用を通して」

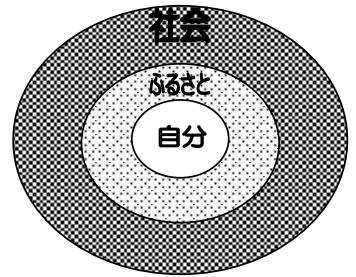
「今の自分」「ふるさと」「社会」という視点から自分自身を形と色に表現する。アイデア出しは、多様なものが複数出ることが望ましい。3つの視点を分離させるために、ワークシートの記入は、一時間ずつに分けた。作業内容もその授業時間の冒頭に初めて告げ、先回りしての発想や3つの視点が似通ったものにならないようにした。「形と色の表現」とは、単純化や抽象化、象徴化など平面表現が個々に多方面に向かうようにしたかったので、条件として用いた。しかし、アイデア出しの段階で、いきなり平面表現だけ表現しきることは難しい。そこで、言葉による形と色に込めた思いの記述も行い、生徒自身も教師自身もアイデア画の再考が容易に行えるようにした。



単純化や抽象化、象徴化をしていく場合、一見どれほど個人の想いがつまっているかが判断しにくい場合がある。作者の意図が記述してあれば、教師だけでなく、仲間通しの助言も出しやすくなる。

平面表現については、1年生時に行った「自然物の構成」の単元で、単純化を実践した。抽象化や象徴化に関しては、あえて説明をせずとも、平面表現の工夫をする中で生徒たちは自然と行えるようになった。表現技術に関しては、あえて名前や形式から入らずとも、表現能力の成長と共に自然と表出してくる。その時に名前や活用方法を紹介していくほうが、生徒は名前や形式だけでなく、感覚として習得することができる。造形活動を意図的に行うためにも、表現技法は感覚的に指導する必要がある。作業環境を共にしていると、教師の仕掛けだけでなく、生徒同志で自然に表現技術の習得がなされていくことが多い。

「今の自分」：いまの気持ち、大事にしていること、がんばっていることなど  
 「ふるさと」：いままで自分が関わっていた家族や友達など身近な存在  
 「社会」：自分もふるさととも包みこんでくれている社会 直接関わりがなくても確かに支えてくれているもの  
 〈生徒 A さんのワークシートより〉



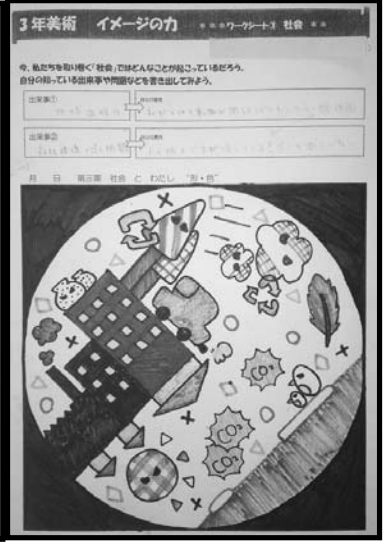
「今の自分」

「心の中にたくさんの悩みや悲しみ・怒りがある。そして、それに負けないくらい楽しさ・嬉しさ・愛しさ。負の気持ちにふたをしてくれる。」  
 複雑なものを抽象化して表現している。



「ふるさと」

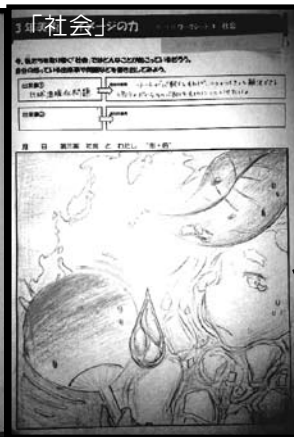
「みんな 部活・家族・犬山 私の居場所」  
 楽しい・愛しいイメージを太陽・猫・虹・雲など自分の好きなもので抽象化している。



「社会」

「地球温暖化・森林破壊・ゴミ問題」  
 社会で起こっている問題の中で、自分の関心の高いものが単純化されて描かれている。作品の天地を作らないことで、自分の周りを取り巻いている感覚を表現している。

〈生徒 M さんのワークシートより〉



3つの視点で描くと、今自分がどの視点を大切に生活しているかがわかる。関心が高いものや常に意識しているものは平面表現としても練られているし、密度がある。

(6) 仲間との響き合いを高める場面 「ゲルニカの鑑賞を通して」

①『ゲルニカ』の鑑賞活動の目標

- ア. 「ゲルニカ」の鑑賞を通して、ピカソの思いを感じ取り自分の意見をもつことができる。
- イ. 班内で出合った意見や発表を聴いて、自分とは違う視点や感じ方を見つけることができる。

②準備物

- ア. 教師・・・ワークシート、テレビ、パソコン、1/4サイズの「ゲルニカ」の資料  
班内発表用のホワイトボード、個人観賞用の資料
- イ. 生徒・・・筆記用具

③ひとりひとりに「響き合い高め合う学び」を与えるポイント

響き合い高め合う場面

- 発見したピカソの表現の工夫を言葉として伝え合い自分の考えを深めていく場面
- ポイントとなる手だて
- お互いの見方、表現方法の違いのよさを感じられるような声かけ

④板書計画

『ゲルニカ』の鑑賞

本時の目標

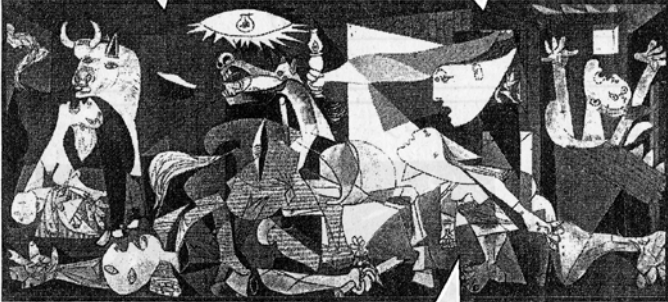
『ゲルニカ』の鑑賞を通して、自分の視点を持ち、  
様々な感じ方に気づくことができる

活動の流れ

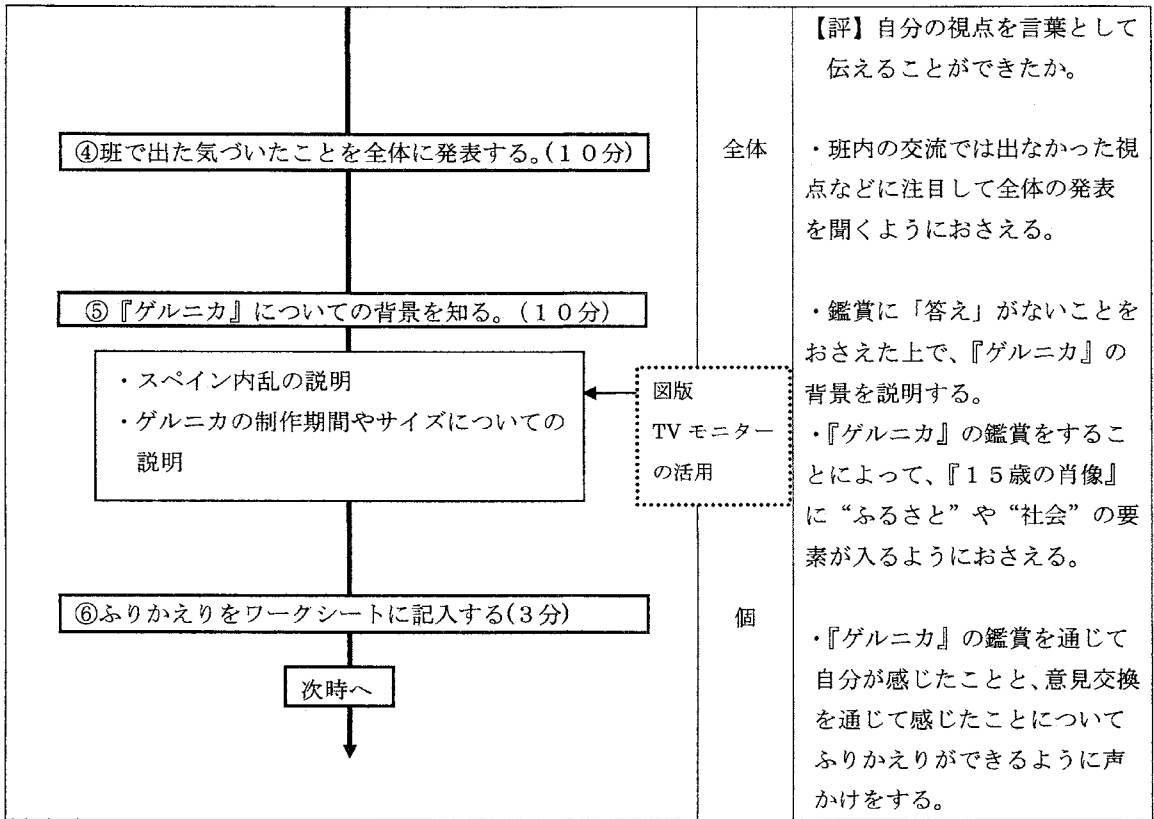
- ①: ワークシートに自分の感じたことを記入する。
- ②班の中で発表；感想を発表し合い、ホワイトボードに書き込んでいく。  
\*まとめない。すべて書く  
\*係り分担
- ③全体に発表
- ④ふりかえり

スクリーン



生徒の活動・反応	形態	教師の支援・評価
<p>〈みつける〉</p> <p>①本題材の学習内容や目標を知る（2分）</p> <p>『ゲルニカ』の鑑賞を通して、自分の視点を持ち、様々な感じ方に気づくことができる</p> <p>②『ゲルニカ』の鑑賞（15分）</p> <p>・『ゲルニカ』を鑑賞して、描かれているものを具体的にあげ、そのモチーフがピカソのどのような心情を表現しているかについて考える。</p> <p>・鑑賞を通して発見したことをワークシートにまとめる。</p> <p>図版 TVモニターの活用</p> <p>ワークシートの活用</p> <p>暗い中小さな電気だけで暮らしている。戦争は暮らしを壊す。</p> <p>人が火に焼かれている姿を描いて、戦争の残酷さを表現している。</p>  <p>子どもが爆撃で死んでしまっただけで悲しんでいるようです。子どもも無差別に被害にあってしまう。</p> <p>逃げ惑う人々を描いている</p>	<p>全体</p> <p>個</p>	<p>・鑑賞の環境を整えておく。（TVモニター、『ゲルニカ』掲示）</p> <p>・『ゲルニカ』の大きな図版と手で詳しく鑑賞できる小さな図版（班で1つ）を用意しておく、視覚的にも体感的にも鑑賞できるようにする。</p> <p>・具体的に、何が描いてあり、そのことによってピカソが何を表現しているのかをワークシートに書くように伝える。</p> <p>・自分の直感と視点を大切に鑑賞できるように、周りとは相談せず個人時間を確保する。</p> <p>【評】鑑賞活動に意欲的に取り組み、自分の視点を持ちワークシートに記述することができる。</p>
<p>〈高め合う〉</p> <p>③ 班の中で、『ゲルニカ』の鑑賞で気づいたことを発表し合い、ホワイトボードに記入する。（10分）</p> <p>ホワイトボードの活用</p> <p>牛が動物を代表して描かれている。戦争はすべての生き物にとって辛いものという訴えを表現している。</p> <p>戦争のもたらす残酷さを白黒で表現している。</p> <p>建物の中なのか外なのかかわからないが壊れて、暗い世界だ。</p>	<p>班</p>	<p>・発表された気づいたことをすべてホワイトボードに記入するように伝える。</p> <p>・意見や視点の違いの大切さをおさえる。</p> <p>【評】鑑賞活動に意欲的に取り組み、他の人との視点の違いを感じることができたか。</p>



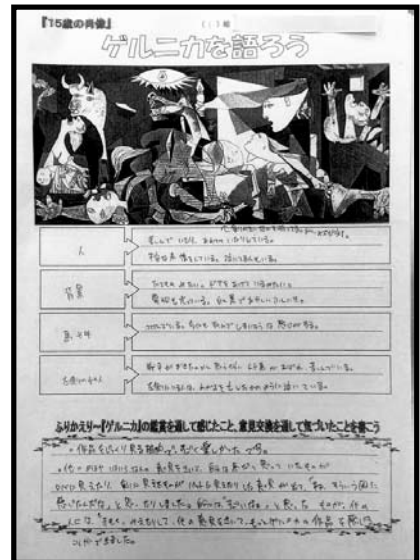
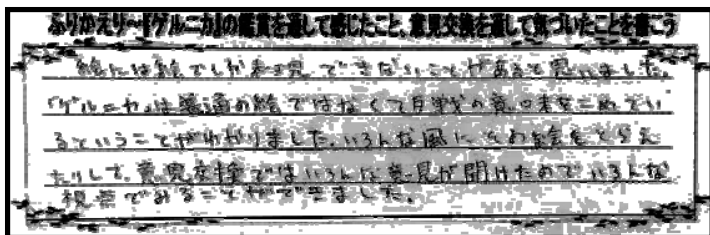


⑥『ゲルニカ』の鑑賞活動の観点別評価規準と評価方法

評価の観点	評価規準	評価方法
関心・意欲・態度	鑑賞活動に意欲的に取り組み、自分の視点をもつとともに、他の視点や感じ方に気づくことができる。	観察 ワークシート
鑑賞の能力	『ゲルニカ』の鑑賞から、作者の思いによって表現が異なることを発見し、それぞれのよさや美しさを味わうことができる。自分の視点を発表したりワークシートにまとめたり言葉にして伝えることができる。	観察 ワークシート

6. 成果と今後の課題

鑑賞の授業でよかった点は、実物1/4大の図版を用意したことと、手元に見えるサイズの図版を準備したことであった。感性を高めていく際、本物に触れていくことが大切のように、鑑賞の授業においても、視覚・触覚をはじめ“体感”をフル活用し、その上で自分の感覚を言葉で発信していくことが大事であると実感した。



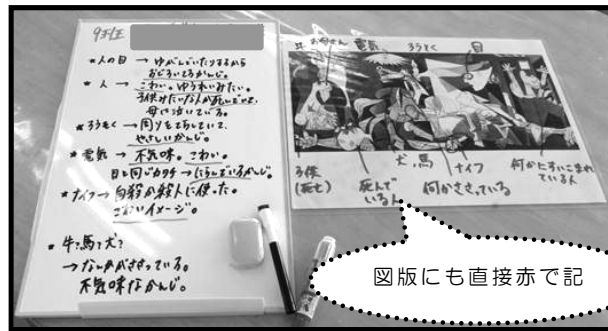
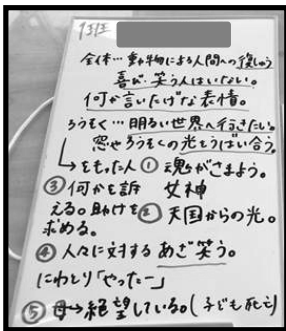
生徒の体感にいかに関心を与えるか。題材の提示には工夫をこらすほど、生徒の感動を増やすことができる。したがって、『ゲルニカ』に対しては、3種類の図版を用意した。まず、作品の大きさを体感できるように実物1/4大の図版を教室背面に掲示した。班で意見をまとめていけるようにA3大のラミネート加工した図版を1枚ずつ用意し、個人鑑賞用にワークシートにも印刷した。

実物1/4大の図版は全員で共有する空間をつくることができた。手元のA3大の図版はラミネート加工をしたおかげで、班の意見をペンで書き込むことができた。ワークシートに乗せた図版では、個人空間に集中して意見を出すことができた。自分の感じたことを発信する。それを、周りとも共有する。この3種類の図版で実現することができた。

課題としては、やはり班で意見を出し合う過程で、生徒の視点で意見が淘汰されてしまうことがあった。さまざまな視点の意見を、もろさずに生徒間で共有する工夫をもう一つ講じたい。



生徒の発表の様子  
4人1班で協力して発表をする。  
他教科でホワイトボードを用いた発表がされているため班の発表ため、なごやかな雰囲気で行うことができた。



図版にも直接赤で記

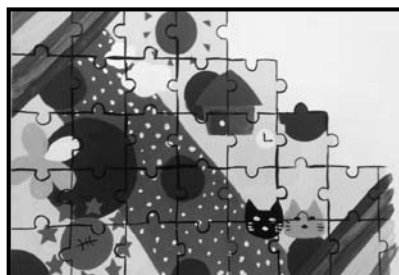
## 7. おわりに

個々の視点を深めるために、他と関わっていくことが大事であること。そして、他の存在をかけがえないものにとらえて、感謝の念をもつこと。この感性の基盤を「自分と題材」「自分と仲間」との響き合いを通して培っていく。今回は本単元で制作に合わせた鑑賞活動を重点的に行ったが、1年次から成長過程に合わせ系統立てて行っていくと、さらに深みを増していく内容であることを実感した。他を知ることと、自分の表現をしていくことを重ねて感性を豊かにし、基礎的能力を育てていきたい。

### 『15歳の肖像』 完成作品



<生徒 I >



<生徒 A >



<生徒 M >

# ゲルニカを語ろう



	→	.....
	→	.....
	→	.....
	→	.....

ふりかえり～『ゲルニカ』の鑑賞を通して感じたこと、意見交換を通して気づいたことを書こう

.....
.....
.....
.....

# 保健体育

# 平成 25 年度 保健体育科各論

保健体育科が目指す「響き合い 高め合う 学び」

## 『一人一人ができる喜びを味わう』

### 保健体育科の学び

#### テーマに迫る基本的な考え方

近年、運動する子どもとそうでない子どもが二極化していることや、子どもの体力の低下傾向が依然として深刻化していることが挙げられている。さらに、運動への関心や自ら運動する意欲、各種運動の楽しさや喜び、その基礎となる運動の技能や知識など、生涯にわたって運動に親しむ資質や能力の育成が十分に図られていないことも課題となっている。本校の生徒においても、積極的に運動に取り組んでいる生徒は多いが、自ら運動に親しもうとする意欲が低い生徒や、運動の楽しさや喜びを味わうことができていない生徒もいる。それは、技能面での向上が思うように実感できなかったり、仲間とかわり合いながら学ぶ楽しさを味わうことができていなかったりすることが原因と考えられる。

そこで、保健体育科のめざすべき方向を、「一人一人ができる喜びを味わう学び」とする。できる喜びを味わうためには、日々の授業の創造が重要となってくる。下記のような4つの柱を大切に指導にあたり、生徒たちが自ら考えたり、自ら学ぶ姿勢を身につけたりしながら、一人一人にできる喜びを味わわせていきたい。

#### 保健体育科の「響き合い 高め合う 学び」

- 運動量**への欲求→運動量が十分に確保されている授業
- 技能面**への欲求→技能面での向上がみられる授業
- よりよい人間関係**への欲求→仲間と十分かわりあえる授業
- 創造活動**への欲求→創意工夫できる授業

#### 保健体育科における目指す生徒の姿

能動	協同	成就
○体力の向上や技能の向上に向けて積極的に取り組む生徒	○教え合ったり励まし合ったりしながら、進んで学習に取り組もうとする生徒 ○チームや自分の課題を明らかにし、「人・もの・こと」と関わり合いながらその課題の解決を図ることができる生徒	○できたことや伸びたことを実感し、それを次の学習につなげていくことができる生徒

#### 指導・支援の手立て

能動	協同	成就
●内容に対する興味・関心を呼び起こす教材・教具の準備 ●単元計画・学習課題の明確化	●場の工夫 ●活発な意見交流を支える教師の指導助言のあり方	●授業中の声かけ（評価） ●ふりカの活用方法の発展化 ●生徒の評価、教師の評価を次の指導に生かす、新たな授業計画

# 一人一人が「できる」楽しさを味わうことができる授業を目指して ーバレーボールの実践よりー

西井 一博

## 1 単元 球技「バレーボール」

### 2 本時の目標

- ①仲間とともに声を出し合い協力してゲームに取り組むことができる。
- ②オーバーハンドパスとアンダーハンドパスを使用し、相手コートに返球できる。

### 3 ひとりひとりに「響き合い高め合う学び」を与えるポイント

<p><u>響き合い高め合う場面</u></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ グループで協力して、バレーボールのゲームを楽しむ場面</li> </ul> <p><u>ポイントとなる手だて</u></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ キャッチマンをつくってゲームを行う。</li> </ul>
---

### 4 学習過程

学習過程		学 習 活 動 or 「 発 問 の 流 れ 」
5分	全	① 集合・点呼・準備運動 ・肩、背中、手首の筋肉を中心にほぐす
10分	ペ	① W-UPドリル ・オーバーハンドパス ・アンダーハンドパス
2分	全	② 学習課題、タスクゲームの見通しをもつ  <div style="border: 2px solid black; padding: 5px; display: inline-block;">キャッチマンを生かしてチームでつないで返球す る</div>
11分	グ・全	④ キャッチマンゲームを行う ※ A班（兄） - B班（弟）というように兄弟チームとする  <div style="border: 1px solid black; padding: 10px; display: inline-block;"> <p>〈ルール〉</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 第2触球者をキャッチマンとする</li> <li>・ キャッチマンはボールをキャッチしてよい</li> <li>・ キャッチマンはキャッチしたその場所から、味方にのみトスできる。</li> </ul> <p>〈ねらい〉</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ チームでつないで返球できるようにする</li> </ul> </div>
3分	グループ	⑤ 兄弟チームで数えた触球数を伝え合いゲームについてアドボイスする
11分	グ・全	⑥ キャッチマンゲームを行う
5分	個	⑦ ふりかえりカードの記入・回収
3分	全	⑧ 整理運動と後片付けを行う

↑【形態表示 ペ：ペア、グ：グループ、全：全体】

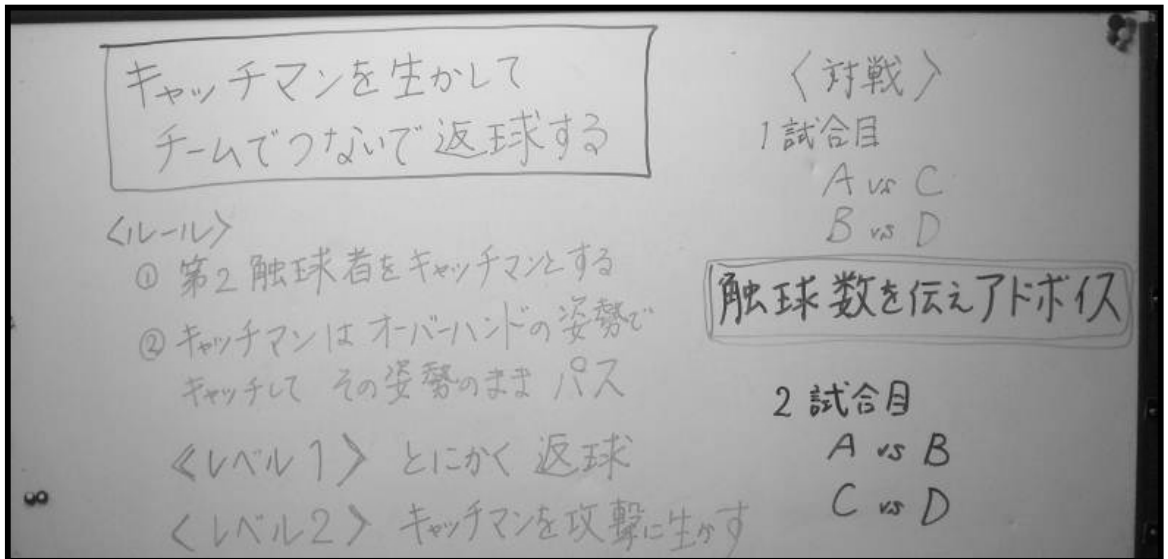
## 5 成果と課題

### (1) 成果

- ・運動量の確保を図るために、授業前からウォーミングアップを行ったが、体も心もほぐれることにつながった。
- ・技能の向上を図るために、単元のはじめにスキルチェックを行い、生徒の実態を把握することができた。運動の特性に触れることができるような単元計画を立てることができた。ウォーミングアップドリルのメニューは基本姿勢を確認できる内容とした。
- ・第2触球者をキャッチマンとすることで、3回以内で返球することが可能となり、レシーブ・トス・スパイクの3段攻撃の形がみえてきた。
- ・キャッチマンのパスの仕方をオーバーハンドでのトスと限定したため、セッターの役割を担っていることを実感できたようだ。
- ・触球数を兄弟チームで数えたことにより、あまりボールに触れていない子への意欲喚起につながった。

### (2) 課題

- ・試合を観察する兄弟チームの役割を触球数を数えるだけでなく、見るポイントをさらにつくるとよかった。試合を見ることで運動量は減る、その運動量に変わる何かを設定することが課題である。
- ・キャッチマンという手立てはボールをつなぐためとしてよい活用であった。下記の写真にあるレベル1の“とにかく返球”というのは多くのチームが達成できたが、レベル2の“キャッチマンを攻撃に生かす”という目標には辿りつけないチームがあった。



# 保健体育科指導案

前田 博信

## 1 単元 水泳「バタフライ」

### 2 単元構想

#### (1) 単元の指導意図

水泳は「できる」「できない」がはっきり分かれる種目であり、好き・嫌いもそれが起因するところが大きく、個人差の出やすい種目である。水泳が嫌いな生徒の多くは苦手意識が強く、これまでの水泳の授業で、技能の上達を感じたり、達成感を味わったりしてきていないことが考えられる。

本時では、3年生で新たに習得する、バタフライの泳法練習を行う。水泳の授業2時間目、バタフライの導入として短時間で上達できる手だてを講じ、生徒たちに「こんな短時間で上達した」という達成感を味わわせたい。手だての中にはボディシステムを有効に活用し、仲間の声を技能の上達につなげるなど、互いに学び合う姿が見られるようにしたい。

#### (2) 単元計画 (10 時間)

〈みつける〉 オリエンテーション、ウォーミングアップドリルの説明・習得 (1 時間)

〈高めあう〉 バタフライの泳法の習得、ターン技術や複数の泳法の技能の向上、(7 時間)

〈ふりかえる〉 バタフライの泳法テスト、100m個人メドレーのタイム計測  
ふりかえりカードのまとめ (2 時間)

### 3 本時の目標

- ① ヒントカードや師範から技能ポイントを見つけ、仲間に積極的にアドバイスすることができる。
- ② バタフライの泳法の構造を理解し、短い時間で泳法を習得することができる。

### 4 ひとりひとりに「響き合い高め合う学び」を与えるポイント

#### 響き合い高め合う場面

- バディと互いにアドバイスをし合い、それを取り入れて高め合う場面。

#### ポイントとなる手だて

- バタフライのヒントカードや、教師の師範による技能ポイントの提示。
- ボディシステムによる、必ずアドバイスを送る環境の設定。

### 6 本時の学習過程 (次ページ)

### 7 本時の観点別評価規準と評価方法

評価の観点	評価規準	評価方法
関心・意欲・態度	ヒントカードや師範から、技能ポイントを学び、それを仲間にアドバイスすることができる。	観察 ふりかえりカード
運動の技能	タイミングよくキックと手を連動させ、バタフライで25mを泳ぐことができる。	観察



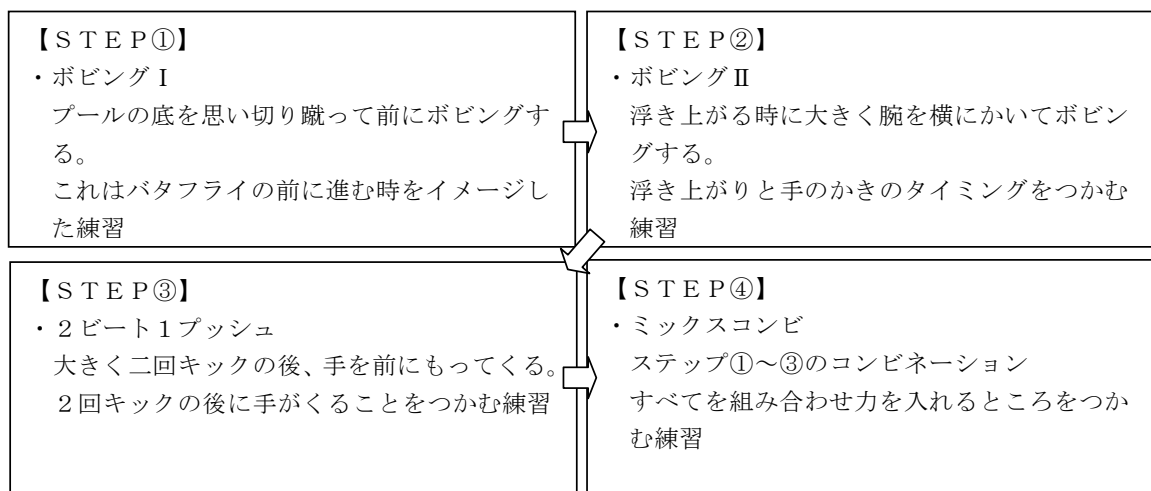
生徒の活動・反応	形態	教師の支援・評価
<p>くみつけ</p> <p>① 集合整列・点呼・あいさつをし、本時の学習内容と流れを知る（3分）</p> <p>② 準備運動をする（3分）</p> <p>③ ウォーミングアップドリルを行う（5分）</p> <p>ウォーミングアップドリルのプログラム</p> <p>手と足のタイミングを合わせ、バタフライの泳法を習得しよ</p>	<p>全体</p> <p>全体</p> <p>全体</p>	<p>・見学者に指示を与える。</p> <p>・本時のバディを確認するよう指示する。</p> <p>・ドリル動作の、どこを意識して行うか伝える。</p> <p>・ステップ4までの見通しを持たせ、それぞれのステップの目的を理解させる。</p>
<p>高め合う</p> <p>④step1 プールの底を思い切り蹴ってボビングをする（5分）</p> <p>⑤step2 浮き上がる時に、大きく腕をかいてボビングをする（5分）</p> <p>⑥ step3 足を揃えて2回打ち、手を回す練習をする（10分）</p> <p>生徒による師範</p> <p>手は水中をかいた後、しっかり顔の前までもってくるよ、しっかり水をかけるよ。</p> <p>膝を揃えるともっと強くキックをうつことができるよ</p> <p>⑦ step4 今までのステップを組み合わせ、手と足のタイミングを合わせて泳ぐ（10分）</p> <p>教師による師範</p> <p>水面では腕は伸ばして前にもって行って。</p> <p>キックと手のタイミングがずれている</p> <p>第2キックと同時に呼吸すると浮き上がるよ。</p> <p>ヒントカード、掲示物の活</p>	<p>個</p> <p>個</p> <p>バディ</p> <p>バディ</p>	<p>・つまづいている生徒に、個別に支援・指導を行う。</p> <p>・バディはプールサイドで、追って観るよに伝える。</p> <p>【評】バディに積極的にアドバイスを送ることができたか。</p> <p>・ヒントカードや掲示物を活用するように促す。</p> <p>【評】ステップを組み合わせ、タイミングよくバタフライで泳ぐことができていますか。</p>
<p>⑧ 本時のふりかえりを行う（3分）</p> <p>⑨ 整理運動を行う（2分）</p> <p>⑩ 整列をし、あいさつを行う（1分）</p>	<p>全体</p> <p>全体</p> <p>全体</p>	<p>・技能の到達度の確認を行う。</p> <p>・ふりかえりカードに記入する内容を伝える。</p>

## 5 まとめ

### (1) 実践

3年生の最後の習得泳法としてバタフライの実践を行った。

バタフライの泳法は難しいと思われがちだが、4泳法の中ではパワーとタイミングさえ合えば比較的容易に習得可能な泳法である。そこで今回の実践は、4つのステップによりバタフライのタイミングをつかむことに重点を置き、少ない練習と時間で効率よくバタフライを習得しようと試みた。



※スモールステップを練習するポイントは、実践する前にバタフライの一連の動作のどの部分を抜き取った練習なのか理解させてから行うこと。技能の切り取りのイメージをもたせておくと、最後につながりやすくなる為。

### (2) 考察

多くの生徒はステップ②まではスムーズにいくのだが、③でつまづきがみられるようになる。これは予想できることで、ここでのアドバイスはいきなり横（水面に平行）に泳ぐのではなく、一回ずつ止まって、下から斜めに泳ぐことを伝えることでつまづきが緩和させれる。これを続けることで、そのうち水底に足をつける前に次の動作に移っていけるようになった。

まら4泳法の中で最もパワーの必要な泳法でもあるので、男子は強引に力で前にもっていき感覚を覚え、その後タイミングを見つける生徒もいた。

実践では「ドン・ドーン・グイッ！！」を合言葉にして、頭の中で唱えながら泳ぐことを意識させることで手と足のタイミングをつかんだ生徒もいたようだ。

### (3) 成果

- ・この授業で初めてバタフライを練習した生徒が、25mを10本もいかないうちにバタフライとしての型を習得し、泳げるようになった生徒が15名程度いたこと。
- ・バタフライは水泳の中でもっとも難しい泳法だと思っていた生徒に、「意外と泳ぐことができた」「タイミングが分かれば泳げる」など、自分にもできる泳法なのだと思わせることができたこと。
- ・この実践と同時に、ヒントカードやアドバイスボードを併用したことで、より技能の中でどこを意識したらよいかを明確に練習できたこと。

### (4) 課題

- ・バタフライの泳法習得におけるより効果的なステップの模索。
- ・水泳における「教え合い・高め合い」の授業形態の確立。

# 一人一人ができる喜びを味わう感動ある学びを目指して

高木 順二

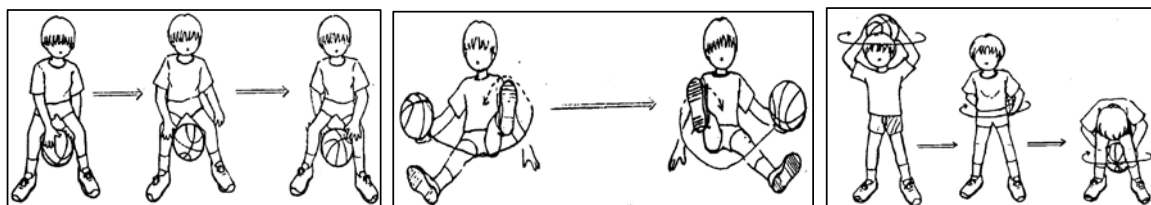
## 1 はじめに

「できないことができるようになった」、「自己記録の更新」などが体育の学びにおいて、最も感動や喜びが得られるときである。保健体育の授業において、常に「感動や喜び」を感じられる生徒を育てていきたいと考えている。それぞれの単元において、指導方法や指導形態を工夫しながら、自ら学び運動する生徒を育成する授業をめざし、授業実践を行った。

## 2 実践例

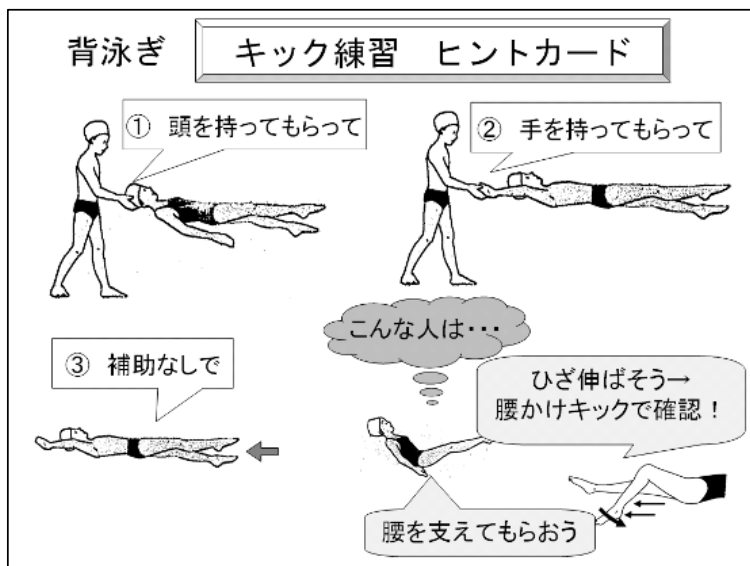
### (1) バasketボールの授業：「ハンドリングテスト（スキルテスト）の実施」

授業の最初と最後に、同じハンドリングテストを実施した。最初の授業でテストを実施することにより、生徒は自分の技能を確認し、それぞれ目標を持って練習に取り組む姿が多く見られた。そして、最後に同じテストを実施したところ、ほとんどの生徒が最初のテストの得点を上回り、技能が向上したことを実感することができた。



### (2) 水泳の授業：「練習ヒントカードの活用」

具体的な課題を持つことができるよう、ヒントカードを作成し、バディで練習する際にいつでもその資料を手にとって見ることができるようにした。プールの中でも見ることができるよう、ヒントカードはラミネート加工した。ヒントカードを活用することにより、何ができていて、何ができていないかが明確となり、つまずきに対してアドバイスし合う生徒の「学び合い」の姿が多く見られた。



### (3) 剣道の授業： 新聞紙刀（新聞紙を丸めた棒）を使った導入

授業の導入時に、新聞紙刀を用いた打ち合いを行った。安全面のみ注意し、自由に打ち合わせた。



どの生徒も楽しく打ち合うことができた。相手を打突する楽しさを味わうことで、剣道に対する興味関心を高めることができた。また、打たれた痛みを実感することで、相手を尊重する気持ちを持つきっかけになった。

#### （４）今後の課題

明確な「ねらい」があって、はじめて指導方法・形態の工夫が必要になってくる。我々は、常に各運動領域・種目の「ねらい」や「育てたい生徒像」、さらに保健体育科としてめざすべき方向をしっかりと持っていないといけない。そして、めざすべき方向に1歩でも近づくために、指導の効果を高める方法・形態の工夫を常に考えていかななくてははいけい。

これからも、各運動領域・種目の「ねらい」、はどうか、「指導方法・形態」はどうか、と「評価」する。このように「ねらい」・「方法・形態」・「評価」と指導の一体化を常に考えながら授業実践していきたい。

# 保健分野の授業実践

永濱 奈穂

## 1 単元 傷害の防止

### 2 単元構想

#### (1) 単元の指導計画

交通事故や自然災害によって、どのような傷害がどのようにして起こるのかを資料を参考に学習する。そうすることで実生活と結びつけて押さえることができると考える。また、傷害を防止するためにはどうしたらよいのかや、傷害が発生したときの応急手当の行い方を実習を取り入れて学習することで、いざという場面に遭遇したときの実践力を身に付けた生徒を育成したい。

#### (2) 単元計画 (6 時間)

- ① 傷害の発生とその防止
- ② 交通事故による傷害の防止 (1 時間)
- ③ 自然災害による傷害の防止 (1 時間)
- ④ 事故や傷害が発生したときの手当 (1 時間)
- ⑤ 意識・反応がないときの手当 (1 時間) (本時 1 / 1)
- ⑥ 出血があるときの手当 (1 時間)
- ⑦ 外傷の手当 (1 時間)

### 3 本時の目標

- ① 胸骨圧迫の仕方とAEDの使い方を実習を通して理解することができる。
- ② 応急手当の手順を理解することができる。

### 4 ひとりひとりに「響き合い高め合う学び」を与えるポイント

#### 響き合い高め合う学びの場面

○ A E D トレーナーと人形を使いながら、応急手当の手順に従って実際に体験する場面。

#### ポイントとなる手だて

○ A E D トレーナーと人形を用いて実演し、班員が行っているときは救命カードで注意事項を確認する。

### 5 授業づくりの視点

- ① 生徒の参加度は100%に近い授業であったか。
- ② 授業で扱った教具やプリント等は思考・表現を高める授業の仕掛けとして適切であったか。

### 6 本時の学習過程 (次ページ)

### 7 本時の観点別評価規準と評価方法

評 価 の 観 点	評 価 規 準	評 価 方 法
知識・理解	胸骨圧迫の仕方とAEDの使い方、応急手当の手順を理解することができる。	観察・ワークシート

8 板書計画

★応急手当  
 (一時的に行う最小限の手当) の目的

- ・ 生命を救う・けがや病気の悪化防止
- ・ 苦痛をやわらげ、励ます

- ・ 胸骨圧迫の仕方とAEDの使い方を知る。
- ・ 応急手当の手順を理解する。

応急手当の手順

①周囲の安全確認 ②反応の確認

③協力者を求める  
(救急車・AED・多くの人)

④呼吸をみる

⑤胸骨圧迫→AED装着→胸骨圧迫


各班10名(5ペアつくる)

①AED担当と胸骨圧迫担当を決める。

②手順に従って行う。

③やっていない人は救命カードで注意事項が守られているかをチェックする。

学習過程

学習活動・内容	形態	教師の支援・評価
<p>〈みつける〉</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 5px;">① 応急手当の意義や目的を復習する(2分)</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 5px;">② 応急手当の手順を知る(5分)</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 5px;"> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 胸骨圧迫の仕方とAEDの使い方を知る。</li> <li>・ 応急手当の手順を理解する。</li> </ul> </div>	<p>全体</p> <p>全体</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 応急手当の必要性を意識させるために前時の内容を確認する。</li> <li>・ 一連の流れをチャート図で押さえる。</li> </ul>
<p>〈高め合う〉</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 5px;">③ 胸骨圧迫の仕方とAEDの使い方を知る(10分)</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 5px;">④ 応急手当の手順にしたがって、実際に行う(25分)</div> <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p>AEDトレーナーと人形(リトルアン)の活用</p> <p>救命カードの活用</p> </div> <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px; margin-top: 10px;">  <p>ワークシートの活用</p> </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p>胸骨圧迫のテンポが遅いよ。</p> <p>電気ショックの前に安全確認忘れてるよ!</p> </div> <p>〈注意事項〉</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 安全確認</li> <li>・ 呼吸は目で素早く確認</li> <li>・ 胸骨圧迫は、1分間のテンポで強く、絶えず</li> <li>・ パッドはしっかりと貼る</li> </ul> <p>100~110回 間なく</p>	<p>全体</p> <p>班</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ AEDはいち早く心電図を測ることが重要であることを押さえてから実習に移る。</li> <li>・ ペアで胸骨圧迫を行う生徒とAEDを行う生徒を役割分担し、班全員が行うよう指示する。</li> <li>・ 班の中で実技を行っていない生徒には「救命カード」に書かれた注意事項が守られているかをチェックさせながら参加するよう指示する。</li> <li>・ 胸骨圧迫で押し方が弱い生徒やテンポの遅い生徒がいないかを確認し、支援する。</li> </ul> <p>【評】胸骨圧迫の仕方とAEDの使い方を</p>
<p>〈ふりかえる〉</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 5px;">⑤ 応急手当の手順を再確認し、ふりかえりを記入する(8分)</div>	<p>個</p>	

〈応急手当の手順〉

- ①周囲の安全確認
- ②反応の確認
- ③協力者を求める
- ④呼吸をみる
- ⑤心肺蘇生
- ⑥AED装着
- ⑦電気ショックが必要かAEDが判断する

理解することができたか。

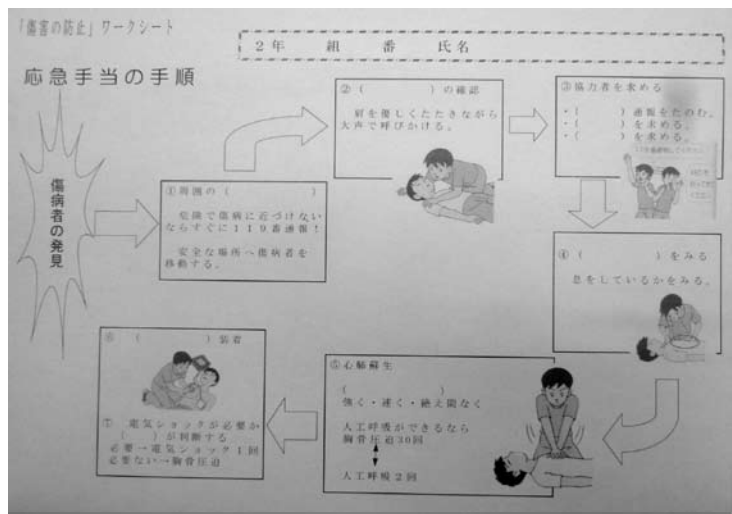
・もう一度応急手当の手順をワークシートを用いて確認させてから、ふりかえりを記入するよう指示する。

【評】応急手当の手順を理解することができたか。



- 今日のゴール（本時の課題）をしっかりと示して授業が始まりよかった。しかし、「応急手当の順序を空で言えるようにしよう」のほうが具体的でよかったかもしれない。
- 十分に教具をそろえてありよかった。
- 消防署の方と養護教諭と指導者の数が多いのはとても効率よく的確に指導できてよかった。
- 関連するビデオを事前に見せたクラスは理解がスムーズでよかった。
- 実習にうつる前に、生徒に応急手当の順序を言えるようにしてからやれるとよい。
- 何のために胸骨圧迫するのかを押さえるとよかった。← 脳に酸素を送る

応急手当の手順を示したワークシート



## 救命カード

その手で救え!

- ① 周囲の安全確認
- ② 反応の確認 ← 耳元で! 大声で!
- ③ 協力者を求める ← 119番 & AED & 助っ人
- ④ 呼吸をみる ← 目ですばやく確認!
- ⑤ 心肺蘇生 ← **胸骨圧迫**  
1分間に100~110回  
毎回、元の位置に戻す  
ひじを伸ばし体重をかける
- ⑥ **AED装着** ← 手早く!  
心臓をはさむ位置に貼る
- ⑦ 電気ショックが必要なら  
→ ボタンを押す前に  
「私よし、あなたよし、周りよし!」

## チェック

100点=A 91~99点=B 90点未満C

氏名					
①					
②					
③					
④					
⑤					
⑥					
⑦					

班のメンバーが実践しているときに、順序良く行うことができているかをチェックするカード



# 自己肯定感を高める保健指導（いのちの学習）

－ 1 年生「思春期の心の変化」の授業を通して－

井戸 行江

## 1 はじめに

日々、保健室で生徒に対応していると、思春期特有の心の変化（劣等感・反抗心・依存心・異性やおしゃれへの関心・体の悩みなど）に由来する相談がかなりの割合を占めている。ストレスに対処する力も弱い生徒が多く、イライラしたり、逆に頭痛や腹痛といった身体症状を訴える生徒もいる。

子どもから大人への成長過程において、上記のような心の変化が起こることは当たり前のことであり、誰もが体験することであることを、学びあいの授業の中で知ることによって、生徒は安心して、仲間との学校生活を送ることができるのではないかと考え、この授業実践に取り組むこととした。

## 2 学習過程

この授業の中で、生徒の自己肯定感を高めるためのポイントをいくつかあげてみたい。

### （1）ポイント1－意識調査

事前に次の項目について意識調査（無記名）を行い、集計結果を授業の導入に活用する。例年〇が多い項目は、No2・3・5・6で、女子ではNo8も多いことがある。

	最近の自分に当てはまること	〇印
1	親や先生に反抗したいと思う。	
2	学校や社会の欠点が目につくようになった。	
3	自分が周りからどう思われているか気になる。	
4	自分の部屋には、だれも入れさせたくないと思う。	
5	自分の欠点が気になるようになった。	
6	はずかしいという気持ちが強くなった。	
7	異性のことが気になるようになった。	
8	おしゃれ（服装や髪型など）がしたいと思うようになった。	

### （2）ポイント2－小グループでの話し合い

事前意識調査の結果を聞いた後、小グループで「具体的にどのような場面で、そのような気持ちになったのか」について話し合いをする。この話し合いにより、イライラするのは自分だけではないことや、みんなも周りの目が気になったり、反抗したくなったりすることがあるということに気づいて安心するのか、とても和やかな表情が見られる。

イライラするのも、不安になるのも、思春期に起こる自然な気持ちであると気づくことで、肯定的に自己を受け止めることができると思われる。

### （3）ポイント3－思春期橋

思春期の心の変化を解説するために、「思春期橋」という名の不安定な丸太橋のイラストを黒板に貼りながら話をすると、たいへん分かりやすい。

話の途中で、男女1名ずつを指名して、「あなたは今、どの辺りにいますか？」と、生徒姿のプレートを置かせてみるのもよい。

以下は、思春期橋の説明文（教師用）である。

- 1 子どもから大人になる時に、誰もが渡る一本の橋（丸太の橋）があります。
- 2 この橋の名前は「思春期橋」。思春期は、だいたい10歳から18歳くらいだと言われています。

- 3 不安定な橋で、『くぼみ』があったり、「枝」が邪魔していたり、渡るのに苦労する、くぼにつまずいて転んだり、枝で傷ついたり、落ちこちそうになったり・  
・・・
- 4 だから、心も不安定になりやすい。イライラしたり、落ち込んだり、ちょっとしたことでドキドキしたり、傷ついたり  
・・・
- 5 みなさんは、今、思春期のどの辺りを通っていると思いますか？



- (男女1人ずつを指名し、橋を渡っている自分を想像させ、どの辺りか、人形を貼らせる。)
- 6 みなさんは、この橋で「3つの出会い」をします。  
1つ目の出会いは『大人の体』との出会いです。そこで、人との違いを気にして不安になったり落ち込む人がいるかもしれません。しかし、体の発育には個人差があります。顔や性格が違うように、体の発育も人によって違います。早いとか遅いとか気にすることはありません。
  - 7 2つ目の出会いは、『もう1人の自分』との出会いです。  
これは、「自我」とも言います。自分らしさが芽生え、自分で考え、自分で判断するようになります。
  - 8 3つ目の出会いは、『異性』との出会いです。異性とは、自分とは違う性のことです。  
男子にとっては女子のことが、女子にとっては男子のことが気になり始めていませんか。
  - 9 今日の授業では、思春期に入った自分の心の変化に気づいてほしい。この「3つの出会い」を意識して、この「思春期橋」をどんなふうに渡っていくのかを、ひとりひとり考えてほしい。

## 2 生徒の感想

○自分の周りにいる大人に正論を言われると、正しいとわかっているけどすぐイライラしてしまうので、性格悪いなと思っていましたが、みんなもそう思っていることがわかって安心しました。(1-4女子)

○今日の授業で、思春期といっても人それぞれ個人差があるんだなと改めて感じました。イライラした時には、人に当たったりしないで、自分自身の力で落ち着いたり乗り越えたりできるようになりたいと思います。(1-5女子)

○すぐに反抗するのではなく、しっかりと考えて行動したいと思った。言われて「分かってる！」と思った時も、自分では分かってるだけで行動に移していないので、自分なりにしっかりと考えて行動できるようになりたい。(1-5男子)

## 3 おわりに

中1の時期にこの授業をすることにより、自己肯定感が高まり、その後の中学校生活が安定すると考える。さらに、授業参観で行うことができれば、家庭での親子の会話のきっかけにもなり、保護者が思春期のわが子と関わる上でも大いに役立つ内容であると思う。今後も、このような命や心の学習に積極的に取り組んでいきたい。

# 持久走ふりかえりカード **2年組番氏名**

◆ 1500m タイム      分      秒	◆ 外周昨年度ベスト      分      秒
---------------------------	--------------------------

- アップ → 順位（できなかつたらC）
- 服装 → A（完璧）・B（忘れた）
- 記録 → 20分間走は何周走れたかを記入（例：8周 or 9.5周）する。  
11周走り切れた人はゴールした時間（例：17分50秒）を赤ペンで記入する。
- 脈拍 → 走り終わったら、1分間の脈拍数を記入する。（10秒間数えて6倍する）

## 外周（2.1km）コースの記録

限	月日	アップ	服装	タイム	脈拍	限	月日	アップ	服装	タイム	脈拍
1	月					2	月				
	日	反省					日	反省			
限	月日	アップ	服装	タイム	脈拍	限	月日	アップ	服装	タイム	脈拍
3	月					4	月				
	日	反省					日	反省			
限	月日	アップ	服装	タイム	脈拍	限	月日	アップ	服装	タイム	脈拍
5	月					6	月				
	日	反省					日	反省			

## 20分間走の記録

限	月日	アップ	服装	記録	脈拍	限	月日	アップ	服装	記録	脈拍
1	月					2	月				
	日	反省					日	反省			
限	月日	アップ	服装	記録	脈拍	限	月日	アップ	服装	記録	脈拍
3	月					4	月				
	日	反省					日	反省			

# 2年 組 番 氏名

## ～単元全体のふいかえい～

全体を通しての反省・感想など

---

---

---

---

---

---

---

---

◆ 長距離走 参加点  点 【 参加→1点 途中リタイ→0.5点 不参加(見学・欠席)→0点 】

◆ アップ 合計得点  点 【 1位～5位 →3点  
6位～12位 →2点  
13位～ →1点 】

◆ 服装 合計得点  点 【 A→1点 B→0点 】

◆ 反省 合計得点  点 【 はんこの数 】

◆ 外周(2.1km) 自己ベスト 分 秒

◆ 20分間走 自己ベスト 周 または 分 秒

○ スタート方法 ( ) スタート

○ スタート合図 ( )・・・「ドン」

○ 走り方

- ・ 歩幅を狭く回転を速く :( ) 走法
- ・ 歩幅を広くゆったりと :( ) 走法

○ 走り始めてしばらくすると息苦しくなることを( )  
がまんしてそのまま走り続けると呼吸が楽になることを( )

ベストを尽くす空気をみんなで作りだす！  
心と体のトレーニング  
苦しいことを頑張り抜くことで強くなれる！



# 技術家庭

# 仲間とともに生きる力を育む 技術・家庭科の学び

## テーマに迫る基本的な考え方

生活に必要な技術やそれに関連した知識を身につけ、それをもとに工夫・創造を加えて実生活に役立て、より豊かな生活ができるようにすることが、技術・家庭科の目標である。

本校の技術・家庭科においては次のことを重視して教育活動にあたりたい。

- ①生活に必要な基礎的・基本的技能や知識の習得を目指す。
- ②実生活や社会の中で、学習した技術がどのように活用されているかを振り返る習慣を身につける。
- ③学んだ技術や知識を活かし、工夫を加えて、実生活に役立てようとする態度を育む。

## 技術・家庭科の

### 「響き合い 高め合う 学び」

技術・家庭科の目指す学びは、生活に役立つものを自らの力でつくりあげたり、課題解決に向けてよりよい方法を考え出したりすることである。そして、それらができたと実感できたときに、喜びを感じることができる。生徒個人個人の力だけでは、限られた時間の中で全ての生徒がそのような喜びを感じとることは難しい。だからこそ、技術・家庭科の授業においては、グループやペアなどの小集団単位で活動する機会を設け、相互に助け合いながら達成感や成就感を全ての生徒に感じとらせられるようにしていきたい。

## 技術・家庭科における目指す生徒の姿

能 動	協 同	成 就
○実生活や社会の中で活用されている技術に関心を持ち、それに関わる技術や知識を身につけようとする生徒。	○共に考えたり、助け合ったりすることができる生徒。	○仲間と協力して課題を解決し、達成感や成就感を共に感じることができる生徒。

## 指導・支援の手立て

能 動	協 同	成 就
●興味・関心を引き起こす教材・教具の開発。 ●題材計画・学習課題の明確化。	●学習課題の提示のしかたを工夫。 ●発表者と聞き手が互いに反応し合う授業づくり。	●振り返りカードの活用。 ●教科委員やグループの係活動のシステム化。 ●スムーズな実習活動

# 「響き合い 高め合う 学び」をめざして

## － 生物育成の指導を通して －

玉田 博司

### 1 はじめに

昨年度から本校では「生物育成に関する技術」を、土のう袋を利用した野菜の栽培をとおして行うようにし、今年度は2回目となった。昨年度は3年で「ナスの栽培」、2年で「ダイコンの栽培」を題材に選び、前期に3年、後期に2年を指導した。今年度は2年のみ「ダイコンの栽培」を指導し、その内容を簡単に報告したい。

### 2 指導の実際

#### (1) 学習計画 (9時間完了)

月	指導時間	主な指導内容	活動(作業)内容
9月	3時間	①生物育成の条件と管理方法 ・たねまきの方法 ・発芽後の管理 ・たね以外から苗を育てる方法 ②作物の育成計画と栽培 ・いろいろな手入れ(誘引、摘芽、摘芯、灌水) ③育苗に関する技術Ⅰ ・間引き ・移植と定植 ・植物の生育と環境(光、温度、土壌について)	・種まき(ポットまき) ・灌水(灌水当番決め) ・間引き ・土のう袋への定植 ・土のう袋の設置 ・下葉の処理
10月	2時間	④育苗に関する技術Ⅱ ・土と追肥 ⑤育苗に関する技術Ⅲ ・植物の生育と環境 ・病気や害虫	・灌水(当番活動の確認) ・枯れた葉の除去 ・増し土 ・追肥 ・アオムシの駆除
11月	2時間	⑥育苗に関する技術Ⅳ ・病虫害の駆除のしかた ⑦育苗に関する技術Ⅶ ・農薬を使用するときの注意事項	・灌水(天候と灌水の量) ・枯れた葉の除去 ・農薬の散布 ・増し土 ・追肥
12月	2時間	⑧育苗に関する技術Ⅷ ・増し土 ・収穫の仕方 ⑨育苗に関する技術Ⅸ(作物の収穫) ・生物育成に関する技術のまとめと評価	・灌水 ・増し土 ・枯れた葉の除去 ・ダイコンの収穫 ・土のう袋と土の処理

#### (2) 栽培植物(題材)の選定について

栽培領域の指導では「菊」を題材に選び指導することがよく行われていたが、菊の栽培ではいろいろな栽培技術を指導できる利点はあるが、「栽培が4月から11月と長期に渡ること」や「栽培管理に労力を多く要すること」などの課題もあった。また指導時間もかつての週3時間から今は週2時間となり、その中で3年間で指導する内容も「材料と加工に関する技術」「エネルギー変換に関する技術」「情報に関する技術」とのバランスを考えると、「生物育成に関する技術」に多くの時間を費やすことが難しい。とりわけ、40日を超える夏休み中の管理や9月・10月の台風対策はとても大変である。そこで新指導要領に完全に移行した昨年度から必修指導内容になった「生物育成に関する技術」



土のう袋置き場の設置(9月上旬)



の指導題材として「ダイコンの土のう袋栽培」を選んで指導している。

＊ダイコンの栽培題材としての長所

- ・夏休み後にたねまきをし、冬休み直前に収穫が可能である。
- ・発芽率が高く、栽培途中での失敗が少ない。
- ・土のう袋を利用することで、農地（畑や花壇）がなくても栽培が可能である。
- ・収穫したダイコンを家に持ち帰り、調理して食べることで、自然の恵みに対する感謝の気持ちを育てることができる。
- ・毎日の灌水を学級の仲間と協力し合って進めることで、学級活動の活性化を図る。

### （3）作業の様子

9月上旬：ポッドに培養土を入れダイコンのたねをまく。ポッドには5粒を均等にまく。1カ所にまとめて集中管理し、発芽するのをまつ。

9月中旬：3日～4日程度で発芽。授業の都合で1週間ほど育てた後、間引きさせて3つの苗を残し、土のう袋に移植する。根菜なので移植はできるだけ避けるため、この1回のみとする。また、苗が大きくなってからでは移植時に根が傷つくおそれがあるので、早めの時期に済ませた。

9月下旬～10月下旬：週1時間の授業時に毎回観察・スケッチをし、成長を確認する。また、この時期はまだ気温が高く、最もよく成長する時期になるため、毎日の灌水作業の大切さを知らせ、灌水当番の活動状況を確認するとともに、灌水の量や頻度について指導する。

10月中旬：蝶の飛来が多く、アオムシの被害が出始める。病気や害虫の指導と合わせ、アオムシの駆除を行わせる。（アオムシは11月下旬まで駆除が必要であった。）また休日（秋休み）に、農薬（マラソン剤）を散布し、アオムシ及びアブラムシの駆除を教師が行う。

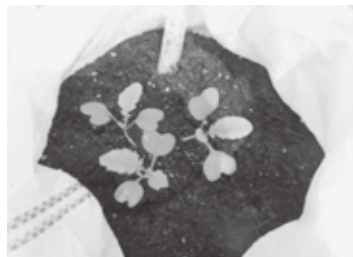
10月下旬～12月上旬：ダイコンが育って大きくなると、生徒達も観察のたびに生長したダイコンを見て喜ぶ姿が見られた。育つことで土から大きく飛び出すダイコンに合わせ、土を追加し（増し土）するとともに、化成肥料を追肥として施させる。ダイコンの生長を阻害させないようにするため、肥料の量や施す場所について指導する。また枯れた葉や病気にかかった葉を取り除く作業を毎回させ、病害虫による被害が大きくなるように注意させた。

12月下旬：約3か月半かけて育ててきたダイコンを収穫する。大きく立派に育ったダイコンもあれば、うまく育たなかったダイコンもある。土の上からは立派に育っているように見えたダイコンも、土の中にダイコンの生長を妨げるのがあると、まっすぐ下へ成長できない事実を初めて知る。9月に土のう袋に土を入れ移植の準備をしたときに、「肥料の量を多くしすぎたり、土とよく混ぜ合わせることをしないと、肥料が邪魔をして下へ大きく成長しない。」ということが事実であることが確認できた。



ダイコンの収穫

冬休み：収穫したダイコンについて、感想やどのように調理して食べたかななどをレポートにまとめさせた。調理方法について親に相談したり、インターネットで変わった調理法を調べ実践してみたりと、自分が育てたダイコンを無駄なく活用したレポートも多くあった。自分が育て調理したダイコンを家族で食べ、おいしいと言われたり喜ばれたりしたことが多く報告された。



土のう袋への定植（9月中旬）



観察後に間引き作業（9月下旬）



間引き後の様子（9月下旬）





観察・スケッチ（11月中旬）





直径7センチ程度まで育ったダイコン（11月中旬）

### 3 今後の課題

- ・ダイコンの栽培指導している 期間は、毎週1時間の授業を その指導に使わざるをえず、他の題材の指導が時間的に窮屈になる。
- ・灌水当番の活動ができていのか毎日観察し、必要によっては指導・援助を行うため、一人の教師では授業時間外での負担が大きい。

技術・家庭科 MY RADISHI REPORT (私の大根の報告)	
2年 4組 杉原 真希	収穫した大根 (写真)
【収穫しての感想】 大根を収穫して、その大根を自分で食べたい。大根がおいしい。育てて見ると、大根が4年生でこんなに大きくなる。思い通りに育ちました。おいしく食べてみたいです。	
【大根の調理レシピ】 調理作品名 大根と豚肉の炒め物 調理の仕方 ①大根を洗い、皮を剥いて、5cmの角切りにする。 ②豚肉を5cmの角切りにする。 ③1cmの角切りにした大根の皮を剥き、油をひく。 ④フライパンに油を熱し、大根を炒める。 ⑤大根が柔らかくなったら、豚肉を加えて炒める。 ⑥塩を少し加えて、完成。	
【大根を食しての感想】 自分で収穫した大根を自分で調理して、おいしく食べました。大根がおいしい。育てて見ると、大根が4年生でこんなに大きくなる。思い通りに育ちました。おいしく食べてみたいです。	
2年生 ダイコンのレポート	

技術・家庭科 MY RADISHI REPORT (私の大根の報告)	
2年 5組 坪田 真希	
【収穫しての感想】 自分で大根を育てて、収穫しました。大根が4年生でこんなに大きくなる。思い通りに育ちました。おいしく食べてみたいです。	
【大根の調理レシピ】 調理作品名 大根のソテー 調理の仕方 ①大根を3cmの輪切りにし、厚めに皮をむき、油をひいて、大根を炒める。 ②大根が柔らかくなったら、豚肉を加えて炒める。 ③大根が柔らかくなったら、豚肉を加えて炒める。 ④大根が柔らかくなったら、豚肉を加えて炒める。 ⑤大根が柔らかくなったら、豚肉を加えて炒める。 ⑥大根が柔らかくなったら、豚肉を加えて炒める。 ⑦大根が柔らかくなったら、豚肉を加えて炒める。 ⑧大根が柔らかくなったら、豚肉を加えて炒める。 ⑨大根が柔らかくなったら、豚肉を加えて炒める。 ⑩大根が柔らかくなったら、豚肉を加えて炒める。	
【大根を食しての感想】 自分で収穫した大根を自分で調理して、おいしく食べました。大根がおいしい。育てて見ると、大根が4年生でこんなに大きくなる。思い通りに育ちました。おいしく食べてみたいです。	
ダイコンのレポート (冬休み課題)	

技術・家庭科 MY RADISHI REPORT (私の大根の報告)	
2年 6組 杉原 真希	
【収穫しての感想】 自分で大根を育てて、収穫しました。大根が4年生でこんなに大きくなる。思い通りに育ちました。おいしく食べてみたいです。	
【大根の調理レシピ】 調理作品名 マリョウダイコンのめんつ煮 調理の仕方 ①大根を洗い、皮を剥いて、5cmの角切りにする。 ②大根が柔らかくなったら、豚肉を加えて炒める。 ③大根が柔らかくなったら、豚肉を加えて炒める。 ④大根が柔らかくなったら、豚肉を加えて炒める。 ⑤大根が柔らかくなったら、豚肉を加えて炒める。 ⑥大根が柔らかくなったら、豚肉を加えて炒める。 ⑦大根が柔らかくなったら、豚肉を加えて炒める。 ⑧大根が柔らかくなったら、豚肉を加えて炒める。 ⑨大根が柔らかくなったら、豚肉を加えて炒める。 ⑩大根が柔らかくなったら、豚肉を加えて炒める。	
【大根を食しての感想】 自分で収穫した大根を自分で調理して、おいしく食べました。大根がおいしい。育てて見ると、大根が4年生でこんなに大きくなる。思い通りに育ちました。おいしく食べてみたいです。	
2年生 ダイコンのレポート	



しかし、実際にお弁当のイラストを描かせると、好きなものばかりを選び「から揚げ・とんかつ・焼肉」という肉に偏った茶色弁当ができあがる。先ほどの良い弁当の条件を再度確認すると苦笑いである。

そこで「3・1・2弁当法」の実践を試みた。主食カード15枚、おかずカード90枚という豊富なメニューから選べるため生徒たちは楽しそうに献立作成の作業に取り組んだ。「主食3・主菜1・副菜2」という面積割合で弁当箱に詰めていくと見た目も栄養バランスも良く、味も変化に富んだ弁当が出来ることをつかませることができた。



お弁当カードを使って

#### (4)「自分で作る弁当の日」

本校では秋休み明けに写生大会を行う。その日の弁当を「自分で作る弁当の日」とし、何か一つでもいいから自分でお弁当を作ってみようと呼びかけた。保護者にも趣旨を説明し、基本的な調理技能と安全・衛生的な調理については授業で学習済みであり、生徒たちのチャレンジを温かく見守っていただくようお願いした。

### 3 結果と考察

#### (1) 友達の良さを知る

調理実習を行ったり、レポートを見せ合ったりすると、友達の思わぬ一面が見えてくる。生徒の感想の一部である。

・・・食べている間に「使った鍋に水を入れておくと片づけが楽だよ」と教えてくれたKさん。見ていると、ガスコンロの周りの汚れをさっと拭いたり、ごみを片づけたり何気ない気配りができるKさんはすごいなあと思っています。

#### (2) 家族の良さを知る

自分で買い物から調理、後片付けまで行くと大変な手間がかかっていることに気付く。また、「家庭での実践」で作ったものを「おいしい、おいしい」と言って食べてくれる家族。自分は「おいしい」と感謝の気持ちを伝えたことがあったらどうかと自分自身を振り返る機会にもなる。感謝されることは感謝することでもある。

#### (3) 自分の良さを知る

「家庭での実践」では必ず家族のコメントをもらうように指示をしている。家族からのことばには必ず感謝のことばがある。それは我が子の成長を喜ぶ姿でもある。「家族にしてあげること」が「家族に喜んでもらえること」に生徒は驚き、感動する。家族からのコメントの一部である。

・・・家族みんなでおいしくいただきました。あの小さかった娘がこんなにおいしい料理を作ってくれるようになるなんて夢のようです。しかも、私の健康のことを考えて野菜中心のメニューでした。ありがとう。ただそのひとことです。ごちそうさまでした。

### 4 おわりに

生徒たちが将来にわたって、自立した、幸せな生活を送ることができるよう、友達と関わり合いながら、家庭の協力を得ながら、知識と技能を身に付けさせたい。

技術科自己評価カード

(2年 もの作り「ジョイントテンの製作」)

2年 組 番 氏名

自己評価の仕方

A 十分できた

B だいたいできた

C あまりできなかった

D できなかった

点 検 項 目	自己評価	備 考
1 作品の構想を等角図でかくことができる。		
2 構想図をもとに、木取り図をかくことができる。		
3 構想図をもとに、部品表をまとめることができる。		
4 さしがねを正しく使って、材料にけがきを正確にすることができる。		
5 両刃のこぎりの「縦びき用の刃」「横びき用の刃」を正しく使い分けて正確に切ることができる。		
6 かな身を正しく出したり、抜いたりすることができる。		
7 木材が適度に削れるように、刃先を調整することができる。		
8 安全かつ正確に、こばけずりをすることができる。		
9 ならい目けずりとさか目けずりを区別することができる。		
10 仕上がり寸法どおりに、各部品を加工することができる。		
11 くぎの下穴やジョイント取り付け位置のけがきを正確にすることができる。		
12 プラスチックカッターを正しく使って、アクリル板を正確に切断することができる。		
13 三つ目キリ、四つ目キリを正しく使い分けて、くぎや木ねじの下穴を正確にあけることができる。		
14 卓上ボール盤でΦ6 の穴を正確にあけることができる。		
15 げんのうを正しく使い、正確に釘打ちをすることができる。		
16 部品がずれたり直角度がかかることなく作品を組み立てることができる。		

# 授業を振り返って

2年 組 番 氏名

月	日	曜	時限	授業の感想・反省・疑問点	態度	服装	忘れ物	教師印
月	日							
月	日							
月	日							
月	日							
月	日							
月	日							
月	日							
月	日							
月	日							
月	日							

### 態度の自己評価規準

- A 授業に集中し、進んで自分の考えや工夫したところを発表したり、友達と教え合ったりして取り組んだ。
- B 授業に集中し作業も進んだが、自分の意見を発表したり、友だちと教え合ったりはあまりできなかった。
- C 授業に集中できなかったときもある。友だちと教え合ったりして取り組むことはほとんどできなかった。
- D 授業にほとんど集中できず、授業（作業）もあまり取り組めていない（進んでいない）。

### 服装／忘れ物の記入

- ：体操服に着替えている／忘れ物がない      ×：着替えていない／忘れ物がある

### 作品を完成させての感想・反省

-----

-----



英語





英語科が目指す「響き合い 高め合う 学び」

## 仲間と助け合いながら確かな学力をつけていく学び

### テーマに迫る基本的な考え方

現代の日本は、国際色豊かになり、海外との関わりも密になってきている。犬山市でも海外からの観光客を多く見かけるようになり、留学生の受け入れも積極的に行われている。今後も、日本と海外とのつながりはますます強くなり、英語の必要性は高まる一方であると考え。英語はいろいろな国の人々とコミュニケーションをとる手段のひとつである。しっかりと自分の思いを相手に伝えること、そして、相手の言ったことをきちんと理解することはとても大切なことである。しかし、そうしたコミュニケーションをとるためには、やはり、基礎基本を重視した確かな学力をつけていくことが大前提となる。具体的には、確かな単語力・表現力をつけていくことが重要であると考え。また、そうした確かな学力をベースに、学習したことを使って自分の意見を相手に伝え、思いを理解してもらえたときに感動が生まれる。このように、英語を話す楽しさを感じさせながら、着実に基礎基本を身につけさせていくことが英語科としての願いである。生徒どうしが関わり合い、みんなでレベルアップしていける授業を目指していきたいと考える。

### 英語科の「響き合い 高め合う 学び」

- レベル1：英語を読んだり、聞いたりして、理解できる。
- レベル2：英語を書いたり、話したりして、表現できる。
- レベル3：英語の会話やメールなどのコミュニケーションを通して、英語を使うことに楽しさを感じることができる。
- レベル4：英語を使って、豊かに自分を表現しようという気持ちが出てくる。

### 英語科における目指す生徒の姿

能 動	協 同	成 就
○英語に関心を持ち、意欲的にコミュニケーション活動に取り組む生徒	○仲間とかかわりながら、英語を使って、伝え合ったり、表現したりする生徒	○英語を使って「伝え合う」喜びを味わい、さらに向上をめざす生徒

### 指導・支援の手立て

能 動	協 同	成 就
<ul style="list-style-type: none"> <li>●授業の初めに本時の目標を知らせ、意欲を高める。</li> <li>●基本単語や基本文の練習を徹底的にし、英語を楽しみながらインプットさせる。</li> <li>●英語の歌・詩・ゲーム・チャットなどを取り入れ、英語への興味を高め、英語を楽しむ雰囲気づくりをする。</li> <li>●単語テストや単元テストを定期的に行い、基礎基本の定着を図る。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●ペアやグループの組み方、座席配置を工夫し、いろいろな生徒どうしで関わり合えるようにする。</li> <li>●4技能の活動をまんべんなく行い、英語で互いにコミュニケーションで育てる。</li> <li>●「わかった」「できた」「伝わった」という楽しさを味わうことのできるコミュニケーション活動を工夫する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●教師や生徒どうしの評価を大切にし、全体がレベルアップしていけるような声かけをしながら、次に向けての意欲を育てる。</li> <li>●「ふりかえりカード」を活用することで、目標が達成できた成就感を与えるとともに、次時への学習意欲を高める。</li> </ul>

# 英語科学習指導案

池之上 幸代

## 1 単元 Unit 5 Electronic Dictionaries - For or Against -

### 2 本時の目標

- ①長文を読み、内容を理解し T or F, Q & A の問題を解くことができる。
- ②紙の辞書のよい点として何があげられているかを理解することができる。

### 3 ひとりひとりに「響き合い高め合う学び」を与えるポイント

#### 響き合い高め合う場面

○ T or F, Q & A の答えを確認しあう中で、紙の辞書のよい点を見つけ出す場面。  
ポイントとなる手だて

○紙の辞書のよい点を見出し出してくることのできる問題 (T or F, Q & A) をあらかじめ準備しておく。

### 4 本時の学習過程

学習過程		学習活動
1分	全	①英語であいさつをする。
3分	ペ	②音声単語シートに取り組む。
4分	ペ	③音読活動に取り組む。 Part 1 ペリオドごと1文ずつ交代で音読する。(×2) Part 2 日本語を聞いて英文を言う。(×2)
		<b>課題提示</b> 紙の辞書のよい点として何があげられているかをみつけることができる
5分	全	④新出単語の発音練習と意味を確認する。
18分	個→ゲ	⑤教科書本文を読み、プリントの T or F, Q & A の問題に取り組む。
6分	全	⑥ T or F, Q & A の答えを確認する。
3分	全	⑦紙の辞書のよい点として何があげられているのかを確認する。
3分	個	⑧紙の辞書のよい点について書いてある英文を教科書本文の中から見つけ出し、ふりかえりカードに記入する。
2分	個	⑨授業のふりかえりをする。

### 5 成果と課題

#### (1) 成果

- ペアによる音声単語シートの取り組み
  - ・チェック表に記入していく数が回を重ねるごとに増えていくので意欲的に取り組むようになる。
  - ・これまで、英単語を覚えるのがつらかったが、毎時間の授業の最初にペアで活動することで着実に英単語が読めたり、意味がわかるようになることで達成感を持つ。
- ペアによる重要構文プリントの取り組み
  - ・ペアで問題を出し合い、答えるという活動を繰り返しやっていく中で初めは言えなかった文が少しずつ言えるようになっていく。回を重ねるごとに言える文が増えてくる。
  - ・英語が苦手な生徒でも、先生的な役割を持つことで、授業への参加度が高まり、意欲的に取り組むようになる。
- 教科書本文の音読活動の取り組み
  - ・最初はゆっくりでしか読めなかった英文が、繰り返し練習する中でリズムよく、スピーディに音読できるようになってくる。「1分30秒」という時間内に、できるだけ多くの英文を音読しようとペアで目標を持ち始め、クリアできた時には共に喜んでいる姿が見られるよう



になる。

- ・日本語を聞いて英文を音読する活動を行うことで、本文の内容を確認し合い、より一層、教科書本文の内容理解を深めることができる。



## (2) 課題

声に出して取り組む活動においては、意欲的に取り組めるようになったが、やはり、覚えて書くことに対する苦手意識が強く、家での効率的な学習も確立していないため、テストではなかなか点数を上げていくことのできない生徒が目立った。どの学年においてもこうした生徒は見られるので、こうした生徒への支援をしっかりとしていくことが今後の課題である。

## 6 おわりに

4月当初、「覚えることが多いから英語はきらい」という生徒が多く、授業に対しても意欲が持てず机にうつぶせてしまう男子生徒が多かった。そこで、授業の導入の部分において、タイマーを使ってタイムキーパーと指示のみに従事し、リズムよくスピーディに進めた。そうした中で、生徒たちはペアで次から次へと活動を進めていっているような感覚になり、お互いに声をかけ合うようになる。「はやく準備して」「始めるよ」と声をかけたり、「相手のためにすぐに準備しなければ」「忘れ物をするとうペアにも迷惑をかけてしまうから、次から気をつけよう」など、常に相手のことを考えるようになり、授業の最初の段階で仲間と支え合う授業をつくるようになった。授業のスタートを常にこの活動で始めることにより、生徒たちは意欲的に、また、主体的に学びへと入っていくようになったように思う。ペアでの活動を設定したことで、「ひとりでやるよりペアでやっているとおもしろい→毎回やっていると言えるようになってくる」という充実感も持ち始め、100%の参加度で取り組めるようになった。また、こうした意欲がその後の授業にもつながるようになり、50分という授業を真剣に取り組めるようになった。

また、日頃の学習方法や定期テスト前の学習方法がわからないという生徒のために、ノート・ワークの活用方法を明確にし、学習のあしあとがはっきりと残るようにした。テストの作成においても、学習したことがしっかりとあらわれるようなテストであるようつとめ、次への意欲にもつながるよう配慮した。

生徒たちを見ていて、仲間からの指示や助言は大変、効果的であるように感じる。「学び合いの姿」は、まず、こうした「支え合いの姿」があってこそ、成立してくるのではないかと思う。教師は、支え合える集団をまずはつくること。そこから、学び合い、高め合える活動を考え構成する。そして、そうした活動の中で、教師がどのような役割で、どう働きかけていくのかを明確にして、日々の授業実践を行っていくべきだと思う。



# 英語科学習指導案

尾関 久美

## 1 単元 Unit7 Speaking Plus 4 買い物 買い物をする申し出る

### 2 本時の目標

- ① 買い物でよく使われる基本表現を理解し、使いこなすことができる。
- ② 仲間と関わり合いながら、場面を意識して会話をすることができる。

### 3 ひとりひとりに「響き合い高め合う学び」を与えるポイント

#### 響き合い高め合う場面

○ ペアで協力をして場面を考えながら表現豊かになるよう会話練習をする場面。

#### ポイントとなる手立て

○ 普段の買い物での場面を思い返すように声掛けをし、それを意識しながら練習をする。

### 1 学習過程

響き合い高め合う場面	ペアでの会話練習を通して、丁寧な申し出や買い物での重要表現を身に付ける場面
単元名	Unit7 Speaking Plus4 買い物－買い物をする、申し出る
本時の目標	① 買い物でよく使われる基本表現を理解し、使いこなすことができる。 ② 仲間とかかわり合いながら、場面を意識して会話をすることができる。
学習過程	学習活動 or 発問の流れ
5分 10分 20分 10分 5分	個→ペア 全 全→ペア ペア 個
	① 不規則動詞変化表テストに取り組む ② 基本表現を確認し、練習問題に取り組む ③ 本文内容を確認し、音読練習に取り組む ④ ペアで場面を考えながら、店員とケビンになりきって練習をする ⑤ 授業の振り返りをする

↑【形態表示 ペ；ペア、グ：グループ、全：全体】

### 5 成果と課題

#### (1) 成果

- ・ 短時間の間に不規則動詞を集中して書くウォームアップを毎時間繰り返し行ってきた。初めは時間内に書ききれなかったり、書ききれなくてもミスがあった生徒もいたが、繰り返し行うことで次第に時間が短く、正解率も高くなった。また、書いて読める単語が増えたことに喜びや楽しさを感じる生徒も増えた。
- ・ 本文練習では、ペアで本文をただ練習するのではなく、場面を考え、それぞれの役割をイメージしながら練習をするよう伝えた。その際、普段買い物へ行ったときのお店の人たちはどんな姿かを思い出すように伝え、それをふまえると店員役はどんなことを意識するとより自然かを尋ねたところ「笑顔」とすぐに返ってきた。その後の練習では、初めは照れもあったが、笑顔を意識して明るい雰囲気での会話をし、お互いのコミュニケーションがスムーズになったように思う。

#### (2) 課題

- ・ 声を掛け合いながらどう会話を表現していこうかと練習に取り組むペアもいたが、積極的にお互いに声を掛けられず、もくもくと練習に取り組み、重要表現をしっかりと音読していてもなかなか会話として表現豊かに練習ができていないペアもいた。
- ・ 会話練習の時間をある程度とれたものの、充実した話し合いをして互いに表現を深められる

ように、生徒同士のやり取りがより円滑になるための教師の支援が必要である。

## 6 実践を終えての考察

### 授業のふりかえり

○充実したコミュニケーションには互いの気持ちが影響してくると考える。英語を話すことへの意欲、相手とコミュニケーションをとりたいという意欲。それがなければいくら英語を学んでも本来のコミュニケーションの為の言語としての意味を持たないのではないかと考える。

何故英語を話すことに意味があるのか。仲間とコミュニケーションをとる楽しさ、充実感を感じられる仕掛け作りが必要である。

○英語は人と人がコミュニケーションをとるための一つの手段であること、それは普段何気なく日本語で家族や友達、先生たちと会話をしていることと同じであることを伝え、何故ただ重要表現を練習するだけではいけないのか、表情や声の出し方などに何故表現をつけなければならないのかを明確に生徒に伝える必要がある。

○生徒のどんな姿を求めるのか。課題提示や授業の見通しを明確にすることで、生徒が一つ一つの活動にどんな意味があるのか、どう活動していき目指すゴールの姿は何なのかを分かりやすく伝える必要がある。

# コミュニケーション能力

伊藤 良子

## 1 はじめに

コミュニケーション能力を求められるも、日頃の生活の中で英語に触れる機会は少ない。聞き慣れ、見慣れることが大事ではあるが、機械的な訓練に陥らないよう、積極的に学習に臨めるような活動の工夫が必要となってくる。

## 2 子どもの姿

新しい文法、新しい文の構築を説明する際は、どの子どもも理解しようとする積極的な姿勢が見られるが、本文内容の理解（長文）、複雑な文、英作となると意欲に欠ける子どもの姿が見られる。また、学力の低い子どもも少なくない。

## 3 実践（学習過程）

### ①不規則動詞の過去形（ウォームアップ）

前期は、綴りを見ながら口頭練習を繰り返し行ってきたが、後期は書けるようになることを目標に進めている。まず、テストする13語を1分間しっかり見る。その後テストする。採点は各自教科書を見て行う。次の時間もまた同じところを同じようにテストし、計3回行う。それが終わると、次の新しい13語に入り同じように進める。

### ②比較級・最上級の復習

-er,-est を付けるグループと-more,most を付けるグループの区別を行った。前の時間、Net の授業でも扱ったが、再度確認のため説明した。

### ③不規則に変化する比較級、最上級を知る

教科書で扱われているもの1つだけに絞ってその使い方、及びそれにまつわる語の性質について1年生のレベルに戻り説明をした。さほど難く理解できたと感じた。助け合う場面も見られた。

### ④練習問題を解く

基礎の域に留まるも既知の語群を変化させ付け足した。

### ⑤ディクテーション

毎回、新しい文法を取り入れた後に、新しい文法を使った文のディクテーションを行っている。

### ⑥授業のふりかえりをする



#### 4 成果

- 不規則動詞は、綴りの苦手な子どもも、3回目には満点もしくは満点に近い点が取れた。
- 綴りを見ながらの口頭練習を長期間おこなったためか、「綴りを書く」に移行しても初回から満点もしくはほぼ満点に近い点が多かった。見慣れたもの、言い慣れたものがいかにスムーズに書けることに繋がるかを目にした。
- やり方が定着してくると自主的に進める子どもの姿が多く見られた。

#### 5 課題

- 初回の授業では時間がなくて、ディクテーションができなかった。次の授業で復習として取り扱った。時間配分に気をつけたい
- モデルの「よりよい～」「いちばん～」は言い合うことができたのですが、自分の「よりよい～」「いちばん～」に変えて子どもたちだけの活動を取り入れるべきであった。
- 個々の習得状況を見て回る時間をもう少し確保したかった。

#### 6 おわりに

英問英答、語群が付いた長い文や連結詞を用いた複雑な文の理解を苦手とする子どもの姿が多く見られる。これらは、1年生での既習事項が使いこなせていないことが原因の一つであると考えた。そこで、後期に入ってから、随所に1年生レベルの説明を大幅に取り入れた。すると遅い子どもたちの意欲が上がった。また、既知の英語で質問したり、英文法を英語で説明したり（文法用語は日本語で言い直す）英語を聞いて、英語で思考する場面を作った。はじめは戸惑いを見せるも、案ずることなくコミュニケーションは成立する。必ずしもペーパーテストでよくできる子どもが、意味の構築が速いとは限らないのが意外である。さまざまな方向から学習意欲を高め、コミュニケーション能力が伸びる授業にしたい。

# 仲間と助けあい表現力を磨こう

大西 千栄

## 1 はじめに

一年生の英語では、基礎をしっかりと定着させることが、重要になってくる。新しい文法も教え込むのではなく、皆で考えながら法則を見つけていくことに重きを置いて、学習を進めてきた。その中で、お互いに学び合う仲間意識も培ってこられた。ペアやグループで言語活動に取り組むことも積極的にできる。ただ、英文を作るという点では、苦手意識が強く、いわば食わず嫌いの状態が目立つのが現状である。

そこで、自分たちが言えるようになった英文をどういう場面で使うか、今まで学習した表現でどこまで言えるのかを考えることで、コミュニケーション力の向上を目指し、英作文力のアップにもつなげたいと考え、授業を組み立ててみた。

## 2 授業作りの視点

- ①生徒の参加度は、100%に近い授業であったか？
- ②学びたくなる、追究したくなる課題であったか？

## 3 学習指導過程

響き合い 高め合う場面	ペアで体の不調を訴える保健室での会話を考える場面
1 単元名	Unit 11 Speaking Plus 4 保健室での会話 ～体の不調を訴える～
2 本時の目標	1 ペア活動を通して基本表現を使いこなすことができる。 2 仲間と積極的に関わりながら、表情豊かに会話できる。
3 学習過程	学習活動 or 発問の流れ
5分 個	①不規則動詞変化表に取り組む
15分 全	②本文の理解と練習をする。
5分 全→ペア	③本時で使用するワークシートを全体→ペアで練習する。(ステップ1)
15分 全→ペア	④ペアで体の不調を訴える会話文を考え、発表できるように練習する。(ステップ2)
7分 ペ	⑤役になりきり発表できる。
3分 個	⑥ふりかえりカードを記入する。

## 4 成果

時期的にインフルエンザで欠席する生徒も多く、体の不調を訴えるスキットは、タイムリーな課題であった。症状の中には、難しい単語も含まれるが、ジェスチャーを交えて楽しく言語活動ができた。私自身が海外で体験した話も交えて具合が悪くなったときに、自分の状態を英語で伝えられるかは、大きさに言えば、命に関わることだと意識して取り組むようにした。

教科書本文では、頭痛を取り上げてあった。原因となるのは、夜更かしであったが、いろいろな症状を取り上げるうちに、生徒の中から、原因が例えば食べ過ぎ、甘い物の取りすぎなど他に考えられるものも多いことに気づき、どういう風に表現すればいいかを考えるいい機会となった。



また、下痢など日頃口にしない言葉もジェスチャーを交えて楽しく会話できたことで、生徒の中に言葉がしっかりと定着したのではないかと考える。

## 5 課題

基本本文の練習は、スムーズにできたが、症状の単語全てを言うまでには、いたらなかった。この種の会話の重要性を考えると、繰り返し復習し、いざというときに役立てて欲しいとかがえる。

また、教科書本文を学習してから、ワークシートに取り組んだので、生徒から出た意欲的な意見を次の活動に時間内に取り入れることができなかった。授業プランに無理があったと反省している。

## 6 終わりに

今回の授業では、症状や原因を英語でどう表現するのかについて興味深く考えることができた。既習の英語で表現できることがたくさんあることにも気づくことができた。一年生の授業も後わずか。知っている単語や文型を駆使して、コミュニケーション力を高めさせる手立てをさらに深めていきたい。



# 仲間と助け合いながら確かな学力をつけていく

## －「みんなで分かるようになる」授業づくりを通して－

原田 恵利

### 1 はじめに

本校の本年度の現職教育のテーマは 「確かな学力の定着をめざした『響き合い 高め合う 学び』を～『みんなで分かるようになる』授業づくりを通して～」である。それを踏まえ英語科では「仲間と助け合いながら確かな学力をつけていく」というテーマを設定し、「表現力のある生徒・確かな学力のある生徒」の育成を目指している。日々の授業の中で、人と関わる時間を大切にしながら着実に定着した学力をつけていく。そのための手だてを講じ、以下にその実践と成果を報告し、振り返っていきたい。

### 2 本年度の実践

#### (1) 音声単語シート

本年度も昨年度に引き続き、「音声単語シート」を活用している。昨年度は未習の英単語を予習するかたちで練習をしていたが、本年度は既習の英単語を復習するというかたちで練習している。本年度は、既に学習した単元の英単語を練習することで、「英単語→日本語」「日本語→英語」の変換作業が、よりスムーズに行われていると生徒の様子から感じる。また毎時間、この活動をするすることで必ず人と関わる時間を持つことができる。これによって自然と英語学習だけでなく、人にも関心を持てる生徒が多くなった。

#### (2) フォニックス指導

本年度から第1学年では「フォニックス」を導入した。毎時間わずかな時間ではあるがウォーミングアップとして取り入れてきた。継続的な指導をしたことで、一つ一つの文字がもつ音を知り、未習の英単語であっても、それがどんな発音になるのか、おおよその予想が立てられる生徒もいる。また、この活動中も積極的にペア活動を取り入れ、互いに助け合いながら学習することができた。



### 3 実践を通しての成果と課題

「音声単語シート」「フォニックス」のどちらも年間を通して継続的に指導を続けたことで、音と文字の結びつけがスムーズになってきた。また、これらの活動を行う際に積極的にペア活動を取り入れてきたことで、生徒にとって英語の授業は「人との関わり」が当たり前となった。その結果、「相手(仲間)」の存在を感じ、教師の力では上手くいかないことも、生徒同士で解決していける場面が増えた。しかしながら、教室内の「人間関係」は良好であっても本当にこの活動が学力をつけるものであったかという疑問も残る。来年度以降、これらの活動がより効果的で「確かな学力」の定着へと繋がるものになるように今後も研究を続けたい。

#### 4 公開授業

これまでの実践を含め公開授業を行った。以下その成果と課題を記す。

響き合い 高め合う場面		ペアで体の不調を訴える会話文を考えていく場面。
1	単元名	Unit 11 Speaking Plus 4 保健室での会話 ～体の不調を訴える～
2	本時の目標	1 相手に英語で体の不調を訴える表現を理解し、話すことができる。 2 仲間と積極的に関わりながら、ジェスチャーを交え表情豊かに会話することができる。
3	学習過程	学習活動 or 発問の流れ
10分	全	①音声単語シート・フォニックスを行う。
8分	全	②基本表現を全体で練習する。“What’s wrong?” “I have a / the ～.”
8分	全→ペア	③本時で使用するワークシートを全体→ペアで確認する。(音読・意味)
14分	全→ペア	④ペアで体の不調を訴える会話文を考え、発表できるように練習をする。
5分	グ	⑤グループでお互いに発表しあう。
5分	個	⑥授業のふりかえりをする。

#### 5 成果と課題

本単元では「相手に英語で身体の不調を訴える表現を理解し、話すことができる。」を目標とし、ペアで会話文を作成した。導入部分での基本文の確認では、小学校ですでに同じ内容に触れてきた生徒もあり、比較的スムーズに進めることができた。日頃から授業中に人と関わることに慣れているので、クラス内の簡単なコミュニケーション活動やペア活動も問題なく行えた。しかし、どうしてもこれらの活動が難しい生徒への支援が不十分な部分もあり、③④の過程で上手く活動できなかったペアもあった。終盤のグループで互いの会話文を発表しあう場面でも、先ほどのペアは上手く活動できておらず配慮が足りなかったと感じる。さらに本時では「What’s wrong ?」と尋ね「I have a \_\_\_\_\_。」と答えることができれば目標達成であるのだが、発表を付け加えたことでどちらが大切なかが曖昧になってしまった。生徒は教師が求めればそれにこたえようと努力するが、



1時間の中であまり欲張って求めすぎ

#### 6 終わりに

授業の中に「仲間」の存在を感じている学級は自然と学ぶ姿勢が前向きになる。本年度の実践を通して、教室内に「安心感」があるということは、生徒・教師互いにとって大変よい環境だと感じた。また生徒らが一人ではなく仲間とともに助け合う環境づくりを大切にすることは、学力の向上につながるのではないかと感じている。今後も教師と生徒の縦の繋がりでなく、それに加えて生徒と生徒の横の繋がりを大切にしたい授業を目指し授業研究をしていきたい。

## ペア活動、班活動の実践一分かる、深まる、定着を目指して

林本 侑加子

響き合い 高め合う場面		既習の文法を使って英語クイズ作り、仲間に出題したり、仲間の作ったクイズをよく聞いて、答えを考える場面。
1 単元名		Unit 5 Electronic Dictionaries - For or Against -
2 本時の目標		①班員と仲良く活動することができる。(クラス替え初めての授業のため) ②英語クイズを作り、出題したり、仲間の作ったクイズに答えることができる。
3 学習過程		学 習 活 動 or 「 発 問 の 流 れ 」
5分	グ	①音声単語シートに取り組む。 ②教師の出す英語クイズに班対抗で挑戦する。 ③新出単語の発音練習と意味を確認する。 ④教科書の本文から英語クイズに使えるようなフレーズを使って英語クイズを作る。 ⑤口頭で英語クイズを出題し、答えを考える。 ⑥授業のふりかえりをする。
10分	グ	
8分	全	
8分	個	
10分	全	
3分	個	

### 1 生徒の姿

3年生は、学級や班の交流も深まり、温かい雰囲気の中で授業をすることができる。しかし、交流や学び合いでは、「どうしてこの答えになるのか」を説明できるのに、一人で問題に取り組むと分からなくなってしまったり、自信がなくなってしまうということがある。これは、授業中に理解した内容を、定着につなげる点で工夫が必要だと考える。受験も控えた、大切な時期になった生徒たちの勉強の仕方に注目し、ノートの作り方、問題集の使い方を伝授し、生徒の理解に効率的に繋がるようにアドバイスをしていきたい。

### 2 実践

#### (1) 音声単語シート、教科書音読でのウォーミングアップ

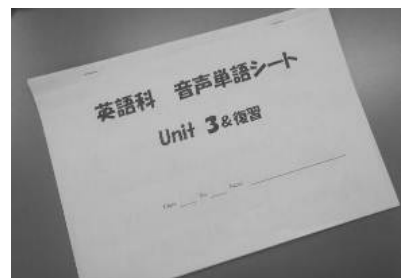
授業の始めに、英語の授業に向かわせるために発音活動をしている。ペアで活動することで、雰囲気作りにもなる。

音声単語シートは、学習時期のUnitに合わせた新出単語を中心に、音読は、既習の教科書の内容を、片言でなく、すらすらと文の意味を理解しながら読めるように指導する。

#### (2) Reading for CommunicationでのQ&A活動

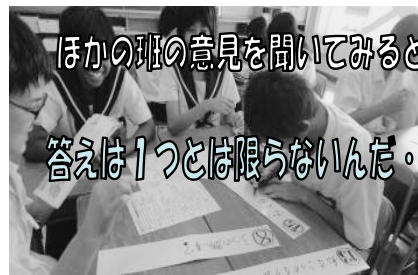
Q&A (英問英答) の問題でどうしてその答えになるのかを考え、その理由も共有する。

全体交流では班で考えたことを発表する。





誰が当たってもいいように交流タイム♪



ほかの班の意見を聞いてみると！  
答えは1つとは限らないんだ。。。

### (3) Challenge! 長文を自分の言葉でまとめ、仲間と交流し、まとめる活動

まずは自分ひとりで長文の要約をし、クラスの仲間と考えを共有したり、足りなかった部分を共有する活動を行った。理解が遅い生徒も参加できるように、箇条書き、テーマとなる単語やキーワードでもよいとし、仲間と交流して内容がつかめるようにするよう促した。

### (4) ペア活動の工夫一定着をめざして

問題を出す先生、答える生徒、とスモールティーチャーの役割をペアで交代し、活動をする。

#### ①現在完了（継続）の文法の定着

for、since の使い分けを定着させるため、「ten years」「last year」などのカードを差し出し、現在完了の文を言えるようにする。

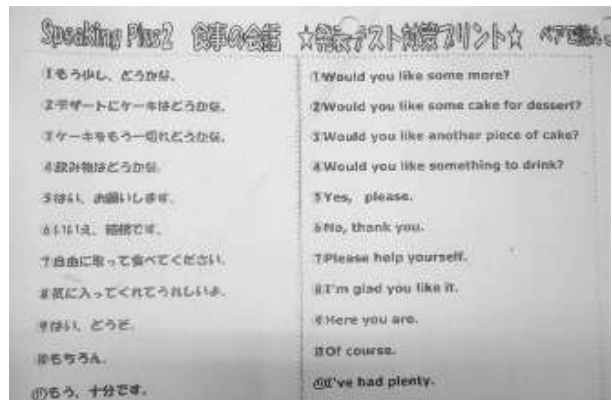
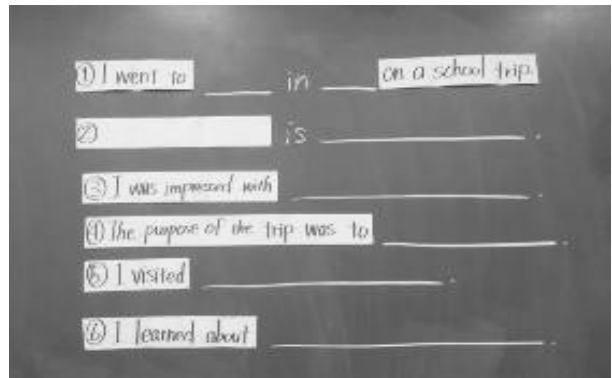
for、since をうまく言えたら右のワークシートに○を言えなかったら×を書きこみ、スコアを競う。

最後に、お互い、コメントを書き、相手の間違ってしまったところを教えてあげたり、褒め合ったりする。

#### ②Speaking plus・Multi plus での覚えさせたいフレーズの定着

覚えさせたい文法や、前置詞の使い方、「I'd love to.」「Would you like to.」等の様なフレーズを発表や、自己の文で書く表現するだけでなく、確実に定期テストや、入試で問題を解くことができるようにフレーズを何回も音読し、ペアで日本語→英語が言えるように活動をする。

スモールティーチャー役は生徒役のペアの子が完璧に覚えられるようにする目的を持ち、相手に合わせて、アレンジを加えたり、ヒントを与えながら出題する。生徒役は覚えられないことを聞きながら、理解を深めていく。始めは2分程度とり、それぞれのスモールティーチャーに生徒役の状況を聞きながら練習時間を増やしていく。



### 3 成果

- ・①の実践では、授業のはじめに声を出し、ペアで生徒同士のかかわりを持たすことで、頭を英語の授業の準備をして授業での、班活動、コミュニケーション活動につなげている。
- ・②の実践では、発表の場面では個人の発表ではなく「班での答え、班での説明」と強調し、班で必ず共有をして納得させるよう仕向けた。そのため、わかる生徒は伝える、わからない生徒はしっかりと意見を聞く活動を班でかため、よく理解をしてから全体交流に持ち込めた。
- ・③の実践では自分ひとりでは分からなかったところ、不確かだった点が仲間の力を借りて分かってくる、深めることができた。ペアで行うことで自然と全員参加ができることができた。  
また、活動のあとの評価やテストを意識させることで活動が活発になった。ペアの子に合わせて問題を出題したり、ヒントを出すなど、温かく交流ができた。

### 4 課題

定着につながる学習指導の時間を授業中に確保できるようにしてきた。

家に帰って、復習をするときに、定着がされることが大切である。セミナーや、自学がやつつけ仕事になってしまっていることを指摘し、効率的に学習が進めば意欲が増すはずである。大切な時期の生徒たちに、目標を持たせ、学習への姿勢を整えていきたい。ノートや問題集をこまめに回収し、指導をしていきたい。

また、個人的には授業規律の守らせ方の工夫をしていきたい。ひとりひとりの授業での様子を見逃さないように、声かけや、指導が不十分な時がある。授業規律に関する実践を学んでいきたい。

# 仲間と助け合いながら確かな学力をつけていく英語科の学び

佐藤 あゆり

## 1 目指す生徒の姿

現在の元気な雰囲気や、積極的に声を出す雰囲気に加えて、全員が授業に参加しようとする主体的な生徒を目指したい。いつも同じ子が声を出すのではなく、消極的な子もグループの中で声を出したり、いつも答えを教えてもらっていた子が、解き方を教えてもらうようになり、独りで進めている子が困っている子に積極的に声をかけたりと、全員が主体的に授業に参加しようとする生徒を目指す。こうした仲間との関わりや学びあいから、分かることの喜びを感じ、さらに英語への関心を高められるようにしたい。

## 2 手だて

全員が主体的に授業に参加するために、問題や課題があるときにはまず、個で考える時間を十分に確保し自分の考え、意見をもたせる。その後、ペアでの活動に移し、お互いの答えや意見比べ、教えあったり意見交換をする。グループでなかなか声を出せない子も、ここで発言が出来るようにしている。その後、必要があればグループになり、さらに多くに意見と自分の意見を比べて発言できるようにする。この流れによって確実に全員が自分の答えを持ち、分からない生徒もペアで確認してからグループ活動に取り組むことで、疎外感や遅れを感じず、全員参加で学びあうことが出来るのではないかと考えている。

## 3 実践例

### ①子ども主体の授業づくり

問題や課題に取り組む際には、個で考える時間を十分にとる。自分の考え、意見をもった後にペアで確認をし、グループで話し合う。答えが分からない時は、教師に聞くのではなく、ペアやグループで助け合うよう指示する。発表の際にはどうしてそう導けるのか、説明をしながら発表するように指示する。

### ②授業の雰囲気づくり

仲間と助け合える雰囲気を作るため、作業は独りで取り組まず、出来た子は悩んでいる子に解き方を教えて助けてあげるように、出来ない子は積極的に声を出すように声をかける。答え合わせの際には、たとえ間違えてもマイナスにとらえず、どこが間違えやすいポイントだったのかを全員に問いかけ、協力し合える雰囲気を作る。

### ③話し合い

グループ活動では、一人ひとりが自分の意見を持ち寄って話し合う場にする。5人グループの中で声を出しているのが2、3人だけという状況にならないよう声をかけつつ、発表は誰がやってもしっかりと説明できるよう全員が理解するよう指導する。

### ④音声単語シート、動詞の変化表読み、教科書音読

授業の始めにはウォーミングアップとして、全員が声を出す活動を行う。基本をペアで行っている。

この活動は、英語の授業の雰囲気を作るだけではなく、英語が得意の子も苦手な子も同じように参加できる活動であり、特に学力の低い生徒にとって、授業の中で参加することが難しくても、ここで自分が参加できていると実感させられるような活動を目的としている。

(1) 単元 Unit7 Speaking Plus - 買い物

(2) 本時の目標

買い物をするときの表現をクラス全員が使えるようになるろう

(3) 学習指導過程

響き合い 高め合う場面	ペアでの音読活動を通して重要表現を身につける場面
1 単元名	Unit 7 Speaking Plus 4 - 買い物 -
2 本時の目標	1 ペア活動を通して基本表現を使いこなすことができる。 2 役になりきって音読をし、買い物をするときの重要表現を身につけることができる。
3 学習過程	学 習 活 動 or 「 発 問 の 流 れ 」
10分 ペ→個	①不規則動詞変化表テストに取り組む
3分 全	②本文を聞いてどんな場面か想像する
5分 個→ペ	③重要表現の書き換えをしてペアで覚えるまで何度も音読する
5分 全	④買い物で使えるそのほかの表現を知る
10分 全	⑤本文内容に取り組む
15分 ペ	⑥役になりきって音読をする
2分 個	⑦ふりかえりカードを記入する

(4) 本時のふりかえり

この実践ではまず導入として興味を持たせるために、最初の板書は”○○をするときの表現を学ぼう”とだけ書いておいて、本文の聞き取りをさせた。キーワードとなる会話を探しながら聞いていると多くのメモを残したり、本文のほとんどを聞き取れる生徒もいて、ペアの子と見比べて想像できたりと、聞き取りで本時のテーマを想像させるのも効果的だと分かった。

本文を音読させる場面では、ペアで役になりきって練習するように伝えたところ、丁寧に店員の役を読んだり、工夫して音読をする生徒の姿が見られた。

反省点としては、暗唱での発表をすることができなかったことがあげられる。ペアでの発表を班内で発表し、評価しあうことはできたものの、全体の前で発表する場を設けたほうがより、気持ちをこめたり、暗唱しようと努力することができたのではないかと思う。少人数であることを生かし、全員参加の授業ができるようさらに授業を磨いていきたい。



# みんなが参加できる授業づくりを目指して

小酒井 優

## 1 はじめに

1年生で学ぶUnit 11の単位では、過去にしたことについて英語で説明できたり、たずねたり、またそれを答えたりすることができるようにしていく。過去形を用いた文の形・意味・用法を理解し表現できるようにすることが目標である。過去形の文のつくりの基本的な部分は、既習内容の一般動詞の現在形の文や3人称単数の文とあまり変わらないので、子どもたちが難しく考えてしまわないように指導していく。

## 2 現在のこどもの姿

今回授業を行ってきた1～4組の子どもたちは、理解度にとっても個人差がある。また、英語に対して積極的な子もいれば、消極的な子もあり、興味関心についての差が大きい。

## 3 授業づくりの視点

- ①生徒の参加度は100%に近い授業であったか。
- ②授業で扱った教具やプリント等は思考・表現を高める授業の仕掛けとして適切であったか。

## 4 学習課程・学習活動

a.b:英語で挨拶をする。

→英語を勉強する雰囲気づくりをする。

a.b:音声単語シート（英語のウォーミングアップ教材）に取り組む。

→1分間で単語がどれだけ言えるか挑戦することで英語が苦手な子でも授業に参加することができる。

a:基本文の文のつくりを知る。

→新しい文法なのでいねいに、わかりやすく、間違えやすいところも伝え、自分で文を作れるようにする。

a:基本練習をする。

→指定の単語を使って、対話をし、新しい文法を使った文に慣れる。

a:日本文から英文をつくる練習をする。

→基礎的な問題を終えた後、応用問題も行い、英語が苦手な子も得意な子も満足できるようにする。

b:新出語句の確認をする。

→生徒が自分で発音できるように、教師の後に続いて発音させるだけでなく、自分たちで発音させる。

b:教科書の本文の読みを教師の後に続いて4回ずつ練習する。

→1・2回目は教科書を見ながら、3回目は教科書を見ずに、4回目は日本語訳から英語に直して音読し、英文をスムーズに言えるようにする。

b:20秒又は30秒で本文を読ませる。

→早く読もうと必死になり、一生懸命音読に取り組むことができる。

b:ペアで役割分担し、本文の読みを行う。

→交流することで楽しくお互いを高め合う。

b:もう一度教師の後に続いて教科書を読む。

→スムーズに読めるようになったかの最終確認と達成感を味わわせる。

a.b:ふりかえりカードを記入し、回収する。

→今回の授業で得たこと、がんばったこと、新たに発見したことなどを書かせる。

a.b:次回の確認

→次回の布石をうち、期待を持たせる。

※Aは grammar を学習する授業、Bは speaking を学習する授業。

## 5 成果と課題

### (1) 成果

- ・新出語句をランダムに発音させることで、積極的に声を出して練習できるようになった。
- ・全体への発問を増やすことによって生徒が積極的に答えるようになった。

### (2) 課題

- ・全体への指導と個への指導をうまく使い分け、英語が得意な子をさらに伸ばし、苦手な子を標準まで持って行けるようにしていきたい。
- ・限られた時間の中で、子供たちの興味関心を引きつけ、おさえない内容をしっかりと子供の頭の中に残せるような授業展開にしていきたい。そのために、念入りに教材研究をしたり、他の先生の授業を見せてもらったりして、たくさんの授業の展開方法を身につけていきたい。

## 6 考察

スピーキングの練習をする時間を充分にとれるようにしていきたい。教科書の内容だけでなく、自分自身のことを既習の英語を使って言えるようにする練習を取り入れ、使える英語に触れさせる機会を設けたい。また、日本語から英作文を作ることを苦手としている子が多いので、その練習も毎回取り入れていけたらよいと思う。

### 第3学年 英語科ふりかえりカード

3年 組 番 名前

Unit 3 Fair Trade Chocolate

	学 習 内 容
Starting Out	現在完了形（経験） 「～したことがありますか」という表現を学習しよう。
Dialog	現在完了形（完了） 「～し終わったところです」という表現を学習しよう。
Reading for communication	ティムが呼びかけている内容を理解しよう。 少女の生活がどのように変わったかを理解しよう。
Listening Plus 3	英語耳をつくろう。（社会の授業の内容を聞き取る）
Speaking Plus 1	誘ったり提案できるようになろう。 Would you like to ~?
Multi Plus 2	首都圏総合学習の思い出を書こう。
Challenge	長文読解にチャレンジ！ 世界の友達の遊びについて知ろう。
Speaking Plus2	ものをすすめられるようになろう。 Would you like ~?
Let's Read 1	物語を読んで内容を読み取ろう。

#### Unit 3 重要単語・30問テスト予定単語

heard	hearの過去分詞	hear of ~	～の話を耳にする	produce	～を生産する
fair	公正な	just	たった今	low	低い
trade	貿易	coffee	コーヒー	price	価格、値段
chocolate	チョコレート	nut	木の实、ナッツ	earn	かせく
ever	(疑問文で) これまで、いつか	already	すでに、もう	solve	～を解決する
newspaper	新聞	product	製品、生産物	choice	選択
seen	seeの過去分詞	check	～を調べる、チェックする	right	権利
program	番組、プログラム	yet	(疑問文で) もう (否定文で) まだ～ない	have never been to ~	～に行かずに済む
mark	印、マーク	more than	～より多い	make ~from~	～から～を作る
never	一度も～ない いまだ～ない	left	leaveの過去分詞	thanks to ~	～のおかげで

月日	仲間の頑張っていた姿・仲間のすばらしかった発言や姿	印





# 實踐論文

# 「響き合い高め合う学び」の構築

## －主体的にかかわり、自らの考えを伝え合える生徒の育成を通して－

大野 佑樹

### 1 主題設定の理由

#### (1) 確かな学力の定着に必要な言語活動の充実

21世紀は、新しい知識・情報・技術が政治・経済・文化をはじめ社会のあらゆる領域での活動の基盤として飛躍的に重要性を増す、いわゆる「知識基盤社会」の時代であると言われている。このような時代においては、「生きる力」の理念がますます重要になる。現行の学習指導要領では、「生きる力」の理念を継承するとともに、「生きる力」を支える確かな学力、豊かな心、健やかな体の調和の取れた育成が重視されている。つまり、「生きる力」を育成することで、社会生活を営むための知識とともに、一人一人が個性を發揮し、困難な場面や新たな課題に出会っても、それを解決し乗り越えていくような、未来を切り拓いていく力が身につくというわけである。

「生きる力」を知の側面から捉えたものが、確かな学力である。確かな学力は、基礎的・基本的な知識・技能、知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力、学習意欲の3つでとらえられている。「知識基盤社会」の中で、様々な問題に積極的に対応し、解決する力を身につけさせるには、これらの確かな学力を定着させることが必要である。

確かな学力の定着のためには、基礎的・基本的な知識及び技能の活用を図る学習活動を重視するとともに、生徒の言語活動を充実することがあげられている。中でも、互いの考えを伝え合い、自らの考えや集団の考えを発展させることがとりわけ重要であると考えた。こうした視点で、これまでに本校が取り組んできたことをふりかえり、より良い学びを構築することを目指す。

#### (2) 学校の実態

本校がある犬山市では、「学びの学校づくり」を合言葉とし、「自ら学ぶ力を身につけた子ども」を、目指す子ども像に設定している。自ら学ぶ力を身につけた子どもは、基礎的な学力を身につけ、家族や友達を大事にし、地域を支え、自分の人生を大切にするという考え方に基づいている。つまり、確かな学力を定着させることで、犬山市の目指す子ども像に迫ることができると考えられている。

このような犬山市の教育方針に基づいて行っている、本校の現職教育では、平成23年度から、協同学習を基盤にすえ、響き合い高め合う学びをテーマに研究を進めてきた。学びにおける「響き合う」とは、授業における主体的なかわりを通して個の思いや考えが表現され、伝え合うことでクラス全体に広がり、さらにもう一度個の考えに影響を及ぼして考えを深めることと考える。こうした響き合いの中で、互いに良い影響を与え合い、高め合うことができる学びの実現を目指してきた。昨年度のふりかえりからは、生徒が人、もの、ことと主体的にかかわることができたことや教師や仲間の意見をしっかりと聴くことができたという成果が見られた一方で、話すという面で、他の意見につなげて発言したり、話し合いを通して高め合ったりという段階までには達していないということが反省点としてあげられた。

響き合い高め合う学びの構築を通して目指していることは、まさに今日、社会において求められている言語活動の充実であり、確かな学力を定着させることである。そこで、本校のこれまでの現職教育の反省を踏まえ、『響き合い高め合う学び』の構築～主体的にかかわり、自らの考えを伝え合える生徒の育成を通して～を本研究主題として設定した。

## 2 研究の仮説と手だて

本主題に迫るため、以下のように仮説と手だてを設定した。

仮説(1) 教師が学びの三本柱を踏まえた、研究・実践を進めれば、主体的にかかわり、自らの考えを伝え合える生徒の育成につながり、響き合い高め合う学びが生み出せるだろう。

### (1) 仮説(1)に対する手だて

#### 1) 1人1回以上の授業公開

本校では、人・もの・ことと「かかわる」こと、人とかかわりながら、「高め合う」こと、自己をみつめ「ふりかえる」ことを学びの三本柱と設定し、共に学ぶ学びの集団づくりを目指している。生徒が人・もの・ことに主体的にかかわり、自らの考えを伝え合えるようになるためには、これらの学びの三本柱が踏まえられた研究・実践が必要である。とりわけ、生徒が授業の中で自分の考えを練り上げ、意見交流するためには、課題の工夫や活動の場の設定が重要である。生徒が黙々と意見づくりに取り組んだり、活発に意見交流したりする姿が見られる授業を、教師が教科や学年の枠を越えて互いに見合うことで、生徒の響き合い、高め合う姿を引き出すことにつながる授業実践のヒントが得られると考えた。

#### 2) 研衷タイムと全校交流会

本校では、総合的な学習の時間を「研衷タイム」を呼んでいる。次の3点をねらいとして、研衷タイムを進めている。

- ①自分自身で問題を見つけ、自ら学び、考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決しようとする力や態度を身につける。
- ②学び方やものの考え方を身につけ、問題の解決や追究活動に主体的・創造的に取り組む態度を身につける。
- ③追究活動を通して、自分の生き方や社会のあり方を考えることができるようにする。

研衷タイムでは、生徒自らが課題を設定して調べ学習を進めるとともに、体験学習当日の課題追究活動で様々な方々とかかわって課題を追究するという特色がある。個人の課題を追究することはもちろんのこと、夢や目標をもって活躍をされる方々とかかわることで、その方々の生き方を学び、自らの生き方を考えるきっかけとなっている。さらに、12月に行われる全校交流会の際には、各学年で取り組んできたことを、すべての生徒がまとめ、学年の代表者が互いに発表し合う。研衷タイムにおける活動と全校交流会は、学びの三本柱につながる実践であり、これらの活動を充実させることで、主体的にかかわり、自らの考えを伝え合える生徒の育成につながり、響き合い高め合う学びに迫れると考える。

仮説(2) 生徒が目標を設定して授業に臨み、授業をふりかえる活動を充実すれば、生徒の主体的な姿を引き出すことができ、響き合い高め合う学びにつながるだろう。

### (2) 仮説(2)に対する手だて

#### 書記会（生徒主体の学びの取組）と授業改善交流週間

生徒の主体的なかかわりなくして響き合いや高め合いは生まれない。そこで、学級書記生徒を学びのリーダーとし、全校書記会・学年書記会を組織した。書記生徒を中心として「目標→授業→ふりかえり」の活動を繰り返す。このように全校生徒が同じ目的をもって学習を進めていくことで、生徒主体の授業展開が可能になるだろう。生徒主体の学びを積み重ねることで、響き合い、高め合う学びに迫れると考える。



### 3 研究の計画と方法

月	段階	現職教育	書記会
4月	STEP 1 (PLAN)	研究主題・内容の周知徹底	学びのゴール設定
5月		教科テーマと教科別各論作成	
6月	STEP 2 (DO&SEE)	理論をもとにした実践	授業改善交流週間①
7月		授業改善交流週間① 要請訪問①	
8月		夏の研修会	
9月			前期学びのふりかえり
10月		授業改善交流週間②	授業改善交流週間②
11月		要請訪問②	
12月		犬山市授業改善交流会	
1月		授業改善交流週間③ 要請訪問③	授業改善交流週間③
2月	STEP 3 (CHECK&ACT)	実践の検証とまとめ	後期学びのふりかえり 次年度へ向けての目標づくり
3月		現職教育交流会 研究紀要の作成	

### 4 研究の実際と考察

#### (1) 1人1回以上の授業公開

仮説(1)に対する1つ目の手だてとして、1人1回以上の授業公開を行うことをあげた。授業公開を通して、互いに高め合う教師集団を目指すために、次の3点に取り組み、互いにより良い授業公開をし合い、学び合えるようにした。

##### 1) 教科部会と学び部会

まず、現職教育で、教科部会と学び部会を設定した。本書 p.9 に掲げた現職教育のグランドデザインを示した。

教科部会では、現職教育総論を踏まえ、教科研究テーマや教科として目指す生徒像を盛り込んだ教科各論を作成する。次にあげるのは、社会科部会の教科研究テーマと目指す生徒像である。

教科部会では、教科の目指す生徒像に向けて、どのような授業を行っていくか、どのように評価を取り、その後の授業へどう活かしていくかなどの計画・実践を中心に進める。

##### 資料1：社会科の研究テーマと目指す生徒像

テーマ：コミュニケーション能力を活かす社会科の学び

生徒像：社会的事象に関心を持ち、主体的にかかわり続ける生徒

考えを伝え合い、自分の意見と仲間の意見を比較し、共に高め合う生徒

課題の解決への道筋を見つけ、次の課題の学びの方向づけができる生徒

一方、学び部会は、学年ごとにつくられる部会である。年度当初には、各学年で目指す生徒像を設定する。例えば、1年学び部会では、目指す生徒像を「意見を出し合い、聴き合う生徒」と設定している。学び部会では、目指す生徒像に向けて各教科の実践の報告や交流を中心に進める。

これらの部会を研究の両輪とし、議論と交流を深めることで、個々の授業が学びの三本柱を踏まえた研究・実践に練り上げられる。

## 2) 授業改善交流週間

2点目は、授業改善交流週間である。現職教育のテーマに迫るための授業改善を行うために、年に3回の授業改善交流週間を設定した。この期間は、各教科で確実に身に付けさせたい力を再確認し、単元構成のあり方を工夫するなど、自らの授業に対する教材研究を深める期間である。各授業改善交流週間の終盤には、



写真1：授業公開の様子

要請訪問を設定し、中京大学の杉江修治先生に各学年1名の研究授業を参観してもらう。要請訪問で行う研究授業を考える際には教科部会と学び部会で話し合い、各教科の研究テーマや目指す生徒像に迫れる授業になっているかを様々な視点から検討する。また、杉江先生からは、外から見た本校の取組について専門的な立場から指導をいただくようにしている。

研究授業を実践しない教師も、この授業改善交流週間を中心に、年に1回以上、授業を公開する。その際には、指導案ライト版を作成し、大きな負担を伴わず、気軽に公開できるようにしている。公開された授業は互いに参観し合い、響き合い高め合いの見られる授業の在り方について考えるきっかけとしている。

## 3) フレッシュセミナー

響き合い高め合う学びを実現するためには、自ら学ぶ教師の姿が不可欠である。継続して研究に取り組んでいけるものの、教師の人事異動や若手教師の増加などの課題もある。特に、若手教師はより良い授業を構築するための手だてが十分でなかったり、指導技術を十分身に付けていなかったりする機会が多い。そこで、校内の若手教師のために、先輩教師が「フレッシュセミナー」と呼ぶ学習会を企画した。先輩教師の授業を見るだけでなく、直接先輩教師の口から様々な工夫を聞くことで、より良い授業を構築していくためのヒントが得られる。フレッシュセミナーで学んだことを活かして授業を公開したり、フレッシュセミナーで学んだことによって、授業を参観する際の新たな視点を獲得したりする若手教師もいる。全教師が響き合い高め合う学びを進めることを共通理解し、教師が自ら学ぶこと、教師同士が共に学ぶことを大切にしている。

## 4) 考察

こうした取組により、平成24年度の学校評価アンケートに変容が見られた。授業に関する項目で、教師の評価が昨年度と比べてすべて上昇している点である。特に注目すべき点は、「生徒が意欲をもって取り組み、力がつく授業づくりに向けて授業研究や指導の工夫を試みているか？」の質問である。「とても思う」、「思う」と答えた教師が増加し「あまり思わない」と答えた教師が減少している。「思わない」と答えた教師はいなかった。教師の授業に対する意識の高まりが見られるようになったことを表している。

## (2) 研衷タイムと全校交流会

仮説(1)に対する2つ目の手だてとして、研衷タイムと全校交流会をあげた。研衷タイムのねらいの達

成に向けて、1年生では「郷土学習」、2年生では「木曾総合学習」、「職業体験学習」、3年生では「首都圏総合学習」と学習を展開する。ここでは、2年生の職業体験学習における取組を取り上げる。

2年生では、地域の方々の協力を得て、実際に働くことを体験することにより、働くことの意義や苦勞を知ること、また、さまざまな人の知識や経験、生き様を学び・感じるなかで、自分の進路や生き方について、広い視野に立って考え・選択することができるようにすることの2点をねらいとして職業体験学習を行っている。研衷タイムでは、この職業体験学習に向けての事前学習と全校交流会に向けた事後のまとめを行う。

### 1) 社会人としてのマナー講座

職業体験学習と社会人を囲む会の前に、社会人として必要な心構えや守らなければならないことなどを学ぶために、社会人としてのマナー講座を行った。ホテルで働く方々に講師として来ていただき、各学級毎に体験を交えながら社会人としてのマナーを教えていただいた。講座終了後の生徒たちの感想からは、夢に向かって努力すること、あいさつの大切さや信頼される人になることの重要性を学んだ様子が見られた。日頃の生活からもっとあいさつを大事にしよう和实践にうつす生徒も見られた。

### 2) 社会人を囲む会

職業体験の前には、社会人を囲む会を行った。9つの職業分野から、実社会で活躍される方々を講師に招き、仕事の内容や実態などを話していただいた。講師の方々のお話を聞くことを通して、社会人として必要なことや身に付けておくべきことを学ぶとともに、その生き方にふれることでより良い生き方を考えるきっかけにしたいと考えた。会を終えて、生徒たちは、仕事にやりがいをもつ重要性について考え、自らの夢を見つめ直すことにつながった様子であった。



資料2：社会人を囲む会講師

元野球選手	三沢 淳様	落語家	司馬龍鳳様
シェフ	長谷川和彦様	ホテルマン	佐藤 充様
美容師	長谷川 豊様	服飾	忠内満博様
歌手	児玉たまみ様	看護師	水野恵理子様
航空会社	長谷川美喜様		

### 3) 職業体験学習

職業体験学習は、次のような手順で行った。

I 事前訪問（生徒があいさつ状、事前学習内容を持参し、各事業所を訪問）

II 職業体験（2日間の職業体験を行う）

職業体験は、より生徒の興味・関心に沿った体験ができるようにするために、また、より少人数で緊張感をもった体験にするために、事業所を増やし、市内を中心に64箇所の事業所で体験をさせてもらっ



写真3：職業体験学習

た。生徒たちは、2日間の体験を通して、あいさつや礼儀の大切さ、掃除の大事さ、働くことの厳しさを実感するとともに、人とのつながりの大切さを知ることができた。

#### 4) 全校交流会

こうした各学年の取組を発表し合うのが、全校交流会である。全校交流会に向けての流れは、次の通りである。

- ①各学年で取り組んできたことを、個人でまとめる。
- ②まとめたものを、各学年で発表し合い、優秀者と最優秀者を決定する。
- ③全校交流会の日に、優秀者は指定された教室で発表する。最優秀者は体育館で発表する。発表者以外の生徒は、希望調査がとられて各教室に割り振られ、発表を聞く。

この全校交流会では、生徒は学年関係なく、興味を抱いたテーマについて代表生徒の発表を聞くことになる。生徒は、自分がまとめた内容に関連する発表に興味をもつことが多い。代表生徒の発表を聞くことで、その内容についてより深く学ぶことができるとともに、発表方法のより良い点を今後の自分の発表に活かすことができる。また、学年を越えた意見交流も生み出される。

#### 5) 考察

次に示したものは、全校交流会を終えた後の生徒の感想である。

生徒A：私は、同じ1年生や2・3年生の先輩の発表を聞いて、世界が広がった気がしました。今までは、自分の身近なことについて知ったりしていたけど、過去や世界に目を向けた発表をして、すごいなあと感じました。これから機会があれば、様々な観点から物事を見つめていきたいと思いました。

生徒B：全校交流会を終えて、何にしても人と人のかかわり合いが大切なんだと思いました。世界の事や、人の関係など、全部人のかかわり合いが必要だと、改めて全校交流会を通して気付かされた気がします。私も仲間を大切にするなど、これからも人間関係を大切にしていきます。

生徒Aの感想からは、これまでに人やものと「かかわり」を通して学んできたことを、仲間の発表と比較しながら「ふりかえり」、仲間の発表からさらなる学びを得ている様子が見られる。また、生徒Bの感想からは、「かかわる」ことの大切さを実感し、今後の自己の生き方に活かしていこうとする姿が見られる。生徒の感想から分かるように、研衷タイムの取組と全校交流会は、学びの三本柱を踏まえた実践となっており、これらの活動を通して、生徒は主体的にかかわる大切さを学び、自らの考えを伝え合うことで高め合うことができるようになっていけると言える。

### (3) 書記会（生徒主体の学びの取組）と授業改善交流週間

仮説(2)に対する手だてとして、書記会と授業改善交流週間書記会の取組をあげた。

#### 1) 学びのゴール

全校生徒が同じ目的をもち、学習を主体的に進めることで、生徒主体の授業をつくり出すことをねらいとして、各学級2名の学級書記の生

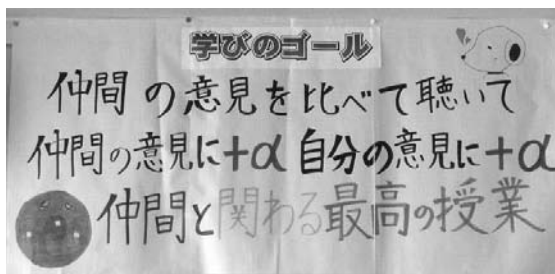


写真4：学びのゴール

徒を学びのリーダーとし、書記会を組織した。日々の授業をリードしふりかえりを行うこと、授業改善交流週間の運営とふりかえりを行うこと、学びのアンケートを行い集約することが主な活動内容である。

書記会を中心として、まず年度当初に各学年で、1年間の学びの目標である「学びのゴール」を設定する。この「学びのゴール」は、個々の生徒の目標であり、学級集団や学年集団が共に目指すべき目標でもある。この「学びのゴール」を明確にすることが、生徒主体の授業を展開するための出発点であり、仲間とともに育つという協同学習の出発点にもなる。「学びのゴール」に対する意識を高めるために、各学級前面に1年間掲示される。「学びのゴール」を設定する際には全校で書記会を行うことで、各学年の取組を互いに知り合い、1年→2年→3年と段階的に高まる目標の設定を可能にしている。次の資料4は、本年度設定された学びのゴールである。

2) 授業改善交流週間

資料4 学びのゴール

3年	届けよう自分の意見 つなげよう発言のボタン 一人一人が日々進歩 3年間の集大成！！
2年	仲間の意見を比べて聴いて 仲間の意見に+α 自分の意見に+α 仲間と関わる最高の授業
1年	「授業に集中」 ～話す時には伝える気持ち、聴く時には耳を傾け、反応できる授業を創る～

次に、この「学びのゴール」の達成に向けて、年に3回の授業改善交流週間を活用した。この期間に生徒は、各学級で書記生徒を中心に、「学びのゴール」の達成に向けた短期目標と評価基準を設定する。下の資料5は、短期目標と評価基準の一例である。毎時間の授業で、短期目標の達成を目指す取組を教科担任に4点満点で評価してもらう。いわば、自分たちの授業に対

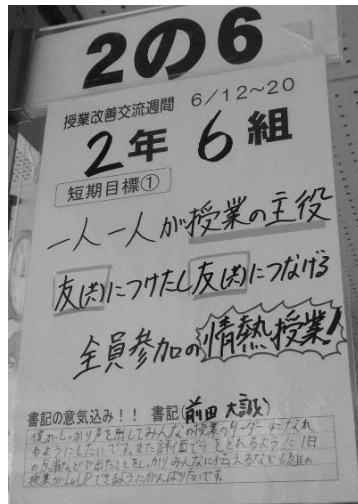


写真5：短期目標

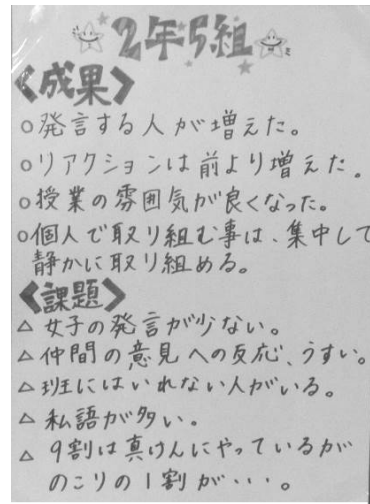


写真6：授業改善交流週間のふりかえり

する取組を、教師に公開しているわけである。帰りのST時には、書記生徒が1日の評価点の平均を示し、各学級で1日の授業をふりかえる。期間中のこの平均点の推移が、生徒の意欲化につながっている。翌日の朝のST時には、書記生徒が前日のふりかえりをもとに授業の意識付けを行う。授業改善交流週間後には、目標や目標に向けての学級の取組をふりかえり、今後の授業へ活かすようにしている。この授業改善交流週間における一連の活動によって、生徒は授業への参加意欲を高め、学級の雰囲気をもよほ

ものにするために互いに支え合おうとする姿を見せている。

資料5：短期目標と評価基準

<p>3年</p> <p>短期目標：タイムリミットは7日間 つなげ！発言のバトン 40人全員参加の授業にせよ</p> <p>評価基準：発言した人が、他の人につなぐことができる。 7割以上の人が反応することができる。</p>
<p>2年</p> <p>短期目標：一人一人が授業の主役 友（共）に付け足し、友（共）につなげる 全員参加の情熱授業</p> <p>評価基準：友達の意見にプラスしたり、つなげたりして深める！</p>
<p>1年</p> <p>短期目標：1人の意見を大切に、全員が反応・発言をする楽しい授業をつくろう</p> <p>評価基準：1人の意見に対して反応・発言をし、次につなげる。また、その意見にみんなの考えた事を加え、よりよいものにつくりあげる。</p>

3) 学びのふりかえり

これらの取組の評価として、半年に1度「学びのふりかえり」を全校で行っている。生徒に半年間の学びをふりかえらせることを通して、できていることとできていないことをはっきりさせ、次の半年間の学びの目標づくりに役立たせるためである。

4) 考察

書記会でやっている学びのふりかえりからは、資料6のような結果が得られている。

かかわることに関しては、「よくできた」と「できた」を選択した生徒の人数の合計は、前期も後期も大きく変わっていない。しかし、「できた」を選択していた生徒が減り、「よくできた」を選択した生徒が増えていることが分かる。半年間の取組により、かかわることを意識して学習してきたことへの自信の表れである。伝え合うことに関しては、「あまりできなかった」を選択した生徒が減り、「できた」を選択した生徒が増えている。伝え合うことを意識した学習ができるようになったと言える。今後、さらに充実した学習になるように、自分ができることや学級として取り組めることを文章表記で回答してもらったものの中には、「授業をつくる一員という意識をもつ」こと、「みんなで高め合う」ことなどをあげる生徒も見られた。これらの学びのふりかえりの結果からは、書記会の取組により、生徒の主体的な学びが定着しつつあり、学びを我が事としてとらえられるようになってきたことが分かる。

資料6 学びのふりかえり

質 問 項 目	1	2	3	4
以前よりかかわることを意識して学習できたか（前期）	126	281	44	3
以前よりかかわることを意識して学習できたか（後期）	142	263	39	6
以前より伝え合うことを意識して学習できたか（前期）	88	266	94	6
以前より伝え合うことを意識して学習できたか（後期）	89	291	64	6

1→よくできた 2→できた 3→あまりできなかった 4→不十分

## 5 研究の成果と課題

### (1) 研究の成果

本研究の成果として、次の2点をあげることができる。

①「響き合い高め合う」授業構築のための教師の意識の向上

仮説(1)に対しては、1人1回以上の授業公開と研衷タイムと全校交流会の取組を充実させた。教師が授業公開

をする際に作成する指導案には、「響き合い高め合う場面」を記述する欄を設けた。全

教師が、響き合い高め合う場面を工夫して指導案を作成し、授業を公開することにより、公開授業以外の授業や授業を参観する際にも、響き合い高め合う授業づくりを意識することにつながった。とりわけ、授業改善交流週間に行われる要請訪問の際に、学び部会で研究授業の検討をする場面では、響き合い高め合う場面設定とその手だてについて話し合う点に多くの時

間を費やした。一方、研衷タイムと全校交流会に向けての取組は、学年単位で進められる場合が多い。学び部会で響き合い高め合う場面について話し合っている教師集団が、共に協力して研衷タイムの準備を進めるわけである。これらの一連の取組により、学校評価アンケートに見られる教師の意識の向上を生み出し、生徒の感想に見られる、学びの三本柱を意識した研衷タイムや全校交流会を生み出したと言える。響き合い高め合う授業構築のための教師の意識の向上を、本研究の成果の1つとしてあげることができる。

②温かい人間関係のもとの主体的な学び

仮説(2)に対しては、書記会を中心に「学びのゴール」を設定し、その達成に向けた授業改善交流週間の活動を充実させた。個人の目標だけでなく、学級集団や学年集団の目標として「学びのゴール」を設定したことは、学級の仲間のために努力し、支え合い、高め合える学びの集団づくりのための人間関係を築くことにつながった。また、そうした姿を仲間や教師から評価されることで、生徒は共に学ぶことの良さを感じている。これらの温かい人間関係が、学びのふりかえりに見られるような生徒の主体的な学びを生み出したと言える。さらに、教師と生徒が一体となって授業改善に取り組むことで、教師と生徒のより良い人間関係も育まれ、この取組が成功したポイントになっている。

本校では、卒業を控えた3年生が、学校の前を流れる木曽川で机といすを洗うという伝統行事がある。その際に、生徒たちは次のようなことを口々に述べる。

「3年間、お世話になった仲間たちや先生方と学校に感謝の気持ちをもって洗います。」

授業を通して、生徒同士、生徒と教師の温かなふれあいの中で、響き合い高め合う学びにつながる主体的な学びが実現し、生徒に豊かな人間性を育むことができている1つの姿と言える。

### (2) 研究の課題

一方、本研究を通して、基礎・基本の定着が十分でないことが課題として明らかとなった。生徒と保

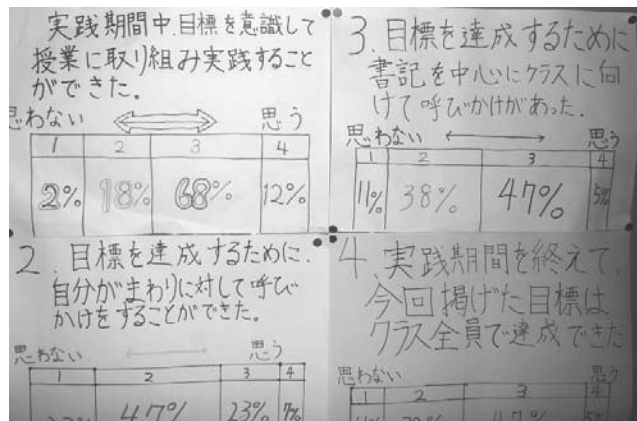


写真7 学びの振り返り

護者の学校評価アンケートによると、授業に関する項目では、教師の評価ほど高くない。教師からも、響き合い高め合う形にこだわり過ぎ、基礎・基本の定着が若干あまく、学習を十分には高め深め合うことができなかつたという反省も出されている。授業の様子が十分家庭に伝わっていないことも考えられるが、響き合い高め合う学びの質をさらに向上させ、基礎・基本の確実な定着を図る必要がある。

この課題を活かし、本年度は、『確かな学力の定着をめざした「響き合い高め合う学び」の構築～「みんなで分かるようになる」授業づくりを通して～』とテーマを小変更した。そして、新たに「みんなで分かるようになる」授業づくり十七か条を作成し、基礎・基本の確実な定着とともに、響き合い高め合う学びの実現を目指している。



# 事象を数理的に考察し表現する能力を高める指導の工夫

## 一中2 単元「一次関数」の授業を通して－

金原 佑介

### 1 主題設定の理由

国際数学・理科教育調査(TIMSS)や国際学習到達度調査(PISA)の調査から、3つの課題が明らかとなった。1つ目は、基礎的・基本的な計算技能の定着や数量・図形などの基本的な意味の理解を確実にすること、2つ目は、数学的に解釈する力や表現する力の育成を目指した指導を充実すること、3つ目は、実生活と関連付けた指導の充実を図り、数学について有用性を実感する機会を持たせることである。全国学力・学習状況調査からは、記述式の問題や知識・技能を活用する問題の正答率が低いことがわかる。このような状況から、基礎基本の定着や自分の考えを相手に伝える能力が必要である。

一方、近年インターネットや携帯電話、スマートフォンなどの普及により、コミュニケーションの手段が多様化してきた。実生活の中で気の合う限られた集団の中でコミュニケーションをとる傾向がある一方で、インターネットを介して見知らぬ相手と顔を合わせずに、コミュニケーションをとる子が増えてきている。インターネットを通じたコミュニケーションが普及していく中で、実生活を通しての人間関係作りが苦手な子どもたちが増えてきている。

今回の学習指導要領では、数学科の目標が次のように示された。

「数学的活動を通して、数量や図形などに関する基礎的な概念や原理・法則についての理解を深め、数学的な表現や処理の仕方を習得し、事象を数理的に考察し表現する能力を高めるとともに、数学的活動の楽しさや数学のよさを実感し、それらを活用して考えたり表現したりする態度を育てる」以前は「事象を数理的に考察する能力を高める」とされていたのが、今回の学習指導要領では、「事象を数理的に考察し表現する能力を高める」となり、「表現する」が新たに付け加えられた。

今回改正された学習指導要領で、新しく4領域に関数に加わった。今までは数量の関係の中に位置づけられていた関数が4領域に入ったということは、中学校数学での関数の指導がより重視された結果である。これまでに、関数の指導は様々な研究がなされ、指導の体系・流れが学習指導要領の改訂ごとに変わってきている。しかし、これだけ内容の変更や改訂を繰り返しても、現在もなお、生徒が関数を苦手としているように感じる。どのような指導を行っていけば生徒がより関数の内容を理解することができるのかを考えていく必要があると思った。

関数は、数学の世界はもとより、現実の世界において事象の中に見いだした伴って変わる二つの数量の関係をとらえる場面でも有効に機能する。関数関係をとらえるために表、式、グラフが用いられる。これらの数学的な表現を用いて処理したり、相互に関連付けて考察したりすることで、現実の世界における数量の関係を数学の世界で考察することができる。こういった技能こそが、これから生きていく子どもたちには必要だと考え、本主題を設定することにした。

### 2 研究仮説

- ①関数の学習において、身近な事象を数理的に考察する学習課題の設定をすれば、事象を数理的に考察する能力を高めることになるだろう。
- ②相手に自分の意見を伝え合う学習形態を工夫すれば、事象を数理的に表現する能力を高めることになるだろう

### 3 研究の手立て

#### (1) 表・式・グラフの活用

##### ①表・式・グラフの特徴

表・式・グラフの特徴が理解できるような授業実践を行う。

##### ②表・式・グラフを相互に関連

表・式・グラフを単独のものと考えてのではなく、相互に関連づけるような授業を行う。

#### (2) 個人で追究する場・グループで追究する場の設定

##### ①個人追究の時間の持ち方

1つの課題を考えさせる場面で個人追究の時間を長めにとり、グループ学習の時間に入る前に個人の意見をしっかり持たせる。

##### ②グループ学習での机の配置の工夫

グループ学習での机の配置を工夫し、話し合いが活発に行える机の配置にする。

③グループ学習での話し合いを活発にするために、グループ全員で協力して課題に取り組むことができる方法を取り入れる。

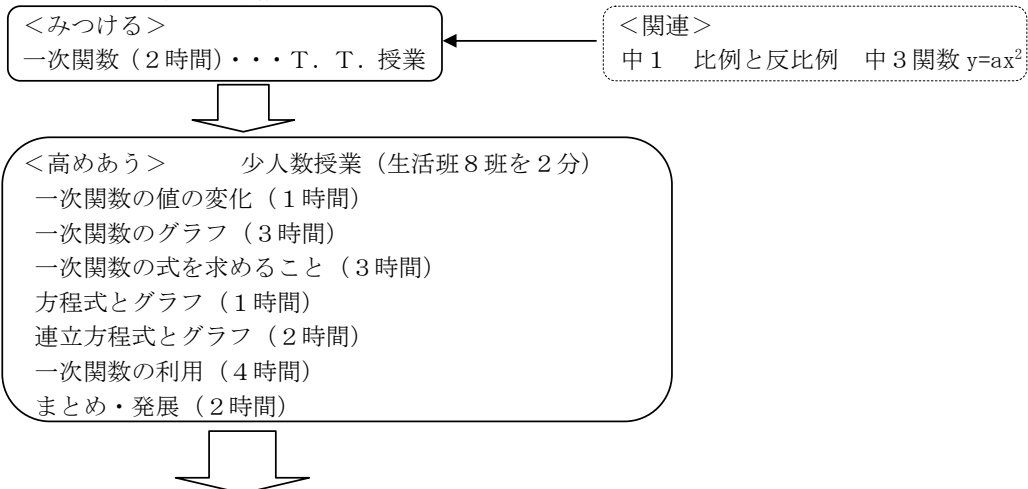
### 4 一次関数の単元について

#### (1) 単元名 一次関数

#### (2) 単元の指導計画

関数については小学校でも、表やグラフについて学習してきており、中学校では式の有用性を中心に、第1学年では、比例や反比例の基本的な学習を行っている。第2学年では、さらにそれを発展させ、具体的な事象の中から関数関係を見い出し、一次関数を利用して問題を解決したり、表・式・グラフなどに表すことにより、ともなって変わる2つの量の変化の様子をより深くとらえることを学習する。また、二元一次方程式  $ax+by=c$  を2つの変数  $x$  と  $y$  の関数関係を表す式とみなし、方程式と関数が統合的に理解され、さらに連立方程式や二次関数への理解へと発展させていきたい。

#### (3) 単元計画 (20時間)



<ふりかえる>

単元テスト（1時間）・・・一斉  
希望コース別授業（1時間）・・・コース別

<関連>

高校 二次関数・三角関数

#### (4) 単元目標

- ①一次関数の意味を理解し、身のまわりの事象の中から、一次関数とみられるものを見つけることができる。
- ②一次関数の特徴を理解し、グラフをかいたり、直線の式を求めたりすることができる。
- ③一次関数のグラフと二元一次方程式のグラフとの関係や連立方程式の解とグラフの関係を明らかにすることができる。
- ④具体的な事象を一次関数と見なし、それを問題解決に利用することができる。

### 5 研究の実際

#### (1) 表・式・グラフの活用

##### 1) 表・式・グラフの特徴(授業実践①)





###### ア 本時の目標

- ①具体的な事象からともなって変わる2つの数量を見だし、その2つの数量の関係を表や式を使って調べることができる。
- ②一次関数の意味を理解することができる。

###### イ 本時の学習について

本時は一次関数の導入の授業である。第1学年で行った関数についての振り返りをしながら、一次関数の意味について学習する。具体的な事象の中から、ともなって変わる2つの数量に着目して、変化の様子を読み取る。現実世界の事象を表や式などを使うことによって関数関係でとらえる数学的に事象を考察していく。

###### ウ 本時の学習過程 全20時間(1、2時間目)

生徒の活動・反応	留意点
<p style="text-align: center;">前学年の復習をする</p> <p>ともなって変わる2つの数量 <math>x</math>, <math>y</math> があつて <math>x</math> の値を決めると、それに対応して <math>y</math> の値がただ1つに決まる時、<math>y</math> は <math>x</math> の関数であるという。</p> <p style="text-align: center;">一次関数の意味を説明することができるようになる</p> <p>1辺の長さが1cmの正方形を階段状に積んでいく。このとき段数が増えるにつれて変化するものをあげなさい。</p> <p><b>課題①</b></p> <div style="display: flex; justify-content: center; align-items: center;"> <div style="text-align: center; margin-right: 20px;">  1段         </div> <div style="text-align: center; margin-right: 20px;">  2段         </div> <div style="text-align: center; margin-right: 20px;">  3段         </div> <div style="text-align: center;">  ...         </div> </div> <p>段数が変わるとそれに伴ってどんな数量が変化するかあげてみよう。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・1年生の時に学習した変化と対応の学習内容を振り返り本時につなげる。</li> <li>・変化する量と変化しない量に着目させる。</li> <li>・変化の様子を調べるために、表を活用させる。</li> </ul>

課題②

課題①であげたものの表を完成させて、変化の様子を調べてみよう。

x(段)	1	2	3	4	5	6	7
y(cm)	4	8	12	16	20	24	28

- ・ x の値が 1 増えると、y の値は 4 ずつ増えている。
- ・ x の値が 2 倍、3 倍、・・・になると、y の値も 2 倍、3 倍、・・・となる。(比例)
- ・ y は x の関数である。
- ・  $y = 4x$  で表せる。(比例)
- ・  $y \div x = 4$  で一定になる。(比例)

x(段)	1	2	3	4	5	6	7
y(個)	4	6	8	10	12	14	16

- ・ x の値が 1 増えると、y の値は 2 ずつ増えている。
- ・ 比例ではない。
- ・  $y = 2x + 2$  で表せる。

一次関数の定義をまとめる。

y が x の関数で、

$y = 2x + 2$  や  $y = 4x$  のように y が x の一次式で表れるとき y は x の一次関数であるという。

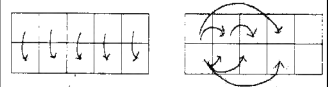
課題③ 100 段目のときの頂点の数を求めよう。

$$\begin{aligned}
 y &= 2x + 2 \text{ に } x = 100 \text{ を代入する} \\
 y &= 2 \times 100 + 2 \\
 &= 200 + 2 \\
 &= 202 \qquad \qquad \qquad \mathbf{202 \text{ 個}}
 \end{aligned}$$

本時の振り返りをする

- ・ 表から読み取れることをたくさんあげさせる。
- ・ 表をたての見方(対応)と横の見方(変化)を思い出させる。

変化の様子を描き取る置数ポイント(縦)横の見方をたてて  
 たての見方(対応)式 横の見方(変化)



- ・ 比例となるものについては、なぜ比例になるのかの根拠を表や式から考えさせる。
- ・ 1 年生のときに学習した比例は一次関数であり、反比例は一次関数ではないことを確認する。

- ・ 表で求めるには、時間がかかるが、式で求めるとすぐに求められることに気づかせる。

- ・ 表・式の特徴をもとに振り返りをするよう助言する。

エ 考察

一次関数の導入で行った授業では、ともなって変わる 2 つの数量について表を使って考察をした。表のたての見方と横の見方を使って、2 つの数量の関係や変化を上手く捉えることができていた生徒が多かった。表をたてに見ることによって式に表したことで式に表す良さについて考えさせた。式で表すと段数が大きな数字をとっても求めることができることに気づく生徒も多くいた。同じ問題において表と式を使うことでそれぞれの利点や欠点に気づく生徒もいた。

段数	1	2	3	4	5	6	7
わかる長さ	4	8	12	16	20	24	28

↑4 ↑4 ↑4 ↑4

比例  
2倍して2倍して

x	1	2	3	4	5	6	7
y	4	6	8	10	12	14	16

$$y = 2x + 2$$

生徒のワークシート

2) 表・式・グラフの特徴(授業実践②)

ア 単元名 一次関数

イ 本時の目標

- ①変化の割合の意味を、表・グラフ・式から理解することができる。
- ②変化の割合を求めることができる。

ウ 本時の学習について

一次関数の値の変化を調べるには、表をもとにして考察させ、表・グラフ・式及び具体的な事象の中での意味と結びつけることで、生徒の理解をより確かなものに行うことができる。つまり、単に変化の割合の定義から計算の仕方を形式的に指導するのではなく、表をもとに変化の様子を調べさせ、xの増加量、yの増加量、変化の割合の意味を考え、表・グラフ・式と関連付けて指導していきたい。また、一次関数の変化の割合は一定になることに気づかせて、このことからグラフが直線になることを理解させて、反比例では変化の割合が一定にならないので、直線にはならず、曲線を描くことを理解させていきたい。

エ 本時の学習過程 全20時間(3時間目)

生徒の活動・反応	留意点																																							
前時の振り返りをする。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・一次関数についての振り返りをする。</li> <li>・xの値が1増加したときのyの増加量を考えさせる。</li> <li>・一次関数(<math>y = ax + b</math>)ではxの値が1増加したときのyの増加する量はaに等しくなることに気づかせる。</li> </ul>																																							
一次関数の変化の様子を調べよう。																																								
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;"> <b>課題①</b>  <math>y = 3x</math> と <math>y = 3x + 2</math> の表を完成させ、2つの表から気づいたことをみつけよう。                     </div> <div style="margin-bottom: 10px;"> <math>y = 3x</math> <table border="1" style="margin: 5px auto; border-collapse: collapse; text-align: center;"> <tr><td>x</td><td>...</td><td>-3</td><td>-2</td><td>-1</td><td>0</td><td>1</td><td>2</td><td>3</td><td>...</td></tr> <tr><td>y</td><td>...</td><td>-9</td><td>-6</td><td>-3</td><td>0</td><td>3</td><td>6</td><td>9</td><td>...</td></tr> </table> </div> <div style="margin-bottom: 10px;"> <math>y = 3x + 2</math> <table border="1" style="margin: 5px auto; border-collapse: collapse; text-align: center;"> <tr><td>x</td><td>...</td><td>-3</td><td>-2</td><td>-1</td><td>0</td><td>1</td><td>2</td><td>3</td><td>...</td></tr> <tr><td>y</td><td>...</td><td>-7</td><td>-4</td><td>-1</td><td>2</td><td>5</td><td>8</td><td>11</td><td>...</td></tr> </table> </div> <ul style="list-style-type: none"> <li>・xの値が0のとき、比例ではyの値が0になったが、<math>y = 3x + 2</math> では <math>y = 0</math> ではない。</li> <li>・2つの表はどちらもxの値が1増加するとyの値</li> </ul>	x	...	-3	-2	-1	0	1	2	3	...	y	...	-9	-6	-3	0	3	6	9	...	x	...	-3	-2	-1	0	1	2	3	...	y	...	-7	-4	-1	2	5	8	11	...
x	...	-3	-2	-1	0	1	2	3	...																															
y	...	-9	-6	-3	0	3	6	9	...																															
x	...	-3	-2	-1	0	1	2	3	...																															
y	...	-7	-4	-1	2	5	8	11	...																															
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;"> <b>課題②</b>                      下の2つの表は一次関数である。ア～ウに当てはまる値を求めよう。                 </div> <table border="1" style="margin: 5px auto; border-collapse: collapse; text-align: center;"> <tr> <td>x</td><td>...</td><td>-3</td><td>-2</td><td>-1</td><td>0</td><td>1</td><td>2</td><td>...</td><td>5</td><td>...</td> <td>x</td><td>0</td><td>...</td><td>2</td><td>3</td><td>...</td><td>5</td><td>...</td> </tr> <tr> <td>y</td><td>...</td><td>-3</td><td>-1</td><td>1</td><td>3</td><td>5</td><td>7</td><td>...</td><td>7</td><td>...</td> <td>y</td><td>7</td><td>...</td><td>13</td><td>17</td><td>...</td><td>27</td><td>...</td> </tr> </table>	x	...	-3	-2	-1	0	1	2	...	5	...	x	0	...	2	3	...	5	...	y	...	-3	-1	1	3	5	7	...	7	...	y	7	...	13	17	...	27	...	<ul style="list-style-type: none"> <li>・一次関数であることから、xの値が1増加したときのyの値がa増加することを利用して解かせる。</li> <li>・xの増加量、yの増加量、変化の割合の語句の説明、変化の割合の</li> </ul>	
x	...	-3	-2	-1	0	1	2	...	5	...	x	0	...	2	3	...	5	...																						
y	...	-3	-1	1	3	5	7	...	7	...	y	7	...	13	17	...	27	...																						
<p>ア xの値が1増加するとyの値は2ずつ増加し、xは2から5まで3増えているのでyは6(=2×3)増える。</p>																																								

$$\begin{aligned} \text{ア} &= 7 + 6 \\ &= 13 \end{aligned}$$

yの増加量

xの増加量

イ xの値が2(=2-0)増えたとき、yの値が6(=13-7)増えているので、xの値が1増えたとき、yの値は3(=6÷2)増える。

$$\begin{aligned} \text{イ} &= 13 + 3 \\ &= 16 \end{aligned}$$

変化の割合=yの増加量÷xの増加量

ウ xは3から5まで2増えているので yは6(=3×2)増える。

$$\begin{aligned} \text{ウ} &= 16 + 6 \\ &= 22 \end{aligned}$$

課題③

$y = 3x + 5$  で次の場合の y の増加量をそれぞれ求めなさい。

- (1) x の増加量が 1 のとき
- (2) x の増加量が 3 のとき

(1) 変化の割合は x が 1 増えたときの y の増加量なので、 $y = ax + b$  の a に一致する。

よって 3

(2) y の増加量 = 変化の割合 × x の増加量

$$= 3 \times 3$$

$$= \underline{9}$$

課題④

$y = \frac{6}{x}$  で x の値が次のように変わるときの変化の割合を求めなさい。

- (1) 2 から 3
- (2) -1 から -3

$$\begin{aligned} \text{(1) 変化の割合} &= \frac{2-3}{3-2} \\ &= -1 \end{aligned}$$

$$\begin{aligned} \text{(2) 変化の割合} &= \frac{-2-(-6)}{-3-(-1)} \\ &= -2 \end{aligned}$$

求めかたを課題②の解き方に沿って説明する。

・変化の割合は x が 1 増えたときの y の増加量であり、一次関数では、a の値に等しくなることを確認する。

・語句の意味を考えさせながら問題を解かせる。

・変化の割合を求める公式を上手く使いながら解かせる。

・一次関数では変化の割合は一定であったが、反比例では変化の割合は一定にならないことを確認し、比例と反比例のグラフを思い出させることで、次時に行うグラフにつなげる。

オ 考察

変化の割合の授業では、変化の割合を形式的に指導するのではなく、表を横に見ることによって一次関数の変化の様子を調べることによって変化の割合を指導した。また、一次関数の変化の割合のあとに反比例について学習をすると、変化の割合が一定にならないことに気づき、変化の割合が一定になるときに、一定にならないときの違いを尋ねるとグラフの形を想起する生徒が数人いた。



生徒のワークシート②

(2) 表・式・グラフの活用 その2

1) 表・式・グラフを相互に関連

ア 単元名 一次関数

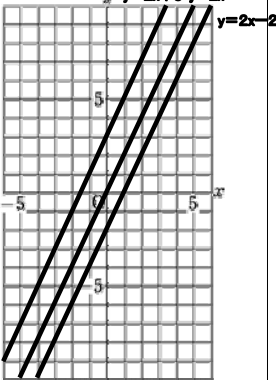
イ 本時の目標

傾きと切片の特徴を、表・グラフ・式から理解することができる。

ウ 本時の学習について

本時は傾きと切片について学習する。初めは一次関数についての表をかき、そこから点をプロットすることによって一次関数のグラフをかく。その活動の中で、一次関数のグラフの特徴を見つけ、グラフで表れる特徴が表や式ではどこに表されているのかを考えることによって、傾きと切片を表・グラフ・式を関連付けながら指導していきたい。

エ 本時の学習過程 全20時間(4時間目)

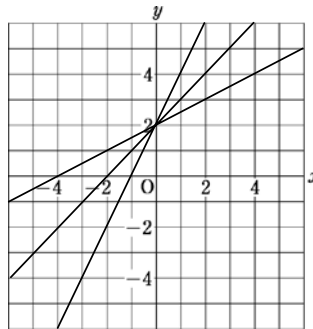
生徒の活動・反応	留意点																																																												
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center; margin-bottom: 10px;">                     前時の振り返りをする                 </div> <div style="border: 3px double black; padding: 5px; text-align: center; margin-bottom: 10px;">                     一次関数のグラフの特徴を理解しよう。                 </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p><b>課題①</b></p> <p><math>y = 2x</math> と <math>y = 2x + 3</math> の表を完成させ、グラフに点を取り、グラフをかこう。</p> <p><math>y = 2x</math></p> <table border="1" style="font-size: small;"> <tr><td>x</td><td>...</td><td>-3</td><td>-2</td><td>-1</td><td>0</td><td>1</td><td>2</td><td>3</td><td>...</td></tr> <tr><td>y</td><td>...</td><td>-6</td><td>-4</td><td>-2</td><td>0</td><td>2</td><td>4</td><td>6</td><td>...</td></tr> </table> <p><math>y = 2x + 3</math></p> <table border="1" style="font-size: small;"> <tr><td>x</td><td>...</td><td>-3</td><td>-2</td><td>-1</td><td>0</td><td>1</td><td>2</td><td>3</td><td>...</td></tr> <tr><td>y</td><td>...</td><td>-3</td><td>-1</td><td>1</td><td>3</td><td>5</td><td>7</td><td>9</td><td>...</td></tr> </table> <p><math>y = 2x - 2</math></p> <table border="1" style="font-size: small;"> <tr><td>x</td><td>...</td><td>-3</td><td>-2</td><td>-1</td><td>0</td><td>1</td><td>2</td><td>3</td><td>...</td></tr> <tr><td>y</td><td>...</td><td>-8</td><td>-6</td><td>-4</td><td>-2</td><td>0</td><td>2</td><td>4</td><td>...</td></tr> </table>  </div>	x	...	-3	-2	-1	0	1	2	3	...	y	...	-6	-4	-2	0	2	4	6	...	x	...	-3	-2	-1	0	1	2	3	...	y	...	-3	-1	1	3	5	7	9	...	x	...	-3	-2	-1	0	1	2	3	...	y	...	-8	-6	-4	-2	0	2	4	...	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 変化の割合を通して一次関数のグラフの概形を予想しながら本時に望むよう促す。</li> <li>・ 傾きを意識させるために点を順番にプロットするよう促す。</li> <li>・ 3本のグラフには名前をつけるよう指示する。</li> </ul>
x	...	-3	-2	-1	0	1	2	3	...																																																				
y	...	-6	-4	-2	0	2	4	6	...																																																				
x	...	-3	-2	-1	0	1	2	3	...																																																				
y	...	-3	-1	1	3	5	7	9	...																																																				
x	...	-3	-2	-1	0	1	2	3	...																																																				
y	...	-8	-6	-4	-2	0	2	4	...																																																				
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p><b>課題②</b></p> <p>グラフから気づいたことをたくさんあげよう。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ <math>y = 2x + 3</math> のグラフは <math>y = 2x</math> のグラフを <math>y</math> 軸方向に3だけ平行移動したグラフ。</li> <li>・ <math>y = 2x - 2</math> のグラフは <math>y = 2x</math> のグラフを <math>y</math> 軸方向に-2だけ平行移動したグラフ。</li> <li>・ <math>y = 2x + 3</math> と <math>y = 2x - 2</math> のグラフは原点を通っていない。</li> <li>・ どのグラフも <math>x</math> 軸方向に1進んで、<math>y</math> 軸方向に2進んだところに次の点をとることができる。</li> <li>・ どれも右上がりの直線のグラフになる。</li> </ul> </div>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 3本のグラフを比較しながら特徴を探そう指示する。</li> <li>・ 表・グラフ・式の関連性についても触れる。</li> </ul>																																																												

傾きと切片の語句について説明する。

課題③

左のグラフは、 $y = 2x + 2$   
と  $y = x + 2$  と  $y = \frac{1}{2}x + 2$  の  
3つのグラフです。

$y = ax + b$  の  $a$  に注目して  
3つのグラフから分かること  
をあげなさい。

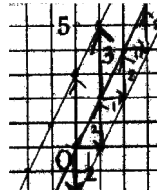


- ・ 傾きが大きければ急なグラフになり、小さければ、緩やかなグラフになる。
- ・ 傾きが大きければ y 軸に近づき、小さければ、x 軸に近づく。

- ・ 表・グラフ・式を関連させながら語句の意味を押さえる。
- ・ 傾きの値の違いによるグラフの特徴をおさえる。
- ・ 傾きが負の場合のときについても考えさせて、傾きが正のときと負のときの違いを確認する。

エ 考察

グラフをかく活動では、表をかいてから点をプロットする活動を通して、順番に点をプロットしていく中で傾きの性質である  $x$  が 1 増加したときの  $y$  の増加量を感覚的にイメージすることができていた。切片に関しても、表のどこに表れているかを尋ねるとすぐに答えが返ってきた。また、平行な 3 本の直線の離れた距離が表や式のどこに表れているかなどの相互関係についても、気づいたことに書いてある生徒が多かった。

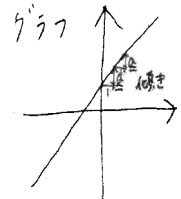


課題③  
 $y = 2x + 2$  と  $y = x + 2$  と  $y = \frac{1}{2}x + 2$  の 3つのグラフから分かることを書きなさい。  
・ 傾きが大きければ急なグラフになり、小さければ、緩やかなグラフになる。  
・ 傾きが大きければ y 軸に近づき、小さければ、x 軸に近づく。

式  $y = ax + b$  傾き

x	-3	-2	-1	0	1	2	3
y							

↑ ↑ ↑ ↑ ↑ ↑ ↑ ↑  
傾き



生徒のワークシート③

(3) 表・式・グラフの活用その3

1) 表・式・グラフを相互に関連

ア 単元名 一次関数

イ 本時の目標

携帯電話のプランを時間と料金に着目して、表・グラフ・式を使って調べることを通して、関数の特徴を考察し、説明することができる。

ウ 本時の学習について

本時は一次関数の利用の一時間目である。今まで学習してきた、表・グラフ・式の特徴を生かしながら、携帯電話のプランという身近な題材の中から、関数を見つけだし考察していく。3つのプランの中からどのプランが得なのかを考えさせ、説明させる活動を通して、表・グラフ・式



が相互に関連付けられるようにさせていきたい。

エ 本時の学習過程 全 20 時間(4 時間目)

生徒の活動・反応	留意点																																																																																								
<p>前時までの振り返りをする。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・表・グラフ・式の特徴をそれぞれ振り返る。</li> </ul>																																																																																								
<p>表・グラフ・式を使って携帯プランを説明することができる。</p>																																																																																									
<p>ゆうすけ君は携帯を買おうと思い、携帯会社に来ました。携帯のプランにはAプランとBプランとCプランがあり、どれにしようか悩んでいます。ゆうすけ君が分かりやすいように料金の仕組みを説明しよう!!</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・身近な問題を提示することで生徒の興味・関心をひく。</li> <li>・自分ならどのプランを選ぶかを自由に考えて、発表させながら、プランの仕組みを理解させる。</li> </ul>																																																																																								
<table border="1" style="margin: auto; border-collapse: collapse;"> <thead> <tr> <th></th> <th>基本料金</th> <th>一分ごとの通話料</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td><b>Aプラン</b></td> <td><b>3500円</b></td> <td><b>25円</b></td> </tr> <tr> <td><b>Bプラン</b></td> <td><b>2000円</b></td> <td><b>40円</b></td> </tr> <tr> <td><b>Cプラン</b></td> <td><b>8000円</b></td> <td><b>0円</b></td> </tr> </tbody> </table>			基本料金	一分ごとの通話料	<b>Aプラン</b>	<b>3500円</b>	<b>25円</b>	<b>Bプラン</b>	<b>2000円</b>	<b>40円</b>	<b>Cプラン</b>	<b>8000円</b>	<b>0円</b>																																																																												
	基本料金	一分ごとの通話料																																																																																							
<b>Aプラン</b>	<b>3500円</b>	<b>25円</b>																																																																																							
<b>Bプラン</b>	<b>2000円</b>	<b>40円</b>																																																																																							
<b>Cプラン</b>	<b>8000円</b>	<b>0円</b>																																																																																							
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ Aプランは基本料金が安く、通話時間が長いと得になりそう。</li> <li>・ Bプランは基本料金が安く、通話時間が短いと得になりそう。</li> <li>・ Cプランは基本料金が高いが、無制限で通話ができるから、通話時間が長いと得になりそう。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 既習事項を思い出させ、表・グラフ・式などを使って多様な方法で調べられることに気づかせる。</li> <li>・ 表・グラフ・式のうち、どれを使えばより分かりやすく説明することができるのかを考えさせる。</li> </ul>																																																																																								
<p>あなたが店員ならどのプランを勧めますか？それぞれのプランの特徴を調べてゆうすけ君に教えてあげよう。</p>																																																																																									
<table border="1" style="font-size: small; border-collapse: collapse;"> <thead> <tr> <th>時間</th> <th>0</th><th>10</th><th>20</th><th>30</th><th>40</th><th>50</th><th>60</th><th>70</th><th>80</th><th>90</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>Aプラン</td> <td>3530</td><td>3750</td><td>4000</td><td>4250</td><td>4500</td><td>4750</td><td>5000</td><td>5250</td><td>5500</td><td>5750</td> </tr> <tr> <td>Bプラン</td> <td>2000</td><td>2400</td><td>2800</td><td>3200</td><td>3600</td><td>4000</td><td>4400</td><td>4800</td><td>5200</td><td>5600</td> </tr> <tr> <td>Cプラン</td> <td>8000</td><td>8000</td><td>8000</td><td>8000</td><td>8000</td><td>8000</td><td>8000</td><td>8000</td><td>8000</td><td>8000</td> </tr> </tbody> </table> <table border="1" style="font-size: small; border-collapse: collapse;"> <thead> <tr> <th>時間</th> <th>100</th><th>110</th><th>120</th><th>130</th><th>140</th><th>150</th><th>160</th><th>170</th><th>180</th><th>190</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>Aプラン</td> <td>6000</td><td>6250</td><td>6500</td><td>6750</td><td>7000</td><td>7250</td><td>7500</td><td>7750</td><td>8000</td><td>8250</td> </tr> <tr> <td>Bプラン</td> <td>6000</td><td>6400</td><td>6800</td><td>7200</td><td>7600</td><td>8000</td><td>8400</td><td>8800</td><td>9200</td><td>9600</td> </tr> <tr> <td>Cプラン</td> <td>8000</td><td>8000</td><td>8000</td><td>8000</td><td>8000</td><td>8000</td><td>8000</td><td>8000</td><td>8000</td><td>8000</td> </tr> </tbody> </table> 	時間	0	10	20	30	40	50	60	70	80	90	Aプラン	3530	3750	4000	4250	4500	4750	5000	5250	5500	5750	Bプラン	2000	2400	2800	3200	3600	4000	4400	4800	5200	5600	Cプラン	8000	8000	8000	8000	8000	8000	8000	8000	8000	8000	時間	100	110	120	130	140	150	160	170	180	190	Aプラン	6000	6250	6500	6750	7000	7250	7500	7750	8000	8250	Bプラン	6000	6400	6800	7200	7600	8000	8400	8800	9200	9600	Cプラン	8000	8000	8000	8000	8000	8000	8000	8000	8000	8000	<p>x 分通話したときの料金を y 円とすると  Aプラン → <math>y = 25x + 3500 \dots \textcircled{1}</math>  Bプラン → <math>y = 40x + 2000 \dots \textcircled{2}</math>  Cプラン → <math>y = 8000 \dots \textcircled{3}</math>  120分話したとすると  Aプラン → 6500円  Bプラン → 6800円  Cプラン → 8000円  となるのでAプランがお得になる。</p>
時間	0	10	20	30	40	50	60	70	80	90																																																																															
Aプラン	3530	3750	4000	4250	4500	4750	5000	5250	5500	5750																																																																															
Bプラン	2000	2400	2800	3200	3600	4000	4400	4800	5200	5600																																																																															
Cプラン	8000	8000	8000	8000	8000	8000	8000	8000	8000	8000																																																																															
時間	100	110	120	130	140	150	160	170	180	190																																																																															
Aプラン	6000	6250	6500	6750	7000	7250	7500	7750	8000	8250																																																																															
Bプラン	6000	6400	6800	7200	7600	8000	8400	8800	9200	9600																																																																															
Cプラン	8000	8000	8000	8000	8000	8000	8000	8000	8000	8000																																																																															
<p>班で考えたことを基に発表をする。</p>																																																																																									
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 電話で話すのが苦手な方には、Aプランをおすすめします。100分以上話すという方には、Bプランをお勧めします。さらに、180分以上話しをし</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 発表の仕方を説明する。</li> </ul>																																																																																								

たいのであればCプランをお勧めしたいと思います。

**表・グラフ・式のそれぞれの良さについて考える。**

- ・グラフにすると視覚的に分かるからどのプランが一番お得かがすぐにわかる。
- ・表を使うと金額の変化が細かくわかるが、作るのが大変だった。
- ・式を立てられたら、料金が同じになるところがどこなのかすぐにわかるし、色んな値を計算で求めることができる。

本時の振り返りをする。

・表・グラフ・式のうち、どれか1つだけできればよいのではなく、関連付けて考えることが大切であることを押さえる。

・水道料金や電気料金も、携帯電話料金と同じように基本料金と使用量に応じて払うシステムになっていることを知らせ、一次関数が身のまわりに使われていることを実感させる。

**エ 考察**

携帯電話の料金を扱った一次関数の利用の導入では、今まで学習してきた、表・グラフ・式を活用して携帯電話のプランを説明するものだった。個人追究をさせたときに、ほとんどの生徒が表やグラフを使って考えをまとめていた。式でやっていた生徒はわずかであったので、全体で確認をしたときに、それぞれのやりかたについて考えさせた。表については、「金額の変化が細かくわかる」や「表は考えるのが簡単だけど、たくさん表を作るのは大変だった」という意見があった。グラフについては、「グラフをかくと変化の様子がわかりやすい」や「グラフをかくことで通話時間の違いによってどのプランがお得かを一目でわかることができる」という意見があった。式については、「式をたてると、代入すればいろんな値を計算で求めることができる」という意見があった。式に関しては、グラフの交点を分数にするとともに式の良さが実感できるのではないかと感じた。

**(4) 個人で追究する場・グループで追究する場の設定**

**1) 個人追究の時間の持ち方**

個人追究の時間の持ち方については、4月当初から考えていたことである。問題によって個人追究にかかる時間は変わってくる。そのため、初めは時間の指定をせずに授業での生徒の様子を見てその都度時間を決めていた。しかし、具体的に「何時まで考えよう」「10分間考えよう」な

どのように時間を区切って考えさせたほうが生徒たちの集中力が続くことに気づき、考える時間を明確にするようにした。

また、授業中にグループで活動する時間を増やしたところ、分からない問題に出会うと、自分でほとんど考えもしないで、隣の席の仲間やグループの仲間に頼ろうとする生徒が増えてきた。そのような生徒が増え、個人追究の時間とグループ追究の時間があいまいになってしまった。グ



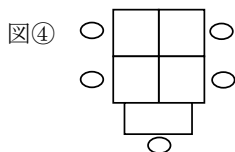
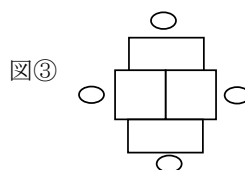
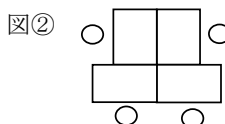
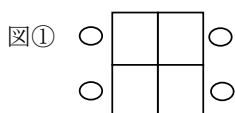
個人追求の様子

グループでの話し合いを活発にするためには、まず個人の意見をしっかり持たせることが大切である。そこで、グループで考える時間の前に、誰にも相談せず一定時間自分の考えで問題を解く時間を設定し、その後のグループ学習へつなげるための自分の考えをしっかりと持たせる時間を作った。

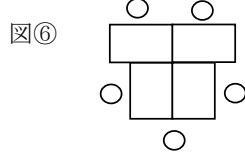
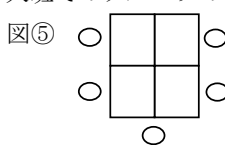
## 2) グループ学習での机の配置

数学の授業は、1班4人～5人である。話し合いを活発にするためには、頭を寄せ合うことが大切である。そのため、4人班、5人班で机の配置を工夫し、なるべく生徒同士が近い距離で学び合えるように配慮した。

グループ学習を始めた当初は、基本的に4人班は図①のような形で、5人班は図④のような形でグループ学習をしていた。しかし、特に5人班ではなかなか5人で話し合うことは難しかった。一人が孤立して4人になることや、2人と3人に別れて考えるグループが多かった。そのため机を4つにしてなるべく近い距離で話し合える配置を考えた。また、5人班の机の配置を考える中で4人班でも、もっと良い配置はないか考え6つのパターンを試した。



### 4人班でのグループの作り方



### 5人班でのグループの作り方

## 3) グループ学習での話し合いを活発にするための工夫

グループ学習をするために机の形を班の形にしても、なかなかグループで話し合うことができず、班の形のまま、個人で考えるグループもあった。

そこで、グループ学習での話し合いを活発にするために、班で学習プリントを1枚用意した。人数分の紙を用意するとどうしても個人で考えようとする生徒がいるからである。学習プリントを班で1枚にして、グループ全員で考えられるようにした。



グループ学習の様子

## 4) 考察

### ①個人追究の時間の持ち方

個人追究の時間は、その後のグループ学習で自分の意見を発表するために、とても大切な時間である。時間を区切ることにより、生徒は集中して問題に取り組む姿が見られた。また、手をつけられない生徒には机間支援をして、声かけをしたり、アドバイスしたりするように心がけた。その結果自分の考えを持つようとする生徒が増えてきた。



なことは、頭を寄せ合うことであると実感した。みんなで協力して考えられる課題を探し、みんなで考えられる工夫をすることでグループ学習を、より一層深めることができると感じた。また、グループ学習の場が自分の意見を発表する練習の場となり、自信をもって意見を発表できる生徒が増えてきた。

色々な実践をしながら、少しずつ仲間とかかわることが楽しいと感じる生徒が増えてきた。グループで考えることで、普段は諦めてしまうような問題でも最後まで考え抜くことができた。仲間の説明を受け問題を解くことで、解き方を教えてもらった生徒は問題を解けたという満足感を得ることができた。問題の解き方を教えた生徒も説明することで、自分の知識が整理され、より一層の理解を深めることができた。

その一方で、グループ学習をするとどうしても騒がしくなってしまうことがある。時間の長さ、グループ学習をする雰囲気、グループ学習をするに相応しい内容の精選などまだまだ考えなければならぬこともある。

今後も、生徒が仲間や教師とかかわりあっていける授業をつくっていききたい。教師が一方的に説明する授業ではなく、生徒同士がお互いにかかわりあいながら、生徒も教師も楽しめる数学の授業を作っていきたい。

# 夢のある学校創りを実現するリーダーの育成

－実行力を高め、先見力を磨くことを中心理念においた企画運営を通して－

東猿 弘晃

## 1. 研究のねらい

中学校では、小学校と比べて学習量が一気に増え、生活規範も求められるレベルが高まる。心の発達が急加速する時期とも重なり、学習段階も上がることで、生徒の重圧も相当なものであると考える。ある市の小中学校で実施されたアンケートを元に学習面について考えてみる。

- ①「次の教科は好きですか」という項目で、主要5科目は、小6→中1、中1→中2では5%以上上げ、数学にいたっては15%以上も上げていた。実技4教科は変化は大きく見られなかった。
- ②次の教科は将来のために大切だと思いますか という項目では、多くの科目で5%以上上げていた。

つまり中学生は、勉強に苦手意識をもち、将来への必要性を感じなくなる時期である。

生活面については、あいさつの大切さや朝食の重要性を理解している生徒は中学校3学年とも95%以上であったが、自分から実施しているかという項目に対しては、80%台にまで落ち込む。では、なぜ大切だとわかっていても自ら行わないのか。その原因の1つは、年齢が上がるにつれて、大人からその重要性を言われる機会が減ってきたことが挙げられる。アンケート結果でも70%の生徒しか直接言われていない。それは、成長期・反抗期の子どもとのすれ違いを極力減らしたいという大人の行動の表れだと考える。中学生にとっては、わかっていることを繰り返し言われたり、注意されたりすることは受け入れづらいものであり、できたとしても素直に喜べない時期であろう。では、生徒がどのようにしたら幸せを感じ、自ら進んで行動するようになるかを考える。

生徒の取り組む意欲を高めるために成長段階の把握やねらいを明確化するだけでなく、生徒の意志を反映した行事を企画することが大事だと考えた。今回はキーワードとして、「意欲」「熟考」「評価」の3点を挙げて論述していく。

## 2. 主題設定の理由

学校生活に充実感を感じ、行事に意欲的な生徒を育成したい。その充実感を与えることができるのは、教師だけでなく、生徒の中のリーダーであると考ええる。

充実感とは、他者受容と自己肯定の2つのことであり、先見力と実行力を磨くことで、より良い学校創りの基盤になると考える。さらには、高校生活、社会人としての生活、家庭生活で自分を支える大きな柱になる。

以上から学校生活に充実感を感じさせる行事に意欲的な生徒を育成したいと考えた。

## 3. 研究の仮説

行事の企画運営において、意欲・熟考・評価を活用し、先見力と実行力を磨くことで、より良い学校創りの基盤となるだろう

## 4. 研究の手だて

- (1)「企画は、自由な表現の世界」企画書・計画表の作成
- (2)「通信は、想いを届ける場」通信の作成
- (3)「アンケートは、分析・反省の材料、評価の場」アンケートの作成・分析

## 5. 研究の実際

犬山中学校には、秋の文化祭としてカルチャーフォーラムという名の行事がある。そこで2年生は、3年生の合唱リーダーたちから全校をリードする役割を引き継ぐ。引き継ぎ会で行われることは以下のことである。

- ①3年生リーダーが創り上げてきた楽譜や取り組んできた練習の計画表などを受け取る。

## ②合唱に対する想いを伝えてもらう。

この引き継ぎ会をもって、合唱をリードする役目は2年生に移るのである。その自覚をもつためにも、引き継ぎをはさんで、合唱練習を企画した。リーダーと一般生徒が自分たちで合唱を創り上げるという自覚をもつことができることが目標である。

### (1) 企画(実践1)の流れとねらい

#### ①合唱団結成→リーダーの成長につながる

合唱団員は、有志募集という形でなく、学級代表(男女1名)と合唱パートリーダー(ソプラノ1名、アルト1名、テノール1名、バス1名)36人に固定して構成した。初めての合唱企画ということもあり、リーダーで結成した方が意識が高く、リーダー自身の成長につながると考えた。

#### ②役割決定→一人一人に責任感をもたせる

団長2名のみ選出し、副団長は、自分の意志でリードする曲とパートを選ぶよう指示した。団長2名である理由は、男女ともリーダーとして育ててほしいという願いである。

曲は3曲で、パートは全部で10個になるので、責任感を生むため一人1つの担当曲をもたせた。

#### ③計画表の作成・指導ポイントの書いてある楽譜作成 →先を見て行動する力を磨く

「計画表」は、「当日までに活動可能な時間を使い、何の曲を練習し、何を気をつけて歌うかを記すもの」である。3曲あるので、計画表も3通り作成した。それぞれの計画表には、各パートのリーダーからのメッセージが書かれており、想いを大事にして取り組むことができる。2年生全体の目標に加え、個人の目標も記すようになっている。ゴール(目標達成)が目に見えて分かるので先を見て行動できる。

#### ④練習開始 → 活動のスムーズ化

練習の流れは、全パート共通のものを考えた。あいさつ→目標提示→歌う→注意点発表→歌う→次回の目標発表→終わりのあいさつ といった流れである。共通の流れにした理由は、どんな練習形態でもリーダーが意見や反省を考えやすく、全員の気持ちの切り替えも素早くできるからである。

#### ⑤反省会・通信作成 → 集団の意識向上

合唱に対する姿勢、進度、合唱形態のアイデアなどを話し合い、次回からの練習に生かすように心がけ、週1回程度行った。その内容を通信にし、全員に想いを伝えるようにした。合唱練習は、何度も同じことが反省に挙がる場合が多いので、目にする耳にする機会も増える。リーダーの考えや想いを書くことで、リーダーの反省内容のレベルも上がり、集団の意識も高まることをねらっている。

#### ⑥掲示物作成 → 集団の意欲向上

いつでもだれでも見られるように、学年の廊下にある掲示版に各リーダーからのメッセージ・合唱練習の様子を載せた。リーダーの頑張りも認められ、写真の表情を見ることで、意識も変化すると考えた。合唱以外のときでも合唱のことを考える機会になり、意欲向上につながったと考える。

#### ⑦反省会・解散 → リーダーの自信へ

当日の合唱を自己評価することに加え、客観的な評価を伝えることで、自分達の方で最後までできたことに対する自信がついたように思う。客観的な評価は、他学年の生徒の想いや鑑賞に来ていた保護者の感想、教師側が思ったことなどである。良い評価もそうでない評価も精一杯の取り組み終えた集団には、プラスに捉えることができたと感じる。行事終了とともに解散する合唱団であるが、普段の合唱練習に生かす姿が見られたリーダーもいた。

### (2) 実践1の反省点(→解決策)

■リーダーだけで、合唱練習の反省やアイデアを出して合唱を創ってしまった。

→①多くの生徒の意見を取り入れるための、アンケートの活用

→②企画運営を希望する有志を募っての活動

■通信の多くを教師側で作成し、生徒の手で創り上げる機会が少なかった。

→①広報部（通信作成）の設立

→②みんなが読みやすい通信の内容・デザインの再考

■組織作りで、通信作成やクラス連絡、全体練習の企画などを設定しなかった結果、スムーズに活動することができなかった。使用教室や持ち物、練習曲、時間変更などの連絡の不徹底も原因

→①企画部（企画検討、練習計画作成）、合唱部（合唱技術、練習の流れ作成）の設立

→②口頭連絡だけでなく、紙面連絡の導入（確実な連絡と分かりやすい説明）

■合唱団の活動時間が長く、業後の部活動にまで影響しすぎた。

→①反省時間の削減、制作物の分割化、家庭準備の時間を導入 ⇒ 組織の細分化

→②リーダーの課題意識を高めるための、合唱レポートを導入

→③入念な事前準備期間を設ける

### （3）企画（実践2）の流れとねらい

実践1を終え、反省を挙げ、新学年に向けての合唱企画（実践2）を行った。実践1をベースに、工夫した点は、オリジナル企画をリーダーが3つ企画したことである。

1) 縦割りパート練習

2) 合唱交流会

3) 合唱プロデューサーの3企画である。

1) 「縦割りパート練習」とは、「1、2年生の同じパートが合同で練習する企画」のことである。1月に3日連続設けることで、2年生は自覚がもてるようになると思う。初日の失敗を2日目に、2日目の自信を最終日にといった形である。1月後半には4回目、5回目を設け、成長を認め合う場とし、学年での合唱練習へ生かしていく。

2) 「合唱交流会」とは「クラスの交流」である。1年同士、1年生と2年生、2年生同士の形式である。これも新しい環境を作ることで、意欲を高める手だての1つである。生徒は、クラス交流をしたいと意欲をもっていることが分かったので実施することにした。

3) 「合唱プロデューサー」とは、「クラスの合唱練習を充実させるための企画を考える生徒」のことである。毎日朝のSTと帰りのSTで行われる合唱であるが、今までは1回歌うだけの流し状態であったところが多く、そのための「合唱練習」であることを意識させることと、「合唱が楽しい」と思えることを目標に企画した。自分のクラスではなく、他のクラスを担当することで、責任感をもたせた。流れは、クラスのSTでの合唱の様子を見て分析し何を企画すれば改善されるのかを考え、企画書を作成し提案するというものである。特に隊形のバリエーションの増加・誉める内容を増やす点を提案に入れた。バリエーション増加のねらいは、普段と違う雰囲気を作ることで、新鮮な気持ちで合唱に向き合えること。誉める内容を増やすことのねらいは、リーダーは、反省点だけを伝えがちであったので、成長を伝えることで、歌う楽しみ、喜びを生み出す工夫とした。反省点が多いと、覚え切れず、結局返事のみで終わり、次回に残らない反省もあった。3つ誉めて1つ反省程度に抑えることで、ポイントも絞られ集中もできる。

### （4）実践2の反省（①②実践1の反省→①②実践2の○成長点、●改善点）

■リーダーだけで、合唱練習の反省やアイデアを出して合唱を創ってしまった。

①多くの生徒の意見を取り入れるための、アンケートの活用

②企画運営を希望する有志を募っての活動

→①○数字として表れ、リーダーとして意識を高めるポイントが明確になった。

●リーダーの音楽の専門知識や技術向上の手だてが不十分で一般生徒を伸ばしきれなかった。



→②〇合唱を頑張りたい生徒が集まった。

●リーダーとして育成したい生徒を集められなかった

■通信の多くを教師側で作成、生徒の手で創り上げる機会が少なかった。

①広報部（通信作成）の設立

②みんなが読みやすい通信の内容・デザインの再考

→〇自分達で創り上げる楽しさ、伝えやすくする工夫など発見できる機会となった。

●週に1枚のペースで作成していたため、凝ったデザインにできなかった。

■組織作りで、通信作成やクラス連絡、全体練習の企画などを設定しなかった結果、スムーズに活動することができなかった。使用教室や持ち物、練習曲、時間変更などの連絡の不徹底も原因であった。

①企画部（企画検討、練習計画作成）、合唱部（合唱技術、練習の流れ作成）の設立

②口頭連絡だけでなく、紙面連絡の導入（確実な連絡と分かりやすい説明）

→①〇役割分担をしたことで、ミーティングがスムーズに行われ、一般生徒の動きも良くなった。

→②〇練習時に、黒板やホワイトボードにその日の目標や流れを書いたことで、リーダーを含む全員の動きがスムーズになった。

■合唱団の活動時間が長く、業後の部活動にまで影響しすぎた。

①反省時間の削減、制作物の分割化、家庭準備の時間を導入 ⇒ 組織の細分化

②リーダーの課題意識を高めるための、合唱レポート（プロデュース企画書）を導入

③入念な事前準備期間を設ける

→①〇リーダーが集まるミーティングでの活動が明確化され、時間短縮につながった。

→②〇責任感が生まれ、集団の良い緊張感が生まれた。

→③〇ゴール（最終目標）に向けて何をどう準備すれば良いか先を見通して準備する力がついた。

## 6. 研究の結果

10月～2月の間で、どれだけ成長できたかをアンケートを集計することで明らかにした。アンケートの点数は、

1（そう思わない）～4（そう思う）の4段階の平均で表した。アンケートは、20項目を設け、その中でも変化が著しいものを抽出した。

### （1）大きく成長した点

- ・1年生をリードする自覚がある（女子：2.8→3.2）
- ・先輩の合唱を追い越したい（男子：2.7→3.2）
- ・リーダーの情熱が伝わってくる（男子：3.1→3.4）
- ・合唱が楽しい（女子：3.3→3.5）
- ・リーダーの反省を意識している（男子：2.7→3.0）
- ・合唱に対する意識（女子：2.9→3.3）

### （2）課題が残った点

- ・先生がいなくても安定して頑張っている（全体：2.85→2.8）
- ・1年生をリードする自覚がある（男子：2.8→2.6）

## 7. 成果と課題

### （1）成果

#### 1) リーダーの姿

- ・細かな計画・準備を重ねた結果、ひとつの事に対して丁寧に考えることができるようになった。

- ・アンケートの分析により、生徒の想いを考え、企画を練ることができた。
- ・失敗から目を背けることなく、反省・改善を繰り返し、成功に導く術を発見できるようになった。
- ・ミーティングに必要な事柄を見つけ、時間を意識して活動できるようになった。
- ・中途半端に取り組まず、責任をもって、最後までやり遂げる我慢強さが育った。

## 2) 生徒の姿

- ・リーダーの想いがこもった直筆の通信の作成により、生徒からの応援のメッセージがいろいろな場面でリーダーに届くようになった。
- ・リーダーの熱意を感じ取り、協力する場面が増え、努力を認める姿がみられるようになった。

## (2) 課題

リーダーにとっての「充実感」とは一体何だったのかをふりかえる。それは、苦難を仲間と乗り越えた達成感、みんなのために頑張れたという充実感であったと思う。それは確かに達成できたので成功の糧になったが、一般生徒の充実感に対しては課題が残る。それは、合唱企画を通して、意欲・熟考は向上させることができたが、「上達を評価」することが十分でなかったからだ。リーダーから良かった点を褒められたり、行事の後のSTでの話などで、好評を伝えたりしたが、不足であったと反省している。不足点は3点である。

- ①集団から距離が遠い人の評価の不足
- ②事後評価に偏っていた点
- ③専門的な知識の不足

練習の様子や、指導の過程を知らない観客（保護者、地域の方、他学年の生徒・教員）が見て感じ取ることができた意識が本物の意識であり、それが意識できていることが評価されれば、自分達のやっていることは、良いことだと満足することができる。

- ①対策…学校行事で合唱を聴きにきた観客の方からコメントをもらったり、学校外での行事での合唱の機会を増やしたりしても良いと考える。
- ②対策…事前評価を実施。行事のパンフレットを作成し、その中に集団の目標や意欲を載せ、回覧板で回したり、来校者の都合が合えば、行事の準備段階を見てもらったりしても良いと考える。今、生徒は何に向かって努力をしているのかを説明し、それに対する現状を見てもらい、コメントをもらうことで、生徒の喜びが幸せにつながると考えた。
- ③対策…専門的な知識の習得に力を入れる。意欲や姿勢ばかりの指導では、興味関心は湧きづらいものであり、知識や技術の習得が意欲向上・幸せへの道であると考え。授業と同じで専門的な教科の知識が必要な行事も少なくないので、学習会を開いたり、教科担任に協力を仰いでいったりする必要がある。

以上が研究の課題である。

結果的に、仮説「意欲・熟考・評価を行事活動の企画運営に活用し、先見力と実行力を磨くことで、より良い学校創りの基盤となるだろう」は正しいといえる。結果から、一般生徒の向上心や責任感を高めることにつながったからである。

## 監修者

鍵野 英夫 犬山市立犬山中学校校長  
杉江 修治 中京大学国際教養学部教授  
博士（教育心理学）

---

## 「響き合い、高め合う学び」を創る研究的実践 (協同教育実践資料21)

---

2014年10月20日 第1刷発行

著者 犬山市立犬山中学校

監修者 鍵野英夫・杉江修治

発行 一粒書房

〒475-0837 愛知県半田市有楽町 7-148-1

TEL. 0569-21-2130

---

編集・印刷・製本（有）一粒社（代表 都築延男）

〒475-0837 半田市有楽町 7-148-1

TEL. 0569-21-2130

ISBN978-4-86431-339-1 C1337

協同教育実践資料 21

「響き合い、高め合う学び」を創る  
研究的実践

ISBN978-4-86431-339-1

C1337 ¥3500E

定価 3,500円+税